静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第161集

恒武西宮遺跡Ⅲ
笠井若林遺跡Ⅱ

平成13年度（主）浜松環状線道路改良（一般）及び
平成14・15年度（主）浜松環状線緊急地方道道路改築工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第161集

恒武西宮遺跡Ⅲ
笠井若林遺跡Ⅱ

平成13年度（主）浜松環状線道路改良（一般）及び
平成14・15年度（主）浜松環状線緊急地方道道路改築工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

平成８年度より、当研究所と地元の浜松市教育委員会とでは、浜松市恒武町、笠井町付近での開発に伴う発掘調査を断続的に行ってきた。そして、奈良時代から平安時代にかけての硯や墨書土器といった文字の存在を示す資料、動物形の土製品や赤く彩られた土器、ミニチュア土器といった、祭祀が行われたことを示す資料が多く出土した。硯や墨書土器は、文字を読み書きできる集団がいたことを示すものであり、これは官人の存在をうかがわせる貴重な資料である。そして、祭祀関連の遺物が多量に発見されたことは、上流階級、おそらくは郡の主導による祭祀が行われたことを示す資料である。これらの成果から、この近くに古代の官衙があったらしいと言われてきた。

平成14年度から平成15年度にかけて、当研究所は、恒武西宮遺跡と笠井若林遺跡を発掘調査した。そして、笠井若林遺跡では、ついに掘立柱建物群の一角と思われる部分を発掘調査した。今回調査したのは６棟だが、調査区外にもさらに多くの掘立柱建物跡があることは明らかである。出土遺物から９世紀後半の遺構と判明した。大型のものは南北３ｍ、東西９ｍに及ぶ規模であり、この一帯に、郡が管理する倉庫群があったと考えると、期待が大きく膨らむ。

その他にも、笠井若林遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡を調査し、笠井若林遺跡の居住域を明らかにした。また、13世紀の溝から平安時代の土器が一括で出土し、それらが、まったく別の場所で、さらに下層で検出した平安時代の遺構から出土した一括遺物といくつか接合したことは、13世紀に、耕作などの際に、平安時代の遺構を掘りあて、出土した遺物を溝にまとめて捨てた事例として学的に興味深い。

今回の報告をもって、平成８年度から続けてきた浜松環状線とその周辺遺跡の調査は終了となる。市街地での調査が滞りなく終了できたことは、地元住民の理解と協力なしにはできなかったことであり、改めて、皆様に御礼申上げたい。

そして、静岡県浜松土木事務所、静岡県教育委員会、浜松市教育委員会をはじめとする関係諸機関には、現地調査、整理作業を通じて、大変お世話になった。この場を借りて厚く御礼申し上げる。また、住宅に囲まれた調査区では、冬の寒風は何とかしのぐことができたものの、夏は大変な暑さとなった。その中で調査に尽力いただいた作業員の皆様、整理作業では、根気のいる作業に従事してくださった作業員の皆様にも御礼申し上げる。

平成17年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　　斎　藤　　忠

例　言

1．本書は、静岡県浜松市恒武町字西宮にある恒武西宮遺跡１－２次及び浜松市笠井町字若林にある笠井若林遺跡５次、６次調査の発掘調査報告書である。

2．調査は、平成13年度（主）浜松環状線道路改良（一般）及び平成14・15年度（主）浜松環状線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査した。

3．調査期間は下記のとおりである。

恒武西宮遺跡１－２次現地調査	平成14年４月１日～５月31日
笠井若林遺跡５－１次現地調査	平成14年４月１日～５月31日
笠井若林遺跡５－２次現地調査	平成14年10月１日～平成15年１月９日
笠井若林遺跡６－１次現地調査	平成14年６月１日～平成14年９月30日
笠井若林遺跡６－２次現地調査	平成15年１月10日～平成15年２月28日
上記現地調査の整理作業	平成16年３月24日～平成17年３月15日

4．調査体制は下記のとおりである。

平成14年度（現地調査）

所長　斎藤忠　副所長　飯田英夫　常務理事兼総務部長　粂田徳幸　総務課長　本杉昭一

総務部副主任　鈴木訓生

調査研究部長　山本昇平　調査研究部次長　栗野克巳　佐野五十三　調査研究四課長　足立順司

調査研究員　小川和彦　岡部貴之　富樫孝志

平成16年度（資料整理）

所長　斎藤忠　副所長　飯田英夫　常務理事兼総務部長　平松公夫

総務部次長兼総務課長　鎌田英巳　総務部副主任　鈴木訓生

調査研究部長　山本昇平　調査研究部次長　栗野克巳　佐野五十三　調査研究三課長　足立順司

調査研究員　富樫孝志

5．本書に使用した遺物写真図版は、すべて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所職員が撮影した。

6．基準点測量、基準杭打設、５－２次調査、６次調査の平面測量は、（株）フジヤマに委託した。

7．本書は、調査研究員の富樫孝志が執筆した。

8．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

9．発掘調査に関する資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡　例

1．調査区全域に10m方眼のグリッドを設定し、東西ラインをアルファベット、南北ラインをアラビア数字で表記した。原点座標は次のとおりである。　Ｘ＝－137850、Ｙ＝－64450

2．グリッドは、国土座標第Ⅷ系を使用しているため、本書で使用する方位は、国土座標の方位である。また、平成８年度に設定した測量成果を使用しているため、日本測地系による測量成果である。

3．遺構名称は、下記の略号を使用する。

ＳＨ・・・掘立柱建物跡　ＳＢ・・・竪穴住居跡　ＳＤ・・・溝状遺構　ＳＦ・・・土坑

ＳＸ・・・性格不明遺構　ＳＥ・・・井戸　ＳＲ・・・自然流路

4．遺構番号は、当研究所2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』からの続き番号であり、この報告書と遺構番号が共通するものは同一遺構である。

目　次

序
例言
凡例
目次

第Ⅰ章　調査に至る経過
　第１節　調査に至る経過
　　１　恒武遺跡群の調査……1
　　２　笠井若林遺跡の調査……1
　第２節　周辺での発掘調査……1
第Ⅱ章　位置と環境
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……4
第Ⅲ章　調査の方法と経過
　第１節　調査の方法
　　１　現地調査……7
　　２　整理調査……7
　第２節　調査の経過
　　１　恒武西宮遺跡……7
　　２　笠井若林遺跡……7
　　３　整理作業……8
　第３節　基本土層
　　１　恒武西宮遺跡……9
　　２　笠井若林遺跡……9
第Ⅳ章　恒武西宮遺跡の調査成果
　第１節　成果の概要……11
　第２節　古墳時代の遺構と遺物……11
第Ⅴ章　笠井若林遺跡の調査成果
　第１節　成果の概要
　　１　５次調査……15
　　２　６次調査……15
　第２節　奈良・平安時代の遺構と遺物
　　１　５－２次調査奈良・平安時代２面目の概要……16
　　２　５－２次調査奈良・平安時代１面目の概要……32
　　３　５－１次調査奈良・平安時代の概要……32
　　４　６－１次調査奈良・平安時代の概要……36
　　５　６－２次調査奈良・平安時代２面目の概要……49
　　６　６－２次調査奈良・平安時代１面目の概要……55
　第３節　鎌倉時代以降の遺構と遺物
　　１　５－２次調査鎌倉時代以降調査面の概要……59

2　５－１次調査鎌倉時代以降調査面の概要……64
第４節　遺構外出土遺物
1　５次調査出土遺物……68
2　６次調査出土遺物……68
第Ⅵ章　まとめ
第１節　笠井若林遺跡５・６次調査全体について……73
第２節　掘立柱建物跡について……73
1　規模……73
2　規格……76
第３節　恒武遺跡群・笠井若林遺跡とその周辺遺跡での時期別遺構変遷
1　古墳時代……76
2　奈良・平安時代……78
3　鎌倉時代以降……78
第４節　鎌倉・室町時代遺物について……81

挿図目次

第１図　調査地点位置図……3
第２図　周辺遺跡分布図……6
第３図　土層柱状図……10
第４図　恒武西宮遺跡１－２次調査遺構分布・遺構断面図……13
第５図　SR１断面図……14
第６図　１－２次調査出土遺物……14
第７図　５－２次調査奈良・平安時代２面目遺構分布図……17
第８図　SH207平面図……18
第９図　SH207断面図……19
第10図　SH208実測図……21
第11図　SH209実測図……22
第12図　SH210、SH211実測図……24
第13図　SH212実測図……26
第14図　５－２次調査奈良・平安時代掘立柱建物跡出土遺物……26
第15図　SF274、SF275実測図とSD108断面実測図……30
第16図　５－２次調査奈良・平安時代土坑出土遺物……31
第17図　５－２次調査奈良・平安時代１面目遺構分布図……33
第18図　５－１次調査奈良・平安時代遺構分布図……34
第19図　SB229、SB230実測図……35
第20図　５－１・２次調査奈良・平安時代遺構出土遺物……35
第21図　６－１次調査遺構分布図（１）……37
第22図　６－１次調査奈良・平安時代遺構分布図（２）と西壁断面図……38
第23図　SB231実測図……39
第24図　SB232実測図……40
第25図　SB233、SB238実測図……41

第26図　SB234実測図…… 43
第27図　SB235、SX231、SX232実測図…… 45
第28図　SB236、SB237、SB242実測図…… 46
第29図　SB231～SB233、SB238出土遺物…… 47
第30図　SB234、SD278、SX231、SX232出土遺物 …… 48
第31図　６－２次調査奈良・平安時代２面目遺構分布図…… 50
第32図　SB239～SB241実測図 …… 51
第33図　６－２次調査住居跡出土遺物…… 52
第34図　SD309断面図、SE202実測図…… 53
第35図　６－２次調査奈良・平安時代２面目の溝出土遺物…… 54
第36図　SE202出土遺物…… 54
第37図　６－２次調査奈良・平安時代１面目遺構分布図…… 56
第38図　６－２次調査奈良・平安時代１面目土坑実測図…… 57
第39図　６－２次調査奈良・平安時代１面目の土坑出土遺物…… 58
第40図　５－２次調査鎌倉・室町時代遺構分布図…… 60
第41図　SD102遺物出土状況…… 61
第42図　５－２次調査鎌倉・室町時代溝出土遺物…… 63
第43図　SD107～SD109断面図…… 65
第44図　５－１次調査鎌倉・室町時代遺構分布図と主要遺構断面図…… 66
第45図　５次調査包含層出土遺物…… 69
第46図　６次調査包含層出土遺物（１）…… 71
第47図　６次調査包含層出土遺物（２）…… 72
第48図　恒武遺跡群・笠井若林遺跡とその周辺遺跡の主要遺構（古墳時代）…… 77
第49図　恒武遺跡群・笠井若林遺跡とその周辺遺跡の主要遺構（奈良・平安時代）…… 79
第50図　恒武遺跡群・笠井若林遺跡とその周辺遺跡の主要遺構（鎌倉時代以降）…… 80
第51図　恒武東覚遺跡の鎌倉・室町時代資料（追加）…… 82

挿表目次

第１表　周辺遺跡の調査歴…… 2
第２表　恒武西宮遺跡１－２次調査検出遺構一覧…… 12
第３表　恒武西宮遺跡１－２次調査出土遺物一覧…… 12
第４表　掘立柱建物跡の柱間距離…… 27
第５表　掘立柱建物跡の柱穴観察表…… 28
第６表　周辺遺跡で検出された奈良・平安時代掘立柱建物跡の面積別一覧…… 74
第７表　奈良・平安時代の面積別遺構軒数…… 75
第８表　笠井若林遺跡、恒武東覚遺跡出土の鎌倉・室町時代遺物一覧表…… 82
第９表　恒武東覚遺跡の鎌倉･室町時代資料（追加）の一覧表…… 82
第10表　笠井若林遺跡検出遺構一覧表 …… 83
第11表　笠井若林遺跡出土遺物一覧表…… 86

写真図版目次

図版１　笠井若林遺跡周辺航空写真
（南東方向、太平洋を望む）
図版２　笠井若林遺跡５次調査区周辺の景観
（北方向を望む）
笠井若林遺跡６次調査区周辺の景観
（南方向を望む）
図版３　笠井若林遺跡５次調査区標準土層
笠井若林遺跡６次調査区標準土層
図版４　笠井若林遺跡５－２次調査区全体
（北方向を望む）
笠井若林遺跡６－１次調査区全体
（北方向を望む）
図版５　５－２次調査掘立柱建物跡出土遺物
５－２次調査平安時代土坑出土遺物
図版６　SB231～SB233、SB238出土遺物
SB234出土遺物
図版７　SB239～SB241出土遺物
SD102出土遺物
図版８　包含層出土奈良・平安時代の遺物
包含層出土鎌倉時代以降の遺物
図版９　恒武西宮遺跡１－２次調査古墳時代
調査面完掘状況
恒武西宮遺跡SR１完掘状況
図版10　５－２次調査掘立柱建物跡分布状況
（真上から）
５－２次調査掘立柱建物跡分布状況
（南から）
図版11　SH207完掘状況
SH208完掘状況
図版12　SH209完掘状況
SH210、SH211完掘状況
図版13　SH212完掘状況
掘立柱建物跡検出例（SH212）
図版14　土坑SF274遺物出土状況
土坑SF275遺物出土状況
図版15　５－２次調査鎌倉時代以降の調査面
SD102遺物出土状況
図版16　５－１次調査奈良・平安時代の調査面
完掘状況
５－１次調査鎌倉時代以降の調査面
完掘状況
図版17　SB229完掘状況
SB242完掘状況
図版18　SB231完掘状況
SB231遺物出土状況
図版19　SB235床面の状況
SB236完掘状況
図版20　SB234遺物出土状況
SD268、SD269と湧水地？完掘状況
図版21　５次調査出土の平安時代遺物
図版22　SB230～SB233、SB238出土遺物
図版23　SB234、SB241出土遺物
図版24　SE202、SD102、SD101、SF297、
包含層出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経過

第１節　調査に至る経過

今回の調査は、浜松市の市街地を大きく巡る浜松環状線の、浜松市恒武町、笠井町部分を開通させる工事に伴うものである。この調査は恒武遺跡群と笠井若林遺跡にまたがっており、平成８年度～14、15年度に行った。今回報告するのは、恒武西宮遺跡の１－２次調査と笠井若林遺跡の５、６次調査である。

１　恒武遺跡群の調査

平成７年、浜松市教育委員会が行った確認調査の結果を受けて、当研究所は、平成８年度に恒武西宮遺跡の１次調査、平成９年度と10年度には恒武西浦遺跡の発掘調査を実施した。そして、平成10年度～11年度には、恒武西宮遺跡２次調査を実施した。

１次調査の際、調査できない部分があったため、平成14年度に当研究所がその部分を調査した。これが今回、１－２次調査として報告する部分である。

２　笠井若林遺跡の調査

平成９年の恒武西浦遺跡の発掘調査によって、その北側にも遺跡が広がっている可能性が高くなったため、同年、当研究所が確認調査を行い、遺跡を確認したため、浜松市教育委員会が、笠井若林遺跡を新規登録した。同遺跡の本調査は、当研究所が行うこととなり、平成10年度に笠井若林遺跡の１次調査、平成11年度に２次調査、平成12年度に３次調査を実施した。

今回、報告するのは、平成14年度に行った５次調査と６次調査である。

第２節　周辺での発掘調査

平成８年度以降、浜松市恒武町、笠井町では、浜松環状線の改良工事やそれに関連する工事などに伴う発掘調査が行われてきた。発掘調査は、浜松市教育委員会と当研究所が事業ごとに行い、各遺跡で調査次数が通し番号になるように調整したため、調査地点と調査次数が入り組んだ状況になっている。第１表（2p）に周辺遺跡での発掘調査の一覧を示し、第１図に各遺跡の調査地点と調査次数を表示した。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

恒武遺跡群と笠井若林遺跡は、天竜川が運搬した堆積物が形成した沖積平野（天竜川平野）にある。

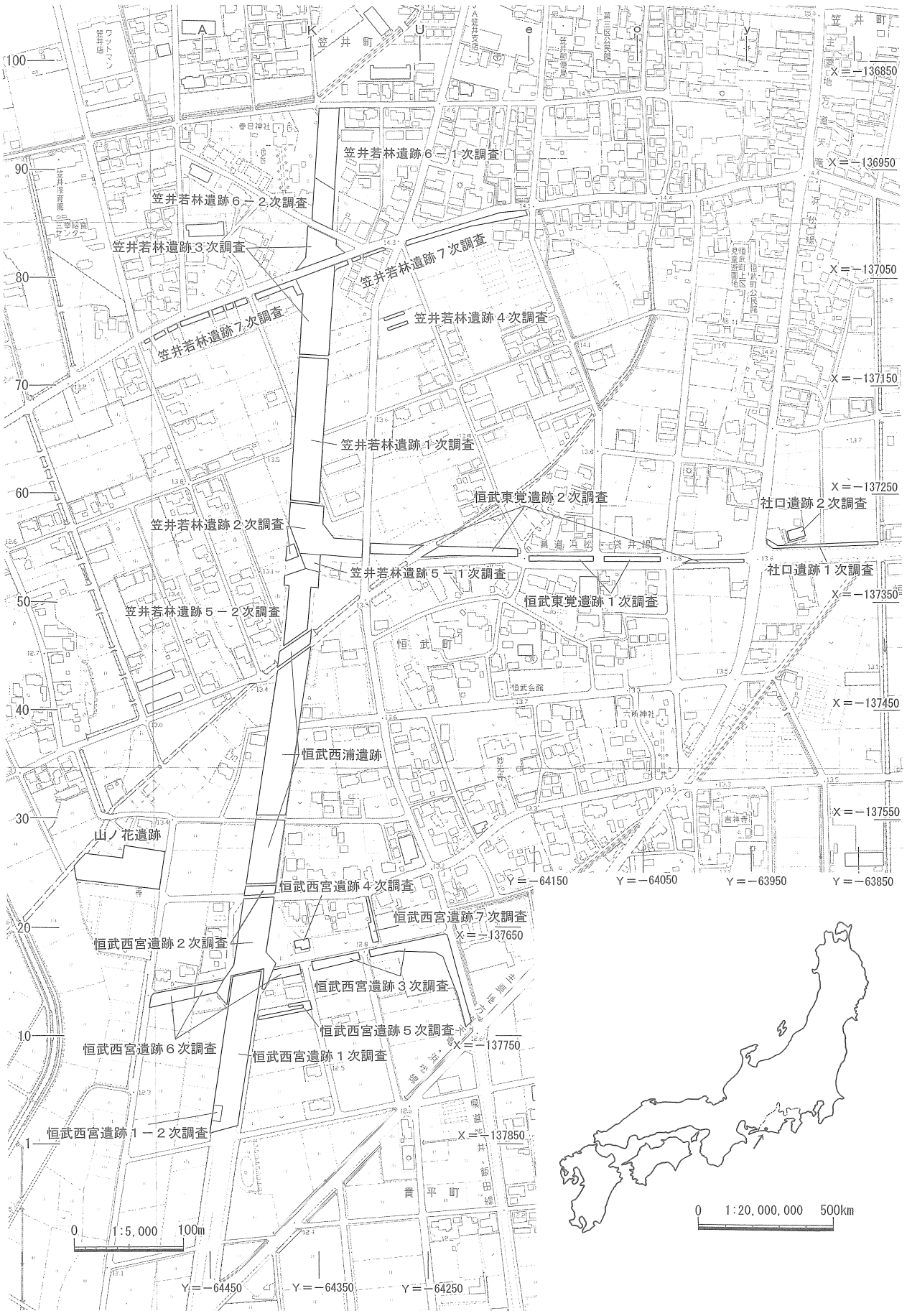
天竜川は、長野県の諏訪湖から山間部を流れ、静岡県の天竜市二俣付近で平野部に出ると、三方原台地と磐田原台地の間に多量の土砂を堆積させ、扇状地に似た平野を作っている。この平野は南に向かって緩やかに傾斜し、笠井若林遺跡のあたりから南は平坦に近くなり、海に至る。

天竜川は、古来より磐田原台地と三方原台地の間で氾濫を繰り返し、「暴れ天竜」の異名をとる。洪水の記録は、古くは『続日本紀』に見える。これによると、和銅８年（715年）の地震により堤防が決壊し、洪水が起こったことや天平宝字５年（761年）にも堤防が決壊し、洪水になったことが記されている。当時の天竜川は、麁玉河（あらたまがわ）と呼ばれており、今よりも西側、現在の安間川のあたりを流れていたとされている。以来、昭和20年の洪水まで、天竜川は平野部で洪水を繰り返してきた。現在は治水事業により、頑丈な堤防が作られて流路が１本になっているが、堤防の間でいくつもの細かい流路に枝分かれしている。そして、増水の度に流路の枝分かれが変わっているのが見られる。堤防が作られる以前は、三方原台地と磐田原台地の間で、増水のたびに流路が変わるという状況を繰り返していたのであろう。そのため、天竜川平野の旧地形は、微高地と流路が入り組んだ複雑な地形となっており、旧地形の復元は容易ではないものの、安定した微高地は存在していたようで、その微高地上に遺跡が存在している。

第１表　周辺遺跡の調査歴

遺跡名・調査次	所在地	調査期間	時代	調査主体	文献
蛭子森古墳	豊町	1962.3～4	古墳	浜松市教委	浜松市教育委員会1995『浜松市指定文化財－古墳－』
笠井下組	笠井町	1994.1	奈良	浜松市教委	浜松市教育委員会1995『笠井町下組遺跡』
御殿山	笠井町	2000.5	鎌倉	浜松市教委	（財）浜松市文化協会2000『御殿山遺跡』
八ツ面	笠井町	2001.5	古墳	浜松市教委	（財）浜松市文化協会2001『八ツ面遺跡』
笠井若林１次	笠井町	1998.10～1999.3	奈良 鎌倉	当研究所	当研究所2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』
笠井若林２次	笠井町	1999.6～10	奈良・平安 戦国	当研究所	当研究所2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』
笠井若林３次	笠井町	2000.4～11	奈良～戦国	当研究所	当研究所2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』
笠井若林４次	笠井町	2000.5	平安	浜松市教委	（財）浜松市文化協会2000『笠井若林遺跡4次』
笠井若林５－１次	笠井町	2002.4～5	奈良～近世	当研究所	本報告書
笠井若林５－２次	笠井町	2002.10～1	奈良～近世	当研究所	本報告書
笠井若林６－１次	笠井町	2002.6～9	奈良・平安	当研究所	本報告書
笠井若林６－２次	笠井町	2003.1～2	奈良・平安	当研究所	本報告書
笠井若林７次	笠井町	2002.7～8	奈良・鎌倉	浜松市教委	（財）浜松市文化協会2003『笠井若林遺跡7次』
社口１次（確認調査）	恒武町	1983.2	古墳 奈良	当研究所	（財）駿府博物館付属静岡県埋蔵文化財調査研究所1983『社口遺跡』
社口２次	恒武町	1993.11	奈良	浜松市教委	（財）浜松市文化協会1994『社口遺跡』
恒武東覚１次	恒武町	1999.11～2000.3	古墳以降	当研究所	当研究所2004『恒武東覚遺跡』
恒武東覚２次	恒武町	2003.2～10	奈良 鎌倉・室町	当研究所	当研究所2004『恒武東覚遺跡』
恒武西浦	恒武町	1997.7～1998.9	古墳 奈良	当研究所	当研究所2000『恒武西宮遺跡・西浦遺跡』
恒武西宮１次	恒武町	1996.9～1997.3	古墳 奈良	当研究所	当研究所2000『恒武西宮遺跡・西浦遺跡』
恒武西宮１－２次	恒武町	2002.4～5	古墳	当研究所	本報告書
恒武西宮２次	恒武町	1998.10～1999.5	古墳～戦国	当研究所	当研究所2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』
恒武西宮３次	恒武町	1998.10～1999.1	古墳 戦国	浜松市教委	（財）浜松市文化協会2002『恒武西宮遺跡』
恒武西宮４次	恒武町	1999.5	古墳	浜松市教委	
恒武西宮５次	恒武町	1999.12	古墳	浜松市教委	
恒武西宮６次	恒武町	2000.11～12	古墳	浜松市教委	（財）浜松市文化協会2002『恒武西宮遺跡』
恒武西宮７次	恒武町	2000.11	戦国	浜松市教委	（財）浜松市文化協会2002『恒武西宮遺跡』
山ノ花	恒武町	1996.8～12	古墳 奈良	浜松市教委	（財）浜松市文化協会1998『山ノ花遺跡』

※調査期間は、現地調査の期間である。


笠井若林遺跡６－１次調査
笠井若林遺跡６－２次調査
笠井若林遺跡３次調査
笠井若林遺跡７次調査
笠井若林遺跡４次調査
笠井若林遺跡１次調査
恒武東覚遺跡２次調査
笠井若林遺跡２次調査
笠井若林遺跡５－１次調査
恒武東覚遺跡１次調査
笠井若林遺跡５－２次調査
恒武西浦遺跡
山ノ花遺跡
恒武西宮遺跡４次調査
恒武西宮遺跡７次調査
恒武西宮遺跡２次調査
恒武西宮遺跡３次調査
恒武西宮遺跡５次調査
恒武西宮遺跡６次調査
恒武西宮遺跡１次調査
恒武西宮遺跡１－２次調査
社口遺跡２次調査
社口遺跡１次調査
X＝－136850
X＝－136950
X＝－137050
X＝－137150
X＝－137250
X＝－137350
X＝－137450
X＝－137550
X＝－137650
X＝－137750
X＝－137850
Y＝－64150
Y＝－64050
Y＝－63950
Y＝－63850
Y＝－64450
Y＝－64350
Y＝－64250
0　1:5,000　100m
0　1:20,000,000　500km

第１図　調査地点位置図

第２節　歴史的環境

縄文時代以前

旧石器時代には、天竜川は現在よりも数十m低い所を流れ、深い谷を形成していたと考えられる。現在では、その上に厚く沖積層が堆積しているため、旧石器時代の遺跡があるとしても、現在では確認のしようがない。

縄文時代、特に縄文海進以降は沖積平野の形成が進むが、天竜川平野では縄文時代の遺跡は確認されていない。恒武遺跡群、笠井若林遺跡の南方にある宮竹野際遺跡（浜松市1994）で縄文時代晩期後半の土器が報告されている程度で、恒武遺跡群、笠井若林遺跡周辺では報告例がない。まだ、生活に適した微高地が形成されていなかったのであろう。

弥生時代

この時期の遺跡も恒武遺跡群、笠井若林遺跡の南方にしか存在しない。弥生時代中期の調査例では、宮竹野際遺跡の弥生時代中期の水田跡があげられる。微高地が安定し始めてきたため、人間が微高地で活動を始めたようである。弥生時代後期になると遺跡が増え始める。天王中野遺跡、山の神遺跡（浜松市1989）、松東遺跡などが発掘調査され、沖積平野に集落を作り始めたことがうかがえる。

恒武遺跡群、笠井若林遺跡周辺では、弥生時代の報告例はない。まだこの地域には安定した微高地が形成されていなかったと考えられる。

古墳時代

浜松市恒武町、笠井町のあたりに遺跡が見られるのは、古墳時代以降である。特に恒武遺跡群では、古墳時代から集落が見られるようになる。微高地が、居住に適するまでに安定してきたのであろう。

古墳時代になると、天竜川平野の北側にある三方原台地や、天竜川をはさんだ東側にある磐田原台地では、大型古墳や群集墳が作られるようになる。これらの古墳とそれを作った集団が住む集落との関係は明らかではないが、これらの古墳を望む場所となると、天竜川平野が該当する。そして、古墳造営に連動するように、天竜川平野に本格的な集落が形成され始める。

また、笠井若林遺跡の北東には、蛭子森古墳（第２図－５）がある。沖積地にある古墳は珍しく、台地に造られた大型古墳や群集墳の被葬者とは別の有力者がいたと考えられる（浜松市2001）。この古墳と集落の関係も明らかではないが、当時の集落に関する調査としては下記のものがある。

恒武西宮遺跡３次調査（浜松市2002）では、前期の方形周溝墓や多量の土器を伴う祭祀跡を調査した。山ノ花遺跡（浜松市1998）と恒武西浦遺跡（当研究所2000）では、流路跡で５世紀の祭祀跡を調査し、多量の土器、木製品、石製品が出土した。大規模な祭祀とそれを司る有力者がいたことを裏付ける貴重な資料である。恒武西宮遺跡１次調査と恒武西浦遺跡（当研究所2000）では、中期から後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などを調査し、集落の一端を明らかにした。

恒武遺跡群と笠井若林遺跡では、この時期の遺構は恒武遺跡群に偏る傾向がある。

奈良・平安時代

浜松市笠井町付近では、この時期から本格的に集落が形成されるようになり、恒武町付近ではこの時期の遺構は少なくなる。これは、古墳時代とは逆の傾向である。

奈良時代に律令体制が敷かれると、静岡県西部は遠江国として中央集権体制に組み込まれた。国郡制の下で、浜松市恒武町、笠井町あたりも磐田郡、長田郡、麁玉郡のいずれかに属したと考えられている。

恒武遺跡群や笠井若林遺跡とその周辺では、官衙関連と考えられる遺跡がある。恒武遺跡群の南にある宮竹野際遺跡では、奈良時代後半～平安時代前半の規格性の高い掘立柱建物跡が検出され、円面硯や布目瓦も出土したことから、郡衙との関連が考えられる。宮竹野際遺跡に近い木船遺跡では版築状の遺構や瓦が確認されており、寺院跡の可能性が指摘されている。宮竹野際遺跡の調査成果と合わせて、郡

衙の中心に近いことを示唆している。

恒武町、笠井町付近でも官衙関連の発見が目立つ。社口遺跡（第２図－18）で円面硯が出土した他、恒武西浦遺跡（第２図－２）では掘立柱建物跡の他、墨書土器や人面墨書土器、土馬、人形など、祭祀をうかがわせる遺物が出土している。恒武東覚遺跡（当研究所2004）でも掘立柱建物群と思われる遺構や、墨書土器、祭祀用土製品を発見している。また、笠井若林遺跡４次調査（第２図－１）では、緑釉陶器が出土している。

今回報告する笠井若林遺跡５次調査では、平安時代の掘立柱建物群の一部を調査した。大型のものを含む点や規格性がうかがえる配置などから、郡衙の一部に当たっている可能性がある。

笠井若林遺跡１～３次調査（当研究所2002）と今回報告する６次調査では、多数の竪穴住居跡を調査し、浜松市笠井町付近に奈良時代の集落が形成されていたことを明らかにした。

鎌倉・室町時代

平安時代末の12世紀には、浜松市笠井町付近に荘園が成立していたと考えられ、文献史料によれば、羽鳥荘、美園御厨といった荘園が成立していたらしい。現在でも浜松市豊西町には羽鳥の地名があり、浜北市南部には美園の地名が残っている。

この時期の集落は、宮竹野際遺跡、山の神遺跡、笠井若林遺跡（第２図－１）、御殿山遺跡（第２図－13）、恒武西宮遺跡（第２図－２）、恒武西浦遺跡（第２図－２）などで確認されている。宮竹野際遺跡（浜松市1988）と山の神遺跡では、12世紀～13世紀前半の集落が確認されており、山の神遺跡では、一辺一町の方形区画溝が検出されている。鎌倉・室町時代の方形区画溝はいくつかの遺跡で確認されており、恒武遺跡群と笠井若林遺跡でも数箇所で確認されている。

江戸時代

江戸時代になると浜松藩領となり、笠井町付近には市が立てられた。そして、木綿の栽培・集積地として栄えた。この頃の技術や知識は、近代以降、浜松の織物産業の繁栄につながることになる。

参考文献

（財）浜松市文化協会1988『宮竹野際遺跡』
（財）浜松市文化協会1994『宮竹野際遺跡２』
（財）浜松市文化協会1989『山の神遺跡』
（財）浜松市文化協会1998『山ノ花遺跡』
（財）浜松市文化協会2001『八ッ面遺跡』
（財）浜松市文化協会2002『恒武西宮遺跡』（恒武西宮遺跡３、６、７次調査）
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2000『恒武西宮・西浦遺跡』（恒武西宮遺跡１－１次調査、恒武西浦遺跡）
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』（恒武西宮遺跡２次調査、笠井若林遺跡１～３次調査）
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2004『恒武東覚遺跡』（恒武東覚遺跡１、２次調査）

1　笠井若林遺跡
（●は今回の調査地点）
2　恒武遺跡群
（●は今回の調査地点）
3　八幡西遺跡
4　隋国遺跡
5　蛭子森古墳
6　八幡南遺跡
7　服織神社境内遺跡
8　大通西遺跡
9　宮前遺跡
10　八ッ面遺跡
11　平松遺跡
12　茶ノ木田遺跡
13　御殿山遺跡
14　御殿山遺跡
15　笠井町下組遺跡
16　笠井西浦遺跡
17　笠井町広野遺跡
18　社口遺跡
19　万斛遺跡

0　1:25,000　1km

第２図　周辺遺跡分布図

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

１　現地調査

浜松土木事務所との調整により、５次調査を５－１次調査と５－２次調査、６次調査を６－１次調査と６－２次調査に分けた。

調査にあたって使用するグリッドは、平成８年、恒武西宮遺跡、恒武西浦遺跡の調査時に設定したグリッドを使用した（当研究所2000）。これは、恒武西宮遺跡１次調査の南西方向、Ｘ＝－137850、Ｙ＝－64450を原点として、Ｘ軸は東へ、Ｙ軸は北へ展開した。

グリッドラインの呼び方は次の通である。Ｘ軸は、原点を通るラインをＡラインとして、東に向かって、10ｍごとにＢライン、Ｃライン、ＤラインとアルファベットのＡ文字順に記号をつけた。Ｚライン以東は、ａライン、ｂライン、ｃラインとアルファベットの小文字順とした。Ｙ軸は北に向かって10ｍごとに、１ライン、２ラインとアラビア数字順に番号をつけた（第１図：３ｐ）。

調査区の呼び方は、グリッドの南西交点をとり、例えば10ｍグリッドの南西交点が、Ｃラインと５ラインの交点ならばＣ５区と呼ぶこととした。

なお、これは平成14年度の測量法改正以前の座標であるから、日本測地系によっている。

各調査区の調査期間は下記のとおりである。

恒武西宮遺跡１－２次調査　平成14年４月１日～５月31日
笠井若林遺跡５－１次調査　平成14年４月１日～５月31日
笠井若林遺跡５－２次調査　平成14年10月１日～平成15年１月９日
笠井若林遺跡６－１次調査　平成14年６月１日～９月30日
笠井若林遺跡６－２次調査　平成15年１月10日～２月28日

調査方法は、重機で表土を除去した後、遺構を検出、掘削した。測量はトータルステーションを使い、1/20の図を基本とし、必要に応じて1/10の詳細図をとった。写真撮影は、中型カメラと小型カメラを併用し、必要に応じて大型カメラを使用した。現地作業のうち、表土除去、残土搬出、安全フェンス設置、防塵ネット設置、基準杭設置、そして、５－２次調査と６次調査の平面測量は外部に委託した。

２　整理作業

現地撤収後、周智郡森町にある森現地事務所に遺物、記録類等を搬送し、平成16年度に整理作業を行った。遺構ごとに遺物を接合し、樹脂を使って復元、補強した。この作業と平行して、遺構、遺物などの図面を作成し、遺物を写真撮影した。

第２節　調査の経過

１　恒武西宮遺跡

①１－２次調査

平成14年４月から調査した。１次調査の際、用地の関係で調査できなかった部分で、面積は狭い。表土除去後、すぐに溝を数本検出した。遺物の量が少ないため、各溝を掘削し、図面、写真等の記録をとり、５月末に終了した。

２　笠井若林遺跡

①５－１次調査

２次調査の調査区に隣接する一角を先行して、恒武西宮遺跡１－２次調査と並行して４月から行った。

表土除去後、南北、東西方向の鎌倉・室町時代以降の溝を検出した。２次調査（当研究所2002）でSD７、

８として報告した南北方向の溝は、この調査区内で、90度東側に折れることから、方形区画溝と判断した。他の溝も２次調査で検出した溝とつながって、方形区画を作っている可能性が高い。

鎌倉・室町時代面の図面、写真等の記録をとった後、すぐに全体を掘り下げ、下層の奈良・平安時代の住居跡２軒と数本の溝を検出した。図面、写真等の記録をとり、５月末に調査を終了した。

②５－２次調査

建物移転の関係で、５－２次調査は、６－１次調査の後で、平成14年10月から行った。表土除去後、北西－南東方向の鎌倉・室町時代以降と思われる溝を数本検出した。このうち、今回SD108として報告する溝は、当初江戸時代以降と考えていたが、13世紀の溝を江戸時代に掘り直していると判明する。また、SD102として報告する溝の末端からは、平安時代の土器が一括出土し、平安時代の溝の可能性を考えるが、平安時代の遺構が検出できる面ではなく、溝の他の場所から13世紀の山茶碗が出土したことから、13世紀の溝と判明するが、13世紀の溝から平安時代の土器が一括出土した原因は整理作業まで課題として残る。

鎌倉・室町時代面の調査は10月末で終了し、その後20cmほど掘り下げ、奈良・平安時代面の調査に移る。この面では、北西～南東方向の溝を検出した。鎌倉・室町時代面で検出したSD108は、断面観察の結果、遅くとも平安時代から断続的に続く溝で、鎌倉・室町時代面で検出したのは、これを鎌倉・室町時代と江戸時代以降に掘り直したものであり、平安時代にも数回掘り直していると考えた。

この面の調査中に、調査区の壁にかかった遺構の中で、立ち上がりがこの面まで上がってこない遺構があることから、下にもう１面あることがわかり、さらに掘り下げた。

奈良・平安時代の２面目では、掘立柱建物跡群を検出し、郡衙の一角に当たったかと考える。掘立柱建物跡は５棟か６棟で、埋土の違いから、２組に分かれる可能性を考える。他にも土坑から平安時代の一括遺物が出土した。SD108は、この面でさらに幅が広がっているのを確認した。平成15年１月終了。

③６－１次調査

５－１次調査の後、建物移転の関係で、５－２次調査の前にこちらの調査を行った。平成14年６月に開始する。表土除去後、北西～南東方向に平行する溝を10数本検出する。奈良・平安時代の遺物が出土することから、江戸時代以降の耕作で、鎌倉・室町時代以降の遺構は残っていないと判断する。また、これらの溝群の南側で焼土や炭が分布しているのを確認し、住居跡があると推定する。

溝群の掘削と平行して、住居跡を検出したが、切り合いの確認が難航する。切り合いの確認後、住居跡を調査する。江戸時代以降の耕作によって、上部はほとんど破壊されているが、床面付近の土器は残っているため、住居跡の時期判定は容易だろうと考える。平成14年９月終了。

④６－２次調査

建物移転の関係で、６－１次調査終了後、５－２次調査をはさんで、平成15年１月から行った。表土を除去して、鎌倉・室町時代と思われる面で遺構検出を試みるが、遺構なしと判断し、奈良・平安時代面の調査に移る。遺物の出土から、遺構があると考えるが、遺構検出は難航する。精査の結果、住居跡や土坑、溝を検出する。住居跡は３軒切り合っており、近い時期に建て替えていると判断する。住居跡の床面付近から奈良時代の遺物が出土する。土坑の中には、掘立柱建物跡の柱穴と思われるものもあるが、調査区内では組み合わない。平成15年２月終了。

３　整理作業

現地作業終了後、遺物や記録類を森現地事務所に運び、平成16年度に整理作業を行った。

土器の接合、樹脂による復元をし、この時点で実測する遺物点数を決定し、色塗りと平行して実測を行った。また、遺物の時期判定から、遺構の時期を決定した。

上記の作業と並行して、報告書掲載用の図面を作成した。

土器の色塗りが終ったところで、本部のスタジオで報告書に掲載する遺物の写真を撮った。

接合作業の時、現地調査で課題として残した、13世紀の溝、SD102から出土した平安時代の一括遺物について検討した。SD102から出土した遺物どうしではあまり接合しなかったため、破片の状態で一括して捨てたと考えた。その後、出土場所から10mほど西で、さらに下層で検出した平安時代の土坑SF274やSF275から出土した遺物が、SD102で出土した遺物と接合することがわかった。また、他にも時代の違う遺構の間で遺物が接合する例が見られた。

第３節　基本土層

１　恒武西宮遺跡

調査した地点は、現在の標高、12.1mで、微高地にあたっている。

第３図のａ層は表土で、当研究所2000『恒武西宮・西浦遺跡』でⅠ層として報告した土層に当たる。江戸時代から現代にいたる耕作土であり、現在も調査区周辺では水田耕作が行われている。この下に黄褐色土のｂ層がある。鉄分が集積した層で、水田の床土と考えられる。当研究所2000で報告したⅡ層に当たる。ｂ層を除去すると灰色砂質土のｃ層が現れ、この面で古墳時代の遺構を検出できる。当研究所2000で報告したⅢ層に当たる。本来の掘り込み面はもっと上だったと考えられるが、ｃ層上面より上の層は、その後の耕作で撹乱を受けている。従って、奈良時代以降の土層は残っていない。この下に暗灰色砂質土のｄ層があり、当研究所2000のⅣ層に当たる。この層以下には遺物は含まれていない。この下は、青灰色砂のe層で、鉄分の沈着が見られる。当研究所2000のⅤ層に当たる。この下にある砂礫層のｆ層が地山である。これは当研究所2000のⅥ層にあたる。

なお、当研究所2000では、Ⅰ～Ⅵ層を土壌学の専門家により細分してあるが、今回の調査区は、狭いこともあり、細分はしていない。

２　笠井若林遺跡

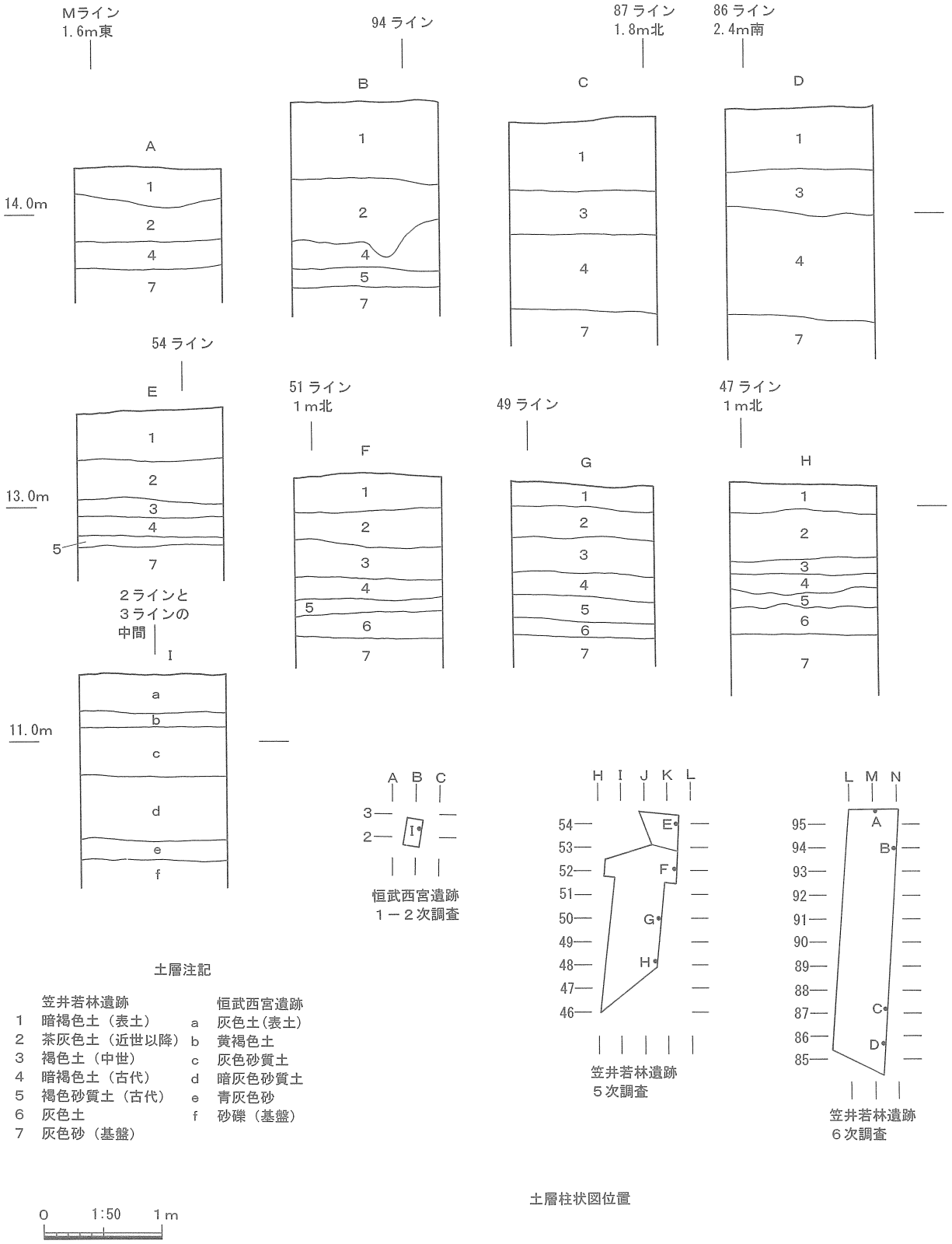
今回の調査区は、周辺の地形と比べるとやや高く、微高地になっていると思われる。調査区の地形を北から見ていくと、６区北端が現在の標高で14.4m、５区南端で13.3mと、北から南に向かって、約500mの間で１m程低くなっている。５区南端は現在の流路に接しており、これに向かって地形が下がっている。

笠井若林遺跡の中での基本土層は共通しているが、笠井若林遺跡の北端に当たる６区と南端に当たる５区を比べると、全体的に６区の方が乾燥しており、５区の方が水分を多く含んでいる。分層は、水分の多い５区の方が容易であり、遺構検出の難易も同様に５区の方が容易だった。

笠井若林遺跡の土層番号は、５層を除いて笠井若林遺跡１～３次調査（当研究所2002）で報告した土層番号に一致する。

第３図（10p）の１層（表土）を除去すると、茶灰色の２層が現れる。これは江戸時代以降の耕作土である。２層の下に褐色の３層があり、この上面で鎌倉・室町時代の遺構を検出できる。６－１区では江戸時代以降の耕作で３層が失われている。３層の下に暗褐色の４層があり、この上面で奈良・平安時代の遺構を検出できる。その下には砂質で褐色の５層があり、この面でも古代の遺構を検出できる。この層は、当研究所2002で報告した調査地点には存在しない。逆に当研究所2002で報告された５層は、今回の調査区には存在しない。５層は全体的に薄く、10～20cm程度の厚さである。５区では全体的に分布しているが、６区では一部にしか残っていない。５層の下に灰色の６層があり、この層から下は無遺物層で、その下の砂層（７層）が地山である。

88ラインから93ライン付近までは、７層が１層直下まで盛り上がっており、この部分には遺跡は残っていないが、１層に奈良・平安時代の遺物が多く含まれるため、本来は遺構があったと思われる。


Mライン
1.6m東
94ライン
87ライン
1.8m北
86ライン
2.4m南
A
B
C
D
14.0m
54ライン
51ライン
1m北
49ライン
47ライン
1m北
E
F
G
H
13.0m
2ラインと
3ラインの
中間
I
11.0m
恒武西宮遺跡
1－2次調査
笠井若林遺跡
5次調査
笠井若林遺跡
6次調査
土層注記
笠井若林遺跡
1 暗褐色土（表土）
2 茶灰色土（近世以降）
3 褐色土（中世）
4 暗褐色土（古代）
5 褐色砂質土（古代）
6 灰色土
7 灰色砂（基盤）
恒武西宮遺跡
a 灰色土（表土）
b 黄褐色土
c 灰色砂質土
d 暗灰色砂質土
e 青灰色砂
f 砂礫（基盤）
0 1:50 1m
土層柱状図位置

第3図　土層柱状図

第Ⅳ章　恒武西宮遺跡の調査成果

第１節　成果の概要

１次調査の際、用地の関係で、発掘できなかった場所、約100㎡の調査であり、１－２次調査としている。調査面積が狭いうえに、調査区の中央付近に大きな撹乱が入って、遺構が失われているため、調査できた面積は少ない。１次調査の成果とほぼ同様で、古墳時代の溝を検出した。溝のうち１本は自然流路で、１次調査の際、SR１として報告した溝である。他の溝は畑耕作に伴う小規模な溝と考えられる。

奈良・平安時代の遺構は検出されなかったが、１次調査の結果でも周辺では奈良･平安時代の遺構はほどんど検出されなかったため、その後の耕作で失われたか、本来、遺構が形成されなかったと考えられる。鎌倉・室町時代以降の遺構も耕作で失われたらしく検出されなかった。

第２節　古墳時代の遺構と遺物

SR１（第４図：13p）

調査区を北東から南西に、斜めに横切るように検出した。当研究所2000で報告した１次調査のSR１につながる自然流路である。明らかに同じ遺構であるため、遺構番号も同一にした。

深さは90cm程あり、断面は「V」字形になっていることから、常時一定の水量があったと推定できる。埋土は自然堆積で、上から褐色、オリーブ灰色、青灰色の３種類に大別できる（第５図：14p）。これは埋没段階を反映しているのであろう。

この流路からは第６図－１（14p）に示した５世紀後半～６世紀の土師器の坏が出土している。口唇部に指頭痕が残っている他は、風化で調整痕などは明確でない。丹塗りのような色に焼けている。これ以外にも埋土から７世紀と思われる土師器が出土したが、図化できたものはない。

出土遺物から考えて、埋没時期は、当研究所2000で報告した内容と同様で、７世紀である。

SD346（第４図：13p）

SR１と平行して検出した溝で、当初はSR１が２本の溝に分かれる可能性を考えたが、この溝は撹乱を挟んで途切れていることと、南壁で、SR１と断面を比較検討した結果、独立した溝とした。当研究所2000の報告で、小規模な溝状遺構の一括報告に、この溝につながると思われる溝が報告されている。１次調査では、この溝は南西方向に延び、調査区外に出ている。１次調査では、この溝を小規模溝群として一括しており、遺構番号はついていない。

この溝からは第６図－２（14p）に示した土師器の高坏と同図３に示した土師器の壺が出土している。高坏は坏の部分だけで、壺は胴部だけである。壺は、風化が激しく底部付近の撫で以外の調整は観察できない。いずれも時期決定に重要な部分を失っているが、２は５世紀後半～６世紀、３は４～５世紀と思われる。遺物から見て、この溝の埋没時期は５世紀以降と考えられる。

SD347（第４図：13p）

調査区の南端で３ｍほど検出でき、調査区内で終っている。１次調査で発掘した部分に延びており、当研究所2000でもこの溝の続きが報告されている。その際は小規模溝群として一括されており、独自の遺構番号はついていない。１次調査で検出できたのも３ｍ程であり、今回の調査で、この溝は全長６ｍ程度の溝と判明した。第４図のＣ－Ｄ断面に示したように、埋土は砂質土である。図化できる遺物は出土していないが、埋没時期は古墳時代後期と思われる。

SD348（第４図：13p）

調査区の北端から南に延びている小規模な溝である。１次の調査区に延びており、当研究所2000で、これにつながる溝が報告されている。１次調査の調査区では、北西～南東方向に延びているため、１次

の調査区と今回の調査区の境界付近で、この溝はほぼ90度方向を変えていることになる。

深さ15cm程度の規模の小さな溝であるが、埋土は４層に分かれる（第４図のＥ－Ｆ断面）。時間をかけて埋没していったのであろう。

図化できる遺物は出土していないが、埋没時期は古墳時代後期と思われる。

SD349（第４図：13p）

調査区の西端から南東方向に延びる、深さ11cm程度の小規模な溝である。調査区内で撹乱に切られて終っている。

図化できる遺物は出土していないが、埋没時期は古墳時代後期と思われる。

SD350（第４図：13p）

調査区の西端から南東方向に延びる、深さ20cm程度の小規模な溝である。調査区内に２ｍほど延びて終っている。第４図のＩ－Ｊ断面を見ると、埋土は６層に分かれ、時間をかけて埋没したことがうかがえる。

SD351（第４図：13p）

調査区の西端から南東方向に延びており、調査区内で５ｍほど検出した所で終っている。検出した際は１本の溝と考えたが、第４図のＫ－Ｌ断面を見ると２本に分かれていることがわかる。これに対して溝の先端付近の同図、Ｍ－Ｎ断面では２本に分かれていないことから、「Ｙ」字のように途中から２本に分かれていると考えられる。

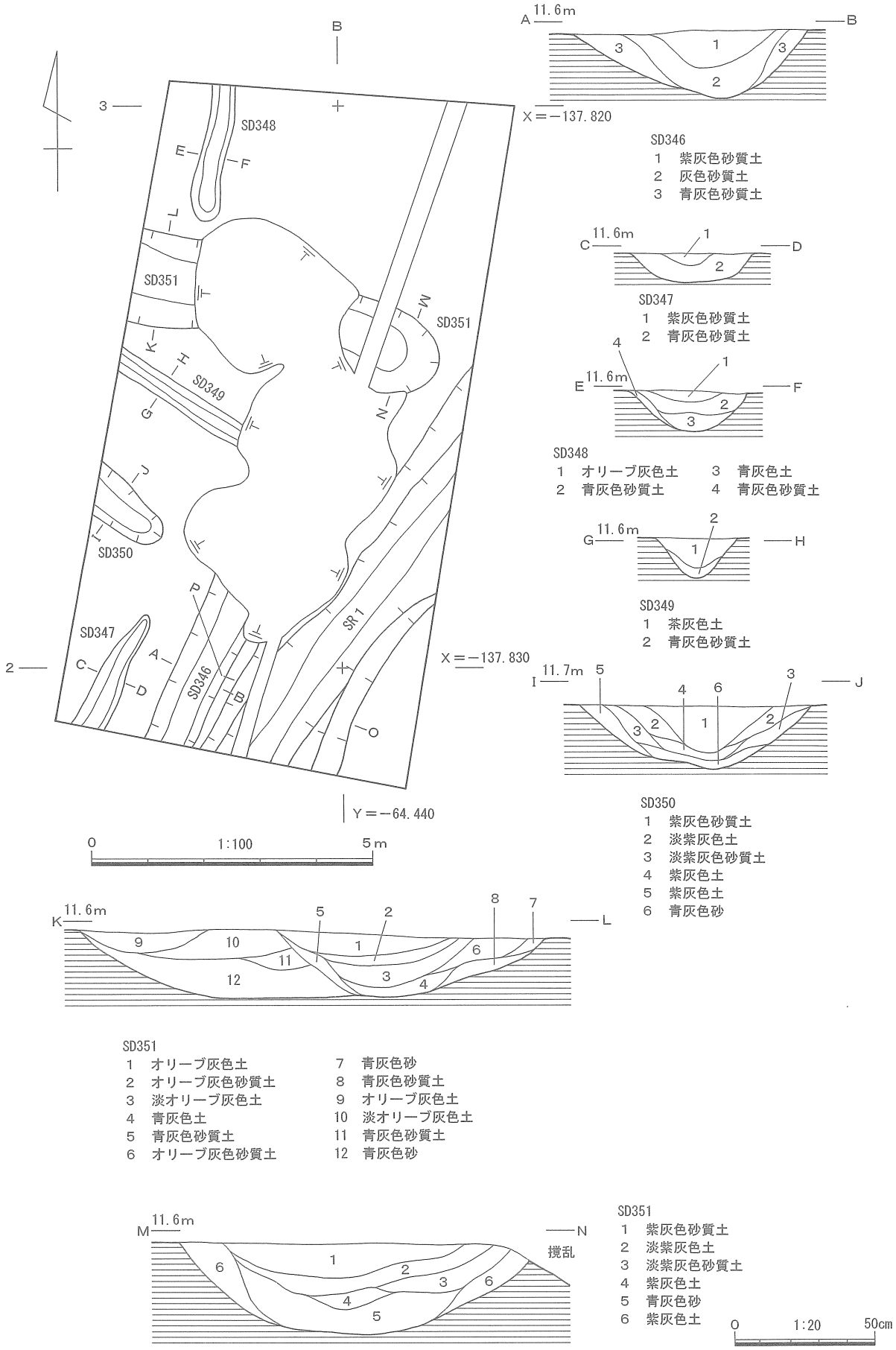
以上のような小規模な溝群は、当研究所2000の１次調査でも報告されており、畑の畝の間にある溝と考えられている。

第２表　恒武西宮遺跡１－２次調査検出遺構一覧

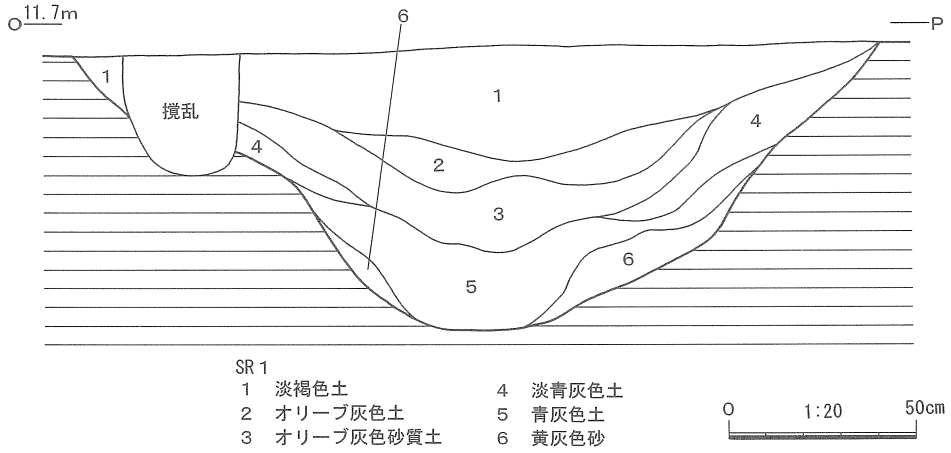
調査次	遺構番号	大きさ	深さ	方向	時期	備考
１次－２	SD346	90cm	22cm	N26°E	５世紀以降？	
１次－２	SD347	52cm	10cm	N27°E	（古墳時代）	
１次－２	SD348	44cm	15cm	N8°E	（古墳時代）	
１次－２	SD349	38cm	11cm	N57°E	（古墳時代）	
１次－２	SD350	82cm	20cm	N52°W	（古墳時代）	
１次－２	SD351	110cm	28cm	N27°W	（古墳時代）	
１次－２	SR１	227cm	74cm	N37°W	７世紀	

第３表　恒武西宮遺跡１－２次調査出土遺物一覧

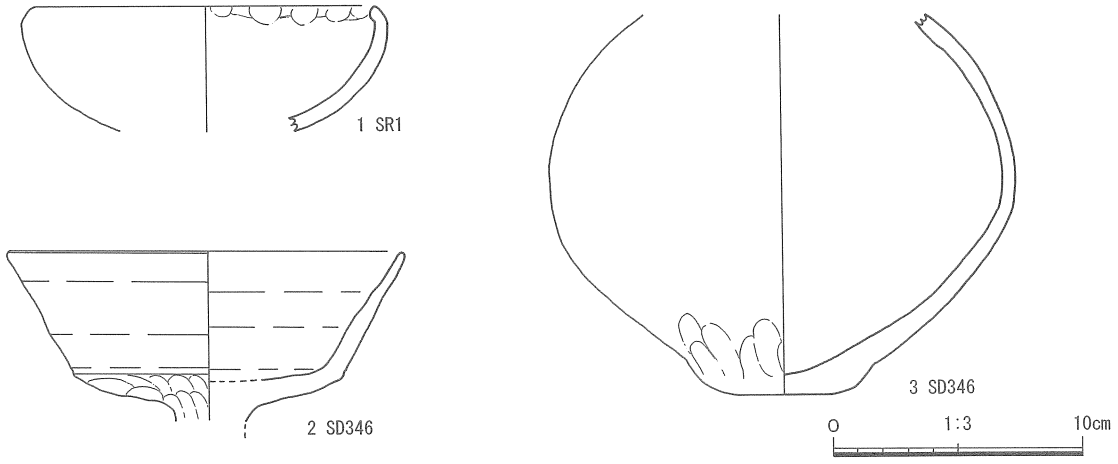
図番号	図中番号	図版番号	出土遺構	種別	器種	時期	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	色調	残存率	反転実測
6	1		SR1	土師器	坏	５世紀後半～６世紀	13.4	14.4		明褐	20%	○
6	2		SD346	土師器	高坏	５世紀後半～６世紀	15.6			にぶい黄橙	10%	○
6	3		SD346	土師器	壺	４世紀～５世紀		18.8	3.7	明黄褐	50%	○



第４図　恒武西宮遺跡１－２次調査遺構分布・遺構断面図



第５図　SR１断面図



第６図　１－２次調査出土遺物

第Ⅴ章　笠井若林遺跡の調査成果

第１節　成果の概要

１　５次調査

①奈良・平安時代

奈良・平安時代の面は２面認められた。

２面目で特筆すべきは、掘立柱建物群の検出である。恒武遺跡群と笠井若林遺跡のこれまでの調査で、大規模な祭祀跡、硯や墨書土器などの資料から、付近に郡衙の存在が予想されてきただけに、その一部に当たる可能性がある。

今回の調査区では、調査区の南端付近で掘立柱建物群の一角を調査しただけであるが、６棟の掘立柱建物跡を検出した。調査区の西側にも広がっていることは確実である。

桁の方向と柱穴の埋土の違いから、２つの群に分かれると考えられるが、いずれも９世紀代であることは間違いない。

平安時代に掘られたSD108は、江戸時代以降に人為的に埋められるまで断続的に続く溝であり、平安時代に数回、掘り直した痕跡が見られ、鎌倉・室町時代にも１回掘り直した痕跡が見られた。その後、江戸時代以降にも一度掘り直され、最後は人為的に埋められている。土地を区画する溝と考えられる。

他には、平安時代の土坑や奈良時代以降と思われる畑の畝状遺構を検出した。土坑には、祭祀関連と思われるものがあり、９世紀中葉の一括遺物を含むものが見られた。

奈良・平安時代の１面目では、溝を検出した。すべて畑か水田に水を引くための溝と考えられる。

②室町・鎌倉時代以降

この面では、北西～南東方向の溝を10数本検出した。すべて水田か畑の耕作に関わる溝と考えられる。この中のSD102からは、平安時代の遺物が一括で捨てられた状況で出土した。13世紀の溝から平安時代の遺物がまとまって出土するのは不可解であったが、この遺物が、後に調査した平安時代の遺構から出土した遺物と接合したことから、13世紀の耕作で平安時代の遺構を破壊し、その時に出土した遺物を溝に捨てたものと考えた。

また、この面で検出した溝では、江戸時代以降に掘り直した溝がいくつか見られた。

２　６次調査

この調査区では、室町・鎌倉時代以降の遺構はなかった。江戸時代以降の耕作が奈良・平安時代の層まで及んでいることから、耕作によって失われていると思われる。

この調査区では、表土除去後、すぐに奈良・平安時代の集落が現れた。内容は竪穴住居跡と溝群である。竪穴住居跡は８世紀から９世紀にかけてのもので、連続して建て替えたと思われるものが見られた。上層を江戸時代以降の耕作で失い、床面付近が残っていただけであるが、床面付近の遺物は残っていた。８世紀にかかる住居跡は竈付きで、方形の住居跡であったが、９世紀にかかるものは竈を持たないか、竈状の土坑を持つもので、平面形も不整形に近くなり、主要住居が竪穴住居から掘立柱建物に移る過渡期の様相を表わしていると思われる。

今回の調査では、笠井若林遺跡の集落の北端を確認することができた。笠井若林遺跡３次調査では、集落の南端を調査しており、両調査の成果から、笠井若林遺跡の集落の南北範囲を推定することができる。

溝群は、10本以上の溝が北西～南東方向に平行するもので、数本の溝がつながり、水を分配している状況が見られた。これらの溝は、水田や畑に水を引く性格をもっていたと考えられる。また、湧水地と思われる箇所も見られた。

第２節　奈良・平安時代の遺構と遺物

１　５－２次調査奈良・平安時代２面目の概要（第７図：17p）

調査区の標高は、北端で12.5m、南端で12.1mであり、北から南に向かって緩やかに傾斜している。検出した遺構は、掘立柱建物跡、溝、土坑、畝状遺構である。畝状遺構以外は平安時代に属すると考えられる。遺構は、調査区の南側で集中して検出され、北側には少ない。

この調査では、掘立柱建物跡を６棟検出した。埋土の種類や桁行の方向から、２つの群に分かれる可能性がある。土坑からは平安時代の良好な一括遺物が出土したものがある。また、遺構のうち、畝状遺構は、掘立柱建物跡や土坑などに切られている部分があることから、若干古く、畝状遺構だけが奈良時代、すなわち８世紀代になると思われる。

掘立柱建物跡

SH207（第８図：18p、第９図：19p）

概要

調査区南端で検出した。遺構検出時には、標準土層が褐色砂質土であるのに対して、柱穴の埋土は灰色を基本とする色であったため、明瞭に検出できた。規模は梁間２間（3.3m）×桁行５間（9.1m）で、今回検出した掘立柱建物跡の中で最大である。桁行の方向はN75°Eである。南東隅の柱穴だけが調査区外に出ているが、壁面崩落の危険を避けるため、拡張していない。

規格

柱穴間の距離については、柱の痕跡があるものはその中心、柱の痕跡がないものは柱穴の中心を基準として、隣り合う柱穴でその距離を測り、結果を第４表（27p）にまとめた。

第４表は、今回検出した掘立柱建物跡に規格があるかどうか検討するためを作成したものである。平安時代には高麗尺と天平尺が認められているが、どちらの尺度を採用するにしても、中央の国衙クラスの遺構は別として、地方でこの尺度がどれほど厳密に守られたかは定かでない。さらに、高麗尺５尺と天平尺６尺がほぼ一致する上に、柱根が残っている訳ではないため、柱間距離を機械的に柱穴の中心で測っただけである。したがって、高麗尺と天平尺の差、５cm程度は測定誤差の内に解消されてしまう。

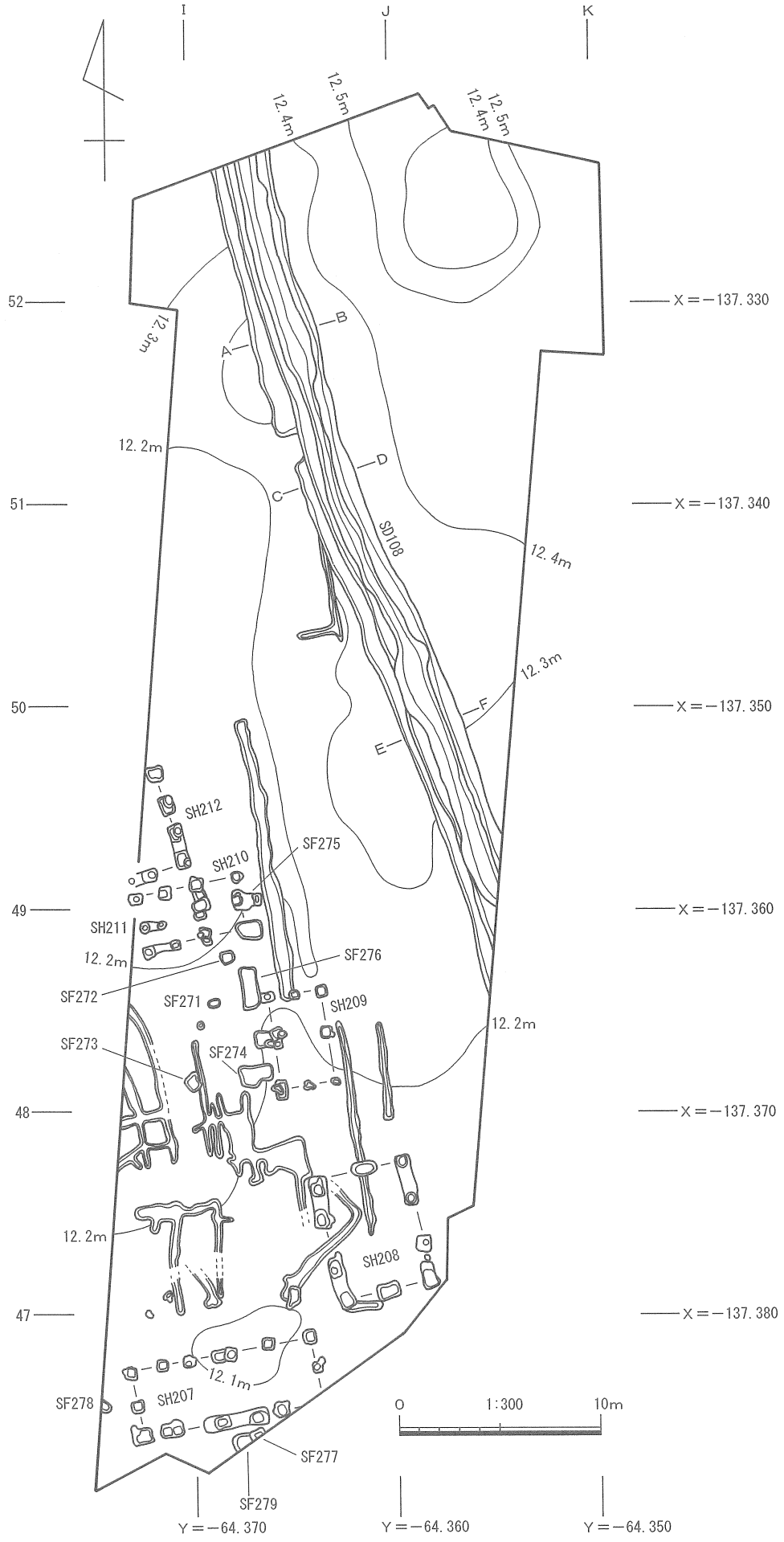
そこで、参考までに第４表（27p）を見ると、この掘立柱建物跡の柱間距離は、高麗尺よりも天平尺との誤差の方が小さいことを指摘できる。このことから、１尺を30cm程度とする規格は意識されていたようである。

柱穴所見

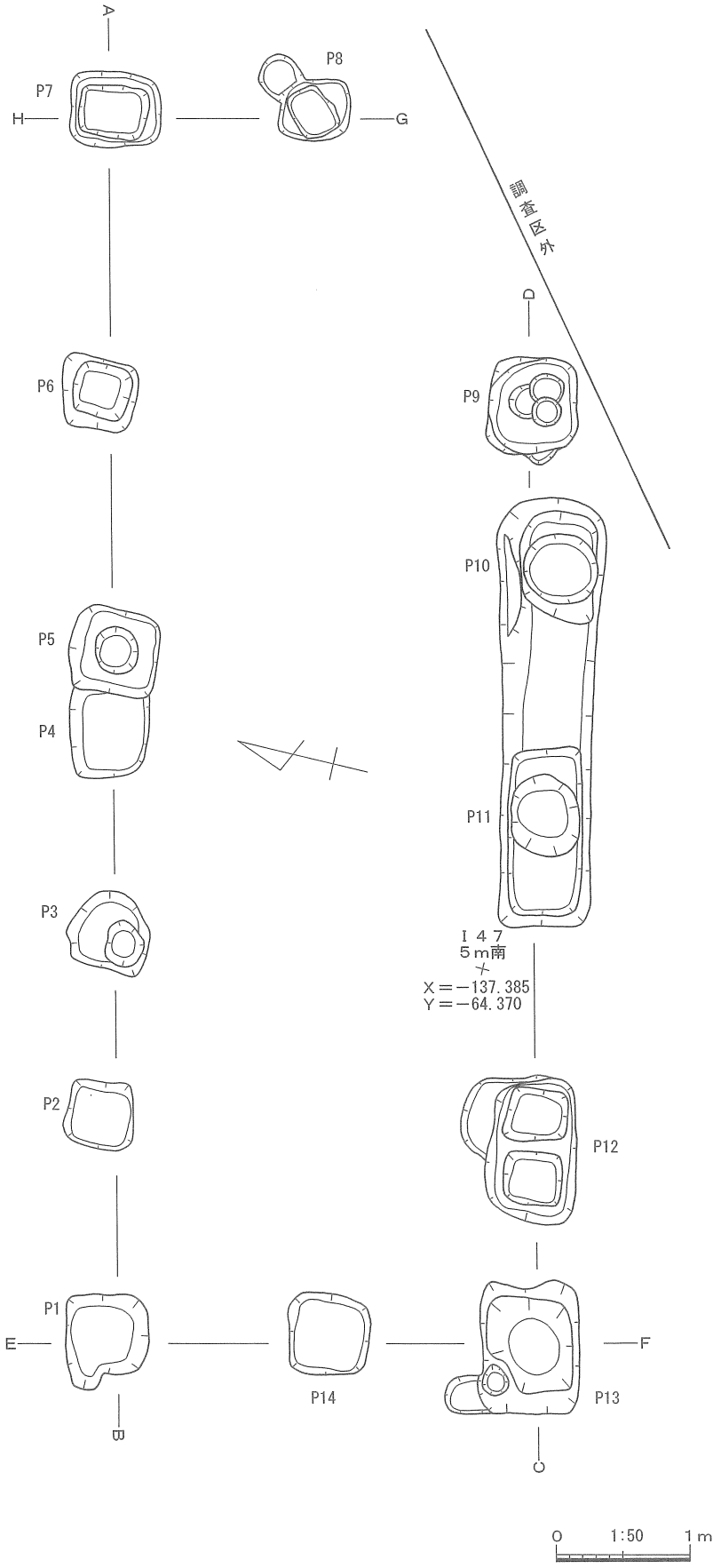
柱穴の所見を第５表（28p）にまとめた。P1、P4、P13、P14以外は底部、または断面で柱の痕跡を確認できる。断面観察では、柱の痕跡が、検出面の上面まで貫通するもの（P2、P7、P9）と、途中で埋土に切られているもの（P3、P6、P8、P12）がある。また、P10とP11だけは布堀りでつながっている。これまで、恒武遺跡群、笠井若林遺跡および、その周辺の調査で、掘立柱建物跡は多くの検出例があるが、布堀は初めての検出である。

P1、P8、P9、P12、P13では、方形堀方の一角に飛び出した部分が見られる。この部分は、柱穴本体に向かって斜めに掘り込んだようになっており、柱穴との切り合い関係はないため、柱穴と別の遺構とは考えられない。また、埋土は柱穴と共通しているため、柱穴が埋没するときには、この飛び出した部分は存在していたことになる。柱穴を抜き取る時に、柱を斜めに倒し、その時に形成されたか、柱を抜き取るために、脇から掘り込んだ跡と思われる。P12は柱の痕跡が２つ並んでいる。隣接して同時に２本の柱が立っていたとは考えられず、柱の建て替えの痕跡であろう。P9も同様で、柱の痕跡が３つ見られるが、柱の建て替えと考えられる。

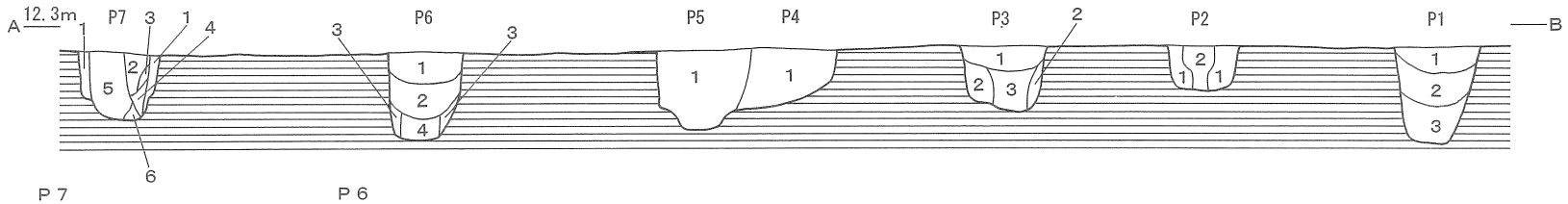
柱穴の深さは、P2の30cm程度から，P12の90cm強まで一定していない。柱穴の埋土は、灰色土かオ



第７図　５－２次調査奈良・平安時代２面目遺構分布図



第８図　SH207平面図



P７
1　灰色土（炭を含む）
2　淡灰色土
3　淡灰色土（鉄分沈着）
4　暗灰色土
5　灰色土と淡灰色土の混合層
6　灰色砂質土

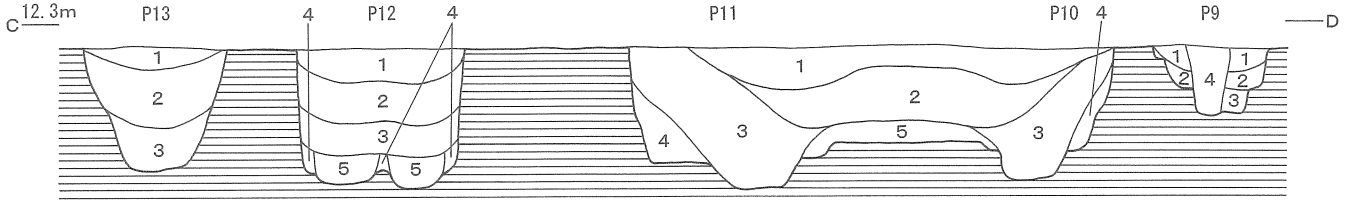
P６
1　淡灰色土
2　淡灰色土（暗灰色土を含む）
3　灰色砂質土
4　暗灰色土

P４
1　灰色土
P５
1　灰色土（暗灰色土を含む）

P３
1　淡灰色砂質土
2　淡灰色砂
3　灰色土

P２
1　淡灰色土と暗灰色土の混合層
2　淡灰色砂質土

P１
1　灰色砂質土
2　暗灰色土
3　暗灰色粘質土

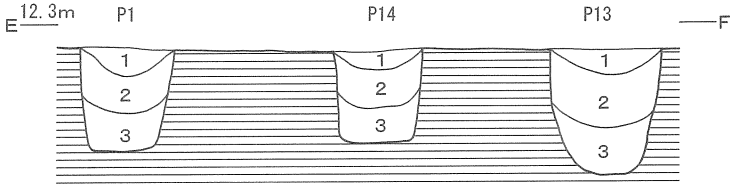


P13
1　灰色土
2　淡オリーブ灰色土
3　灰色砂質土

P12
1　灰色土
2　淡オリーブ灰色土
3　灰色砂質土
4　灰色粘質土
5　灰色砂質土

P10、P11
1　オリーブ灰色土
2　灰色砂質土
3　灰色砂質土と暗灰色土の混合層
4　灰色粘質土
5　灰色砂質土

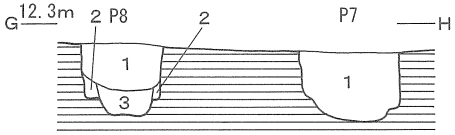
P９
1　オリーブ灰色砂質土
2　灰色砂質土
3　灰色粘質土
4　淡灰色砂質土



P１
1　灰色砂質土
2　暗灰色土
3　暗灰色粘質土

P14
1　灰色砂質土
2　暗灰色土
3　暗灰色粘質土

P13
1　灰色土
2　淡オリーブ灰色土
3　灰色砂質土



P８
1　灰色土
2　灰色砂質土
3　灰色粘質土

P７
1　灰色土と灰白色土の混合層

0　1:50　1m

第９図　SH207断面図

リーブ灰色土を基本としており、すべての柱穴に共通している。

出土遺物

出土遺物や他の掘立柱建物跡との関係から、９世紀代であることは間違いないであろう。ただし、図示できる遺物は出土していない。

SH208（第10図：21p）

概要

調査区の南端で検出した。SH207と同様、遺構検出時には、標準土層が褐色砂質土であるのに対して、柱穴の埋土は灰色を基本とする色であったため、明瞭に検出できた。

規模は、梁間２間（4.2m）×桁行３間（6.0m）で、桁行の方向はN15°Wで、近くで検出したSH207とほぼ直行している。

規格

柱穴間距離は、高麗尺と天平尺と同じ程度の誤差であるため、どちらの尺度を採用しているのかわからないが、1尺30cmと考えると誤差が小さくなるため、やはり、1尺30cm程度の尺度を採用しているようである。

柱穴所見

柱穴は、P1とP10、P3とP4、P8とP9は布堀りでつながっている。また、P6には、布堀りでP5とつなごうとしたかのような、方形の堀方が見られる。P6とP9、Ｐ10には、SH207に見られた抜き取り痕と思われる部分と同様に、柱穴から飛び出した部分がある。やはり、柱穴の中心に向かって斜めに掘り込んでおり、柱穴と同じ埋土であることから、柱を抜き取る時、柱を傾けた際に柱が壁を壊した部分か、柱を抜き取るために脇から掘り込んだ跡と考えられる。

西側のP1、P10，P9、P8の柱穴は、直線的には並ばずにやや斜めになっている。梁にあたるP2とP7だけには柱の痕跡が見られない。

柱穴の深さは、P5の37cmからP1の90cmまで一定していない。柱穴の痕跡は、柱穴の底部では検出できたが、断面では検出できなかった。柱を抜いた後に埋土が堆積したことが考えられる。

出土遺物

出土遺物は、P5から、第14図－１（26p）に示した９世紀後半の灰釉陶器の碗が出土している。内面の釉は、発色の良い部分と発色の悪い部分が見られる。これらの出土遺物から、９世紀後半の遺構と判断できる。なお、後述するが、この灰釉陶器は、上層の鎌倉・室町時代面で検出した13世紀のSD102に一括廃棄されていた灰釉陶器の破片と接合している。

SH209（第11図：22p）

概要

検出は、SH207、208ほど明瞭ではなかったが、柱穴の埋土に炭や焼土を含む特徴があったため、検出は比較的容易であった。埋土は、SH207、208で見られた灰色を基本とする埋土とは違い、灰褐色である。

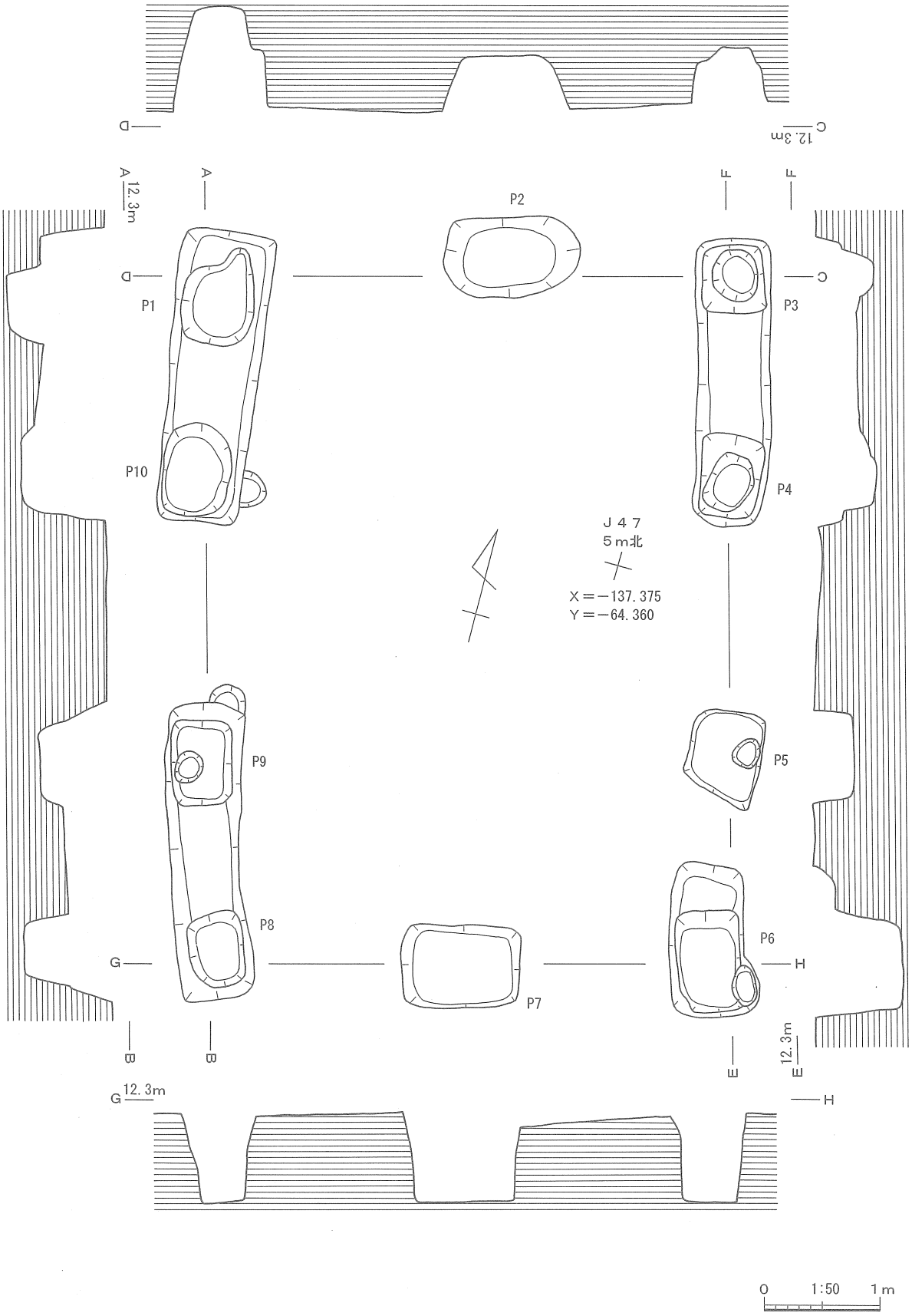
規模は、梁間２間（2.8m）×桁行２間（4.6m）である。桁行の方向はで、N15°W、SH208と同じ方向である。

規格

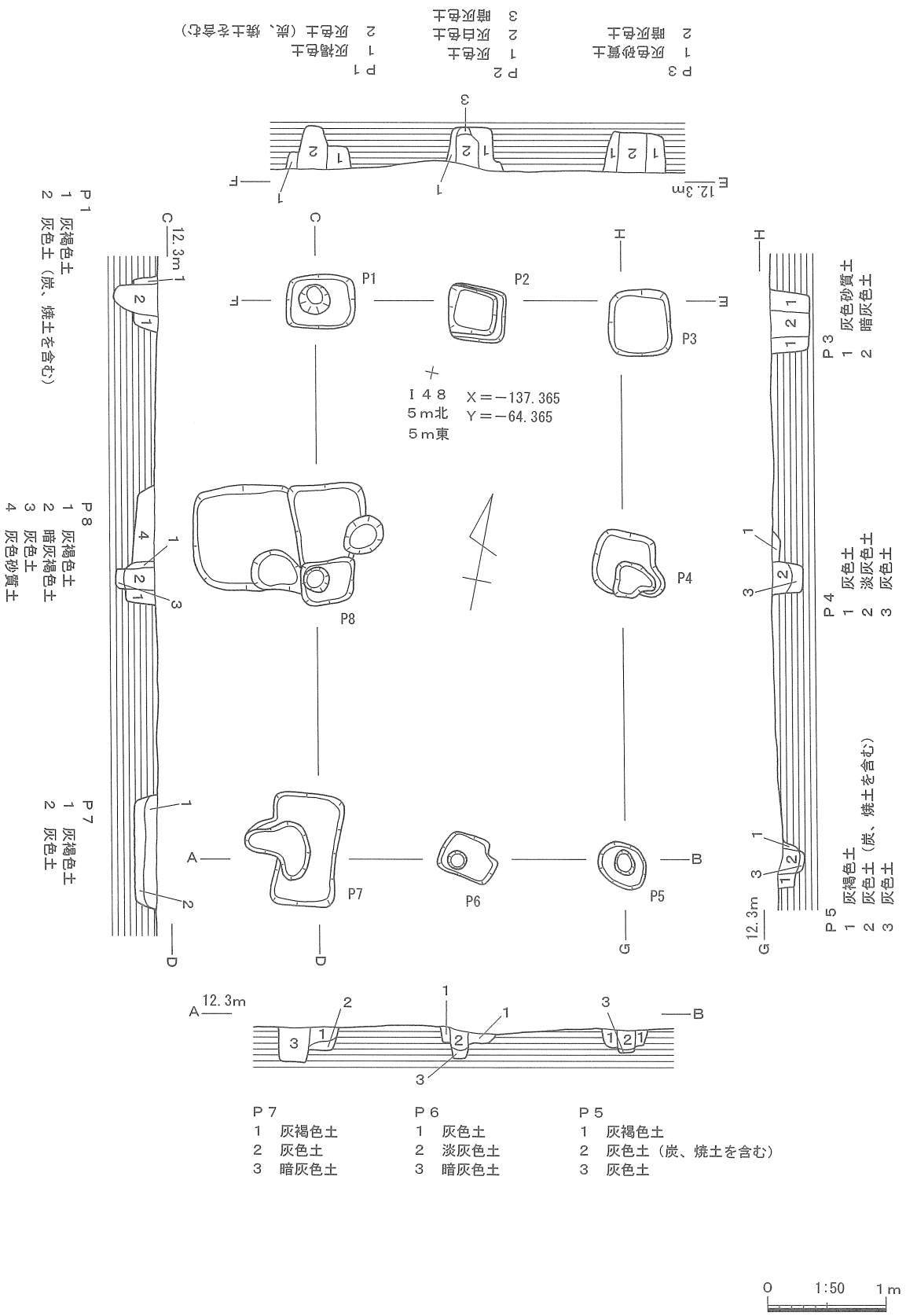
柱間距離は、SH207、208同様、高麗尺よりも天平尺との誤差の方が小さく、1尺30cm程度を意識していたようである。

柱穴所見

P3以外の柱穴底部で柱の痕跡が見られた。P3でも、断面で柱の痕跡が認められた。柱穴の深さは、30cm前後で他の掘立柱建物跡のような大きな差はない。P4とP7には、柱の抜き取り痕と思われる出っ張り



第10図　SH208実測図



第11図　SH209実測図

部分がある。P8付近には、柱穴と似た遺構が切り合っているが、柱の建て替えなのか、別の遺構がからんでいるのか、判然としない。埋土が酷似しているため、近い時期に埋没したと思われるが、柱穴とすると、建物からかなりずれることや、P8以外では柱穴の痕跡が検出できなかったことから、P8が別の土坑を切っている可能性の方が高いと思われる。また、P8からは遺物が出土しているが、これに隣接する土坑からは、遺物は出土していない。

柱穴の埋土は灰褐色土を基本としているが、特徴は埋土に炭と焼土が多く混じっている点である。炭と焼土が入るのは、柱の痕跡と思われる部分の埋土で、柱が焼失したと考えるのが妥当である。

出土遺物

遺物は、P8から第14図－２（26p）に示した９世紀後半の灰釉陶器の碗と、時期は不明であるが、同図４の土師器の皿が出土している。２の灰釉陶器は、内面には釉を塗ってあり、良く発色している。４の皿は立ち上がり部分を強く撫でて外反させている。

P7からは第14図－３（26p）に示した９世紀前半の土師器の坏が出土している。これは流れ込みであろう。

SH210（第12図：24p）

概要

この掘立柱建物跡も、標準土層が褐色砂質土であるのに対して、柱穴の埋土は灰色を基本とする色であったため、明瞭に検出できた。SH211と隣接しており、両者の区別は難しかった。総柱の建物１棟になるのか２棟に分かれるのか明確でなかった。

柱間距離の検討と、SH210－P5とSH211－P5の間に切り合いが認められたことから、２つの建物に分けて考える方が良いと判断した。そして、SH210－P5の柱穴が、SH211－P5の柱穴を切っていることから、SH210の方が新しいことがわかる。ただし、調査当初、SH210－P5とSH211－P5は、同一の柱穴と考えて調査しており、SH211－P5の部分は、SH210－P5の抜き取り痕と考えていたが、底まで掘削したところで、SH211－P5の柱穴が、円形にならずに半円の状態で検出できたため、断面を詳細に検討した結果、SH210－P5がSH211－P5を切っていることが判明した。

規模は、梁行１間（2.0m）×桁行２間（2.5m）で、桁行の方向は、N75°Eであり、SH207とほぼ同様の方向である。

規格

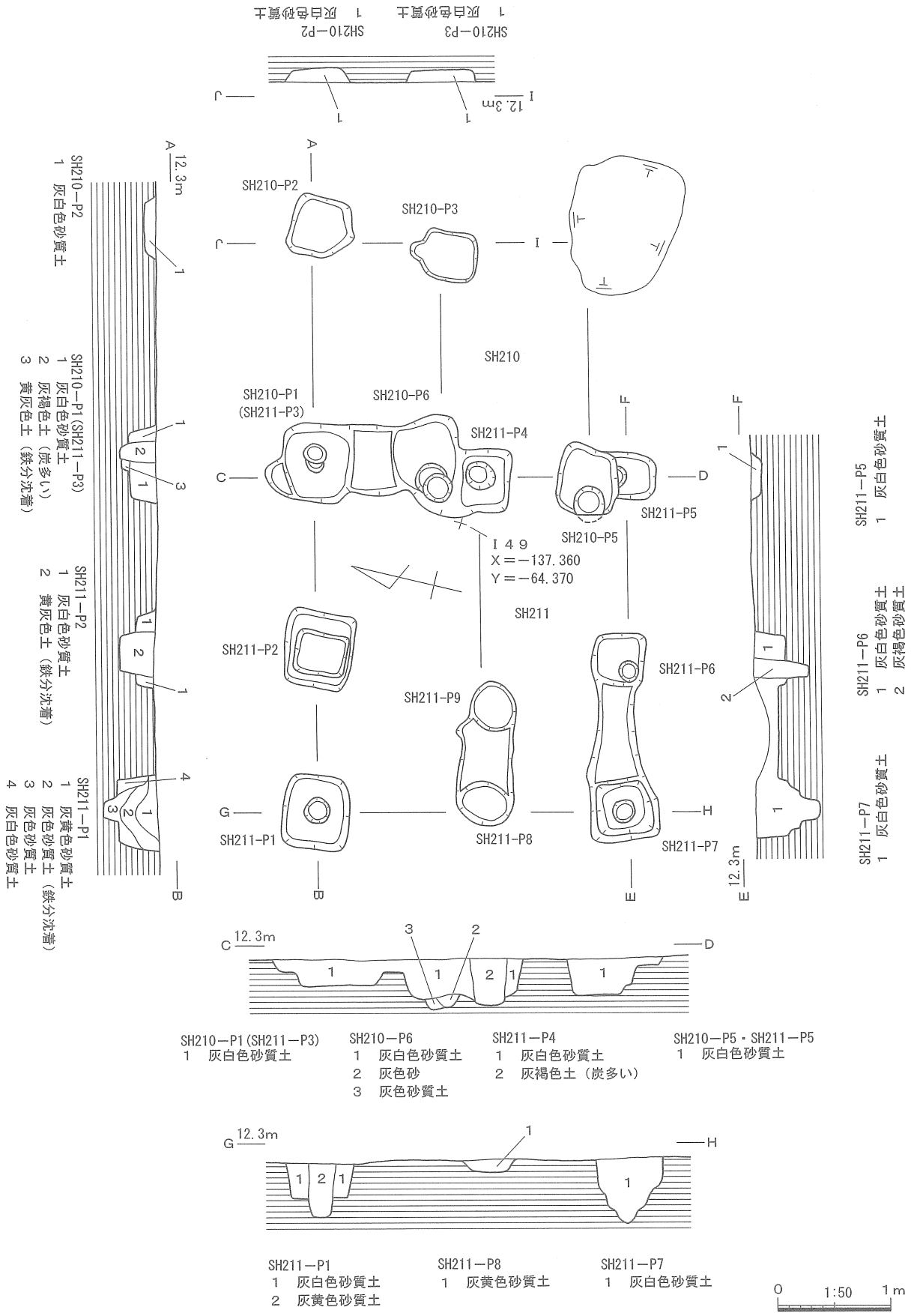
柱間距離は、上記の掘立柱建物跡と同様、高麗尺よりも天平尺に近い距離となっており、30の倍数に近い値となっている。SH210－P1とSH211－P3は同一の場所にあり、どちらの柱穴か判断しにくいが、上記の切り合いから、SH210－P1に当たっており、SH211－P3は、SH210－P1に切られてなくなっていると思われる。

柱穴所見

SH210の南東隅に想定される柱穴P4は、撹乱により破壊されており、検出できなかった。SH210の西側の柱列では、Ｐ１、P5、P6に柱の痕跡が見られた。これに対して、東側の柱列P2、P3には柱の痕跡は見られず、西側の柱列よりもいずれも浅かった。また、P1～P3には、抜き取り痕と思われる出っ張りがある。P1の柱の痕跡には炭や焼土が多く見られることから、柱が焼失している可能性がある。

出土遺物

遺物は、P3から第14図－５と６（26p）の土師器の坏、同図－７の土師器の皿が出土している。５と６は９世紀後半で、５は丹塗りの可能性があり、また、SF275の遺物と接合している。７の皿は、単独では時期を決めがたいが、５、６と同様に９世紀後半と考えられる。６と７は丹塗りであるが、６はほとんど剥落している。７の丹は、内面は良く残っているが、外面はほとんど剥落している。



第12図　SH210、SH211実測図

SH211（第12図：24p）

概要

SH211は、今回の調査で検出した掘立柱建物跡で唯一、総柱と考えられる建物である。梁行２間（3.1m）×桁行２間（2.7m）で、桁行の方向は、N75°Eで、SH207、SH210と同じである。

規格

柱間距離は、これも天平尺に近い尺度を採用しているようで、30の倍数に近くなっていることを指摘できる。

柱穴所見

P6とP7、P8とP9が布掘りでつながっている。P8とP9には柱の痕跡が見られず、他の柱穴よりも浅い。P9は建物の中央に位置する柱であるが、西にずれている。P4の柱の痕跡には炭や焼土が多いことから、柱が焼失した可能性がある。

出土遺物

出土遺物は、P4からは、第14図－８（26p）の土師器の坏が出土している。丹塗りで、内面は全面に塗ってあるようだが、外面は部分的に塗ってあるだけである。時期は９世紀前半であるが、他の出土遺物から、SH211は９世紀後半と考えられる。

SH212（第13図：26p）

概要

調査区の西端に掘立柱建物跡の一部がかかるように検出したもので、標準土層が褐色砂質土であるのに対して、柱穴の埋土は灰白色を基本とする色であったため、明瞭に検出できた。半分以上が調査区西側に出ているため、規模は明らかでないが、P1～P4は4.9mある。梁と桁の識別が難しいが、桁行の方向は、N75°ＥかN15°Wのいずれかである。N75°Ｅならば、SH207、210、211と同じ方向、N15°WならばSH208、209と同じ方向になる。しっかりした柱穴であるため、調査区内で検出した南北方向に収まる建物ではなく、東西方向に長い建物で、調査区の西側に延びていくと思われる。したがって、桁行の方向はN75°Ｅになる可能性の方が高いと思われる。

規格

柱間距離は、これも他の掘立柱建物跡と同じように、高麗尺よりも天平尺に近い数字を示している。図化できる遺物は出土していないが、９世紀代であることは間違いない。

柱穴所見

P3とP4、P5とP6は布掘りでつながっており、P2には、抜き取り痕と思われる突出した部分が見られる。すべての柱穴に明瞭に柱の痕跡が残っているが、P1～P4の柱は、穴の中央に直立するのではなく、建物の中心に向かって傾いている。しかし、これが建物の本柱になるとは考えにくく、斜めの柱を立てるのに、このように柱穴を垂直に掘る必要はない。本来、直立する本柱があり、傾いた柱穴は、本柱の支柱として据えたと考えた方が理解し易い。また、P1とP2、P4の柱穴断面には、柱の縁辺に当たる部分に炭と焼土が密集しており、柱が焼失したような状況である。また、P6の柱穴の埋土も炭を多く含んでいる。

出土遺物

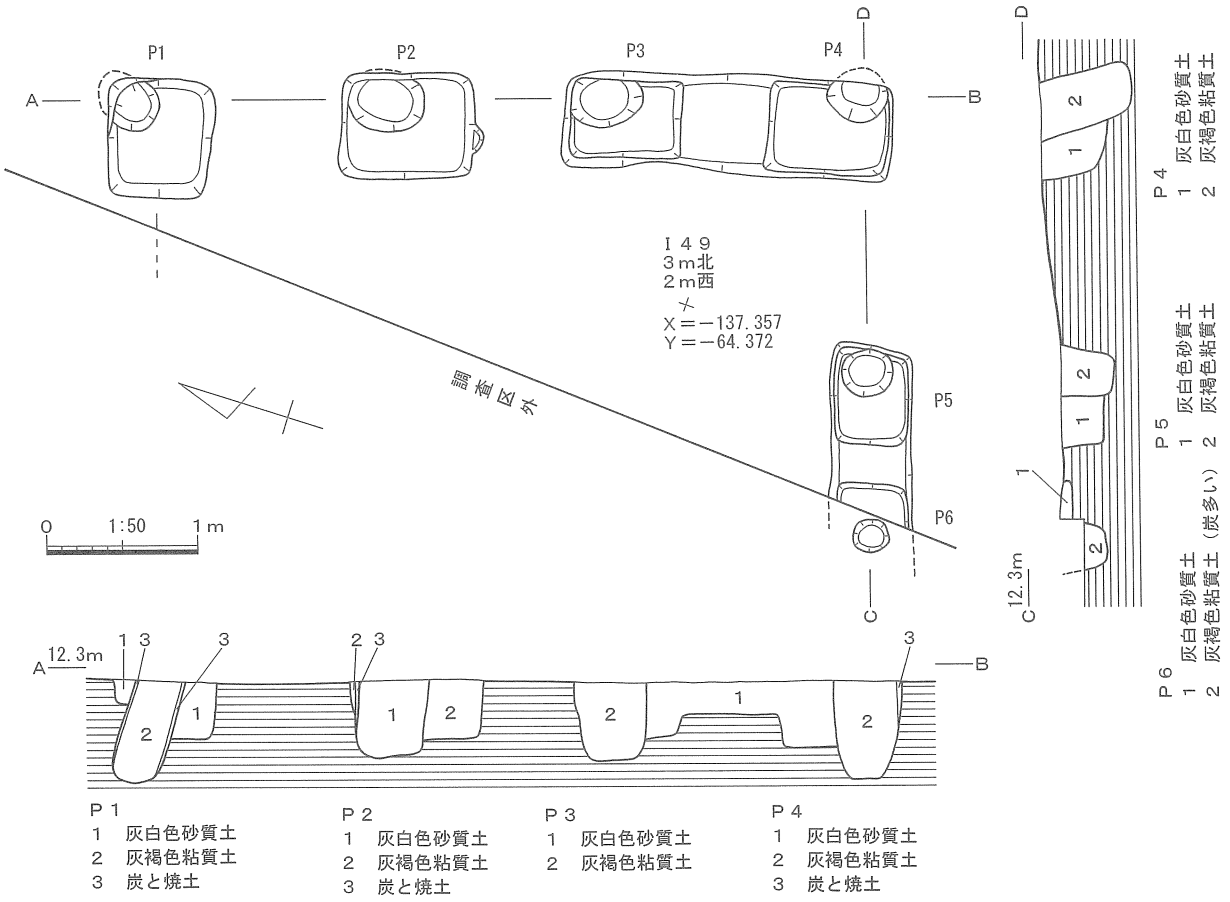
図化できる遺物は出土していない。

土坑

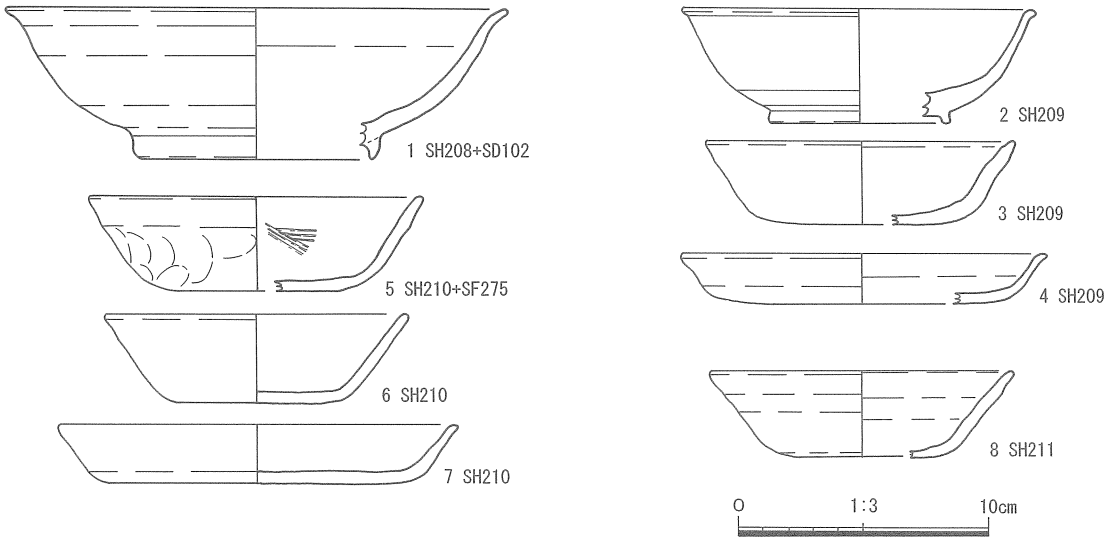
SF274（第15図上段：30p）

概要

平面形と断面を見ると、方形の土坑が２つ切り合っている可能性もあるが、埋土が同一で識別できなかったため１つの土坑として報告する。



第13図　SH212実測図



第14図　5－2次調査奈良・平安時代掘立柱建物跡出土遺物

第４表　掘立柱建物跡の柱間距離

遺構番号	柱穴間番号	柱穴間距離：Ａ (cm)	Ａの高麗尺換算値 (尺)	近似尺：Ｂ (尺)	ＡとＢの差 (cm)	Ａの天平尺換算値 (尺)	近似尺：Ｃ (尺)	ＡとＣの差 (cm)
SH207	P1－P2	162	4.55	5	16	5.45	5	13.5
	P2－P3	130	3.65	4	12.4	4.38	4	11.2
	P3－P4	160	4.49	4	17.6	5.39	5	11.5
	P3－P5	217	6.10	6	3.4	7.31	7	9.1
	P4－P6	252	7.08	7	2.8	8.48	8	14.4
	P5－P6	197	5.53	6	16.6	6.63	7	10.9
	P6－P7	207	5.81	6	6.6	6.97	7	0.9
	P7－P8	150	4.21	4	7.6	5.05	5	1.5
	P9－P10	125	3.51	4	17.4	4.21	4	6.2
	P10－P11	182	5.11	5	4	6.13	6	3.8
	P11－P12東	225	6.32	6	11.4	7.58	8	12.6
	P11－P12西	272	7.64	8	12.8	9.16	9	4.7
	P12東－P13	172	4.83	5	6	5.79	6	6.2
	P12西－P13	125	3.51	4	17.4	4.21	4	6.2
	P13－P14	150	4.21	4	7.6	5.05	5	1.5
	P14－P1	175	4.92	5	3	5.89	6	3.2
				高麗尺との平均誤差	10.2		天平尺との平均誤差	7.3
SH208	P1－P2	250	7.02	7	0.8	8.42	8	12.4
	P2－P3	200	5.62	6	13.6	6.73	7	7.9
	P3－P4	182	5.11	5	4	6.13	6	3.8
	P4－P5	230	6.46	6	16.4	7.74	8	7.6
	P5－P6	187	5.25	5	9	6.30	6	8.8
	P6－P7	215	6.04	6	1.4	7.24	7	7.1
	P7－P8	210	5.90	6	3.6	7.07	7	2.1
	P8－P9	210	5.90	6	3.6	7.07	7	2.1
	P9－P10	252	7.08	7	2.8	8.48	8	14.4
	P10－P1	150	4.21	4	7.6	5.05	5	1.5
				高麗尺との平均誤差	6.3		天平尺との平均誤差	6.8
SH209	P1－P2	135	3.79	4	7.4	4.55	5	13.5
	P2－P3	142	3.99	4	0.4	4.78	5	6.5
	P3－P4	120	3.37	3	13.2	4.04	4	1.2
	P4－P5	240	6.74	7	9.2	8.08	8	2.4
	P5－P6	142	3.99	4	0.4	4.78	5	6.5
	P6－P7	142	3.99	4	0.4	4.78	5	6.5
	P7－P8	265	7.44	7	15.8	8.92	9	2.3
	P8－P1	200	5.62	6	13.6	6.73	7	7.9
				高麗尺との平均誤差	7.6		天平尺との平均誤差	5.9
SH210	P1－P2	200	5.62	6	13.6	6.73	7	7.9
	P2－P3	115	3.23	3	8.2	3.87	4	3.8
	P3－(P4)	125	3.51	4	17.4	4.21	4	6.2
	(P4)－P5	225	6.32	6	11.4	7.58	8	12.6
	P5－P6	150	4.21	4	7.6	5.05	5	1.5
	P6－P1	100	2.81	3	6.8	3.37	3	10.9
				高麗尺との平均誤差	10.8		天平尺との平均誤差	7.2
SH211	P1－P2	140	3.93	4	2.4	4.71	5	8.5
	P2－P3	175	4.92	5	3	5.89	6	3.2
	P3－P4	142	3.99	4	0.4	4.78	5	6.5
	P4－P5	125	3.51	4	17.4	4.21	4	6.2
	P5－P6	160	4.49	4	17.6	5.39	5	11.5
	P6－P7	135	3.79	4	7.4	4.55	5	13.5
	P7－P8	120	3.37	3	13.2	4.04	4	1.2
	P8－P1	150	4.21	4	7.6	5.05	5	1.5
				高麗尺との平均誤差	8.6		天平尺との平均誤差	6.5
SH212	P1－P2	150	4.21	4	7.6	5.05	5	1.5
	P2－P3	150	4.21	4	7.6	5.05	5	1.5
	P3－P4	170	4.78	5	8	5.72	6	8.2
	P4－P5	185	5.20	5	7	6.23	6	6.8
	P5－P6	197	5.53	6	16.6	6.63	7	10.9
				高麗尺との平均誤差	9.4		天平尺との平均誤差	5.8

高麗尺　1尺＝35.6cm　天平尺　1尺＝29.7cmとした。

第５表　掘立柱建物跡の柱穴観察表

遺構番号	柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	柱穴有無	柱穴直径	柱の痕跡	特記事項
SH207	P1	62.5	62.5	65	無	—		抜き取り痕？あり
	P2	50	50	32.5	無	—	断面で確認	
	P3	62.5	55	50	有	35	底と断面で確認	
	P4	75	57.5	45	無	—		
	P5	67.5	62.5	57.5	有	37.5	底と断面で確認	
	P6	57.5	52.5	62.5	有	45	底と断面で確認	
	P7	67.5	60	47.5	有	55	底と断面で確認	
	P8	52.5	45	50	有	37.5	底と断面で確認	抜き取り痕？あり
	P9	72.5	57.5	45	有	45	底と断面で確認	抜き取り痕？あり
	P10	—	80	90	有	60	底と断面で確認	P11と布掘りでつながる
	P11	135	57.5	95	有	60	底と断面で確認	P10と布掘りでつながる
	P12	112.5	70	92.5	有	42.5	底と断面で確認	抜き取り痕？あり
	P13	92.5	72.5	82.5	無	—		抜き取り痕？あり
	P14	62.5	60	60	無	—		
SH208	P1	70	65	90	有	60	底で確認	P10と布掘りでつながる
	P2	117.5	70	50	無	—		
	P3	65	65	52.5	有	45	底で確認	P4と布掘りでつながる
	P4	82.5	62.5	47.5	有	50	底で確認	P3と布掘りでつながる
	P5	85	62.5	37.5	有	25	底で確認	
	P6	135	67.5	77.5	有	87.5	底で確認	抜き取り痕？あり
	P7	105	75	80	無	—		
	P8	75	65	62.5	有	62.5	底で確認	P9と布掘りでつながる
	P9	87.5	65	62.5	有	30	底で確認	P8と布掘りでつながる 抜き取り痕？あり
	P10	87.5	72.5	75	有	82.5	底で確認	P1と布掘りでつながる 抜き取り痕？あり
SH209	P1	57.5	47.5	37.5	有	25	底と断面で確認	柱焼失か
	P2	47.5	47.5	37.5	有	40	底と断面で確認	
	P3	55	52.5	32.5	無	—	断面で確認	
	P4	55	25	27.5	有	32.5	底と断面で確認	抜き取り痕？あり
	P5	40	35	22.5	有	17.5	底と断面で確認	柱焼失か
	P6	47.5	35	30	有	15	底と断面で確認	抜き取り痕？あり
	P7	92.5	52.5	30	有	30	底と断面で確認	抜き取り痕？あり
	P8	40	35	37.5	有	20	底と断面で確認	
SH210	P1	72.5	62.5	35	有	17.5	断面で確認	柱焼失か
	P2	57.5	55	12.5	無	—	底と断面で確認	
	P3	50	40	12.5	無	—		
	P5	62.5	52.5	35	有	32.5	底と断面で確認	
	P6	87.5	62.5	45	有	37.5	底と断面で確認	
SH211	P1	40	60	47.5	有	22.5	底と断面で確認	
	P2	65	60	32.5	有	45	底と断面で確認	
	P3	—	—	—	—	—	—	SH210－P1で消滅
	P4	57.5	45	42.5	有	25	底と断面で確認	柱焼失か
	P5	不明	42.5	7.5	有	17.5	底で確認	
	P6	47.5	45	50	有	17.5	底と断面で確認	P7と布掘りでつながる
	P7	62.5	55	57.5	有	50		P6と布掘りでつながる
	P8	50	37.5	12.5	無	—		
	P9	42.5	37.5	17.5	無	—		
SH212	P1	80	70	65	有	42.5	底と断面で確認	柱焼失か
	P2	90	70	52.5	有	50	底と断面で確認	柱焼失か 抜き取り痕？あり
	P3	80	67.5	52.5	有	50	底と断面で確認	P4と布掘りでつながる
	P4	82.5	67.5	65	有	45	底と断面で確認	P3と布掘りでつながる
	P5	65	55	37.5	有	40	底と断面で確認	P6と布掘りでつながる
	P6	不明	60	32.5	有	25		P5と布掘りでつながる

本来の掘り込み面は失われており、一番深いところでも15cm程度である。埋土は、炭や焼土を含んだ淡褐色土の単一層であり、検出は容易であった。この土坑からは９世紀中葉の一括遺物が得られている。下記に示す遺物はすべて９世紀中葉である。

出土遺物

第16図－１、２（31p）は灰釉陶器の碗で、１は、土坑の中央付近から、ほぼ完全な形で出土した。内面に釉を塗ってあり、良く発色している。２も内面に釉を塗っており、良く発色している。２は、後に報告するSD102に一括廃棄された状態で出土した平安時代の遺物と接合し、さらにSD107から出土した土器とも接合する。また、SD102からはこの土坑の時期に一致する９世紀中葉の遺物が多く出土していることから、詳しくはSD102の報告に譲るが、本来は、この土坑にさらに多くの遺物が残っていたのが、13世紀頃の耕作などによって、破壊されたことがうかがえる。

第16図－３（31p）は土師器の坏で、丹塗りであるが、丹はほとんど剥落している。また、口縁内側に強い撫でが見られる。底部に墨書が見られるが、一部しか確認できないため、判読不能である。４は土師器の坏で、丹塗りであるが、丹はほとんど剥落し、口縁内部の強く撫でた部分に残っている以外は、部分的に残っているだけである。５も土師器の坏で、口縁部をやや外反させるように撫でて、わずかにつまみあげている。丹塗りであるが、丹はほとんど剥落して部分的に残っているだけである。６は土師器の坏で、丹塗りである。内面の丹は良く残っているが、外面はほとんど残っていない。７、８も土師器の坏で丹塗りである。８は口縁部を撫でて外反させている。９は土師器の坏で、これは丹塗りではないが、丹塗りのような鮮やかな色である。丹塗りを意識して焼いているようである。８と同様に口縁部を撫でて外反させている。

以上の出土遺物を見ると、丹塗りの土師器が多く見られ、墨書も認められること、埋土に炭や焼土が見られ、火を焚いたようなことがうかがえることから、祭祀関連の土坑と考えられる。ただし、土器が火を受けた形跡はない。

SF275（第15図中段：30p）

概要

この土坑も平面形を見ると、複数の土坑が切り合っている可能性があるが、埋土が同一のため、識別はできなかった。１つの土坑として報告する。

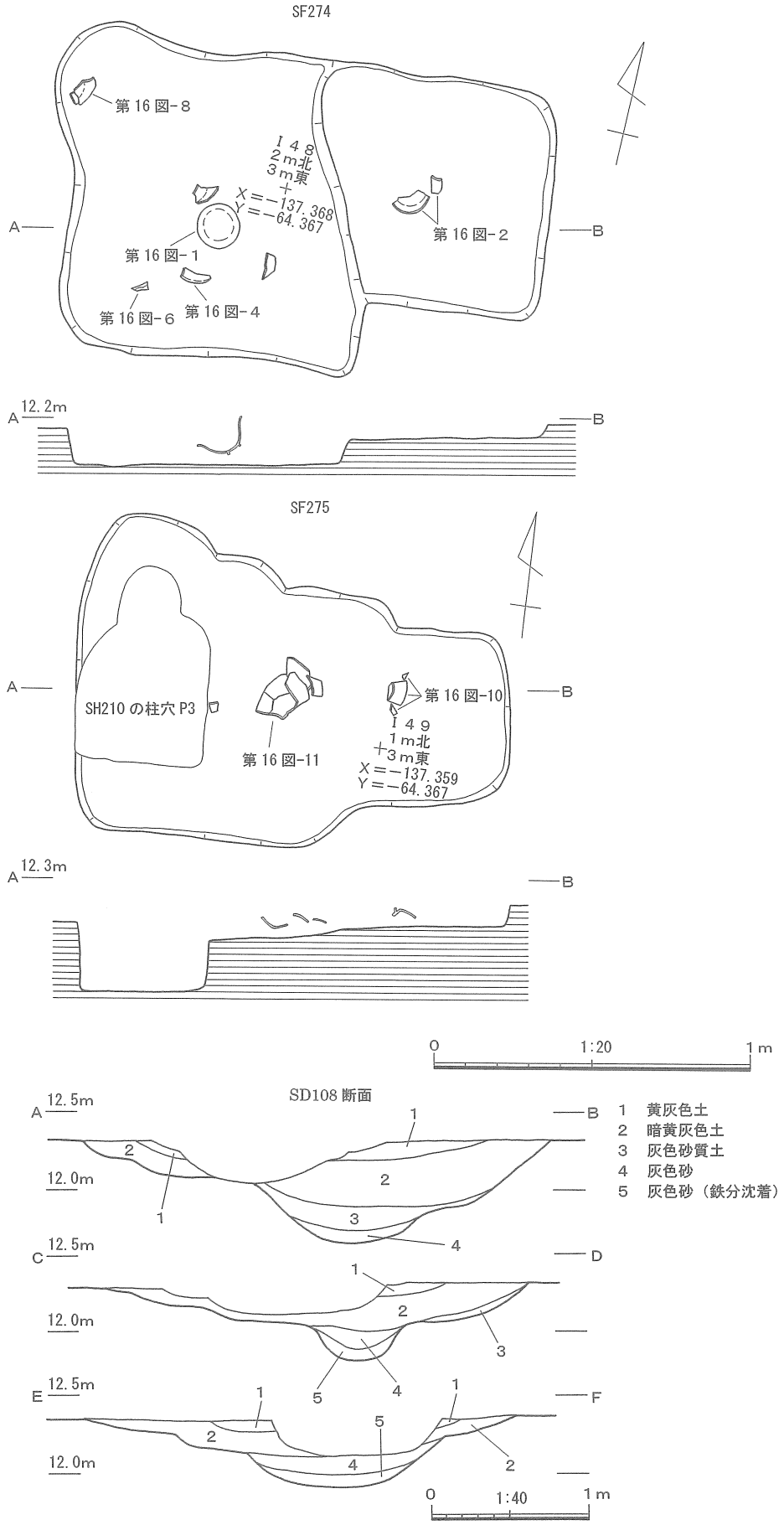
これも本来の掘り込み面は失われており、一番深いところでも15cm程度である。埋土は、炭や焼土を含んだ淡褐色土の単一層であり、検出は容易であった。この土坑からは９世紀後半の一括遺物が得られている。また、SH210－P3の柱穴がこの土坑を切っており、この土坑から出土した遺物とSH210－P3から出土した遺物が接合する。下記の遺物はすべて９世紀後半である。

出土遺物

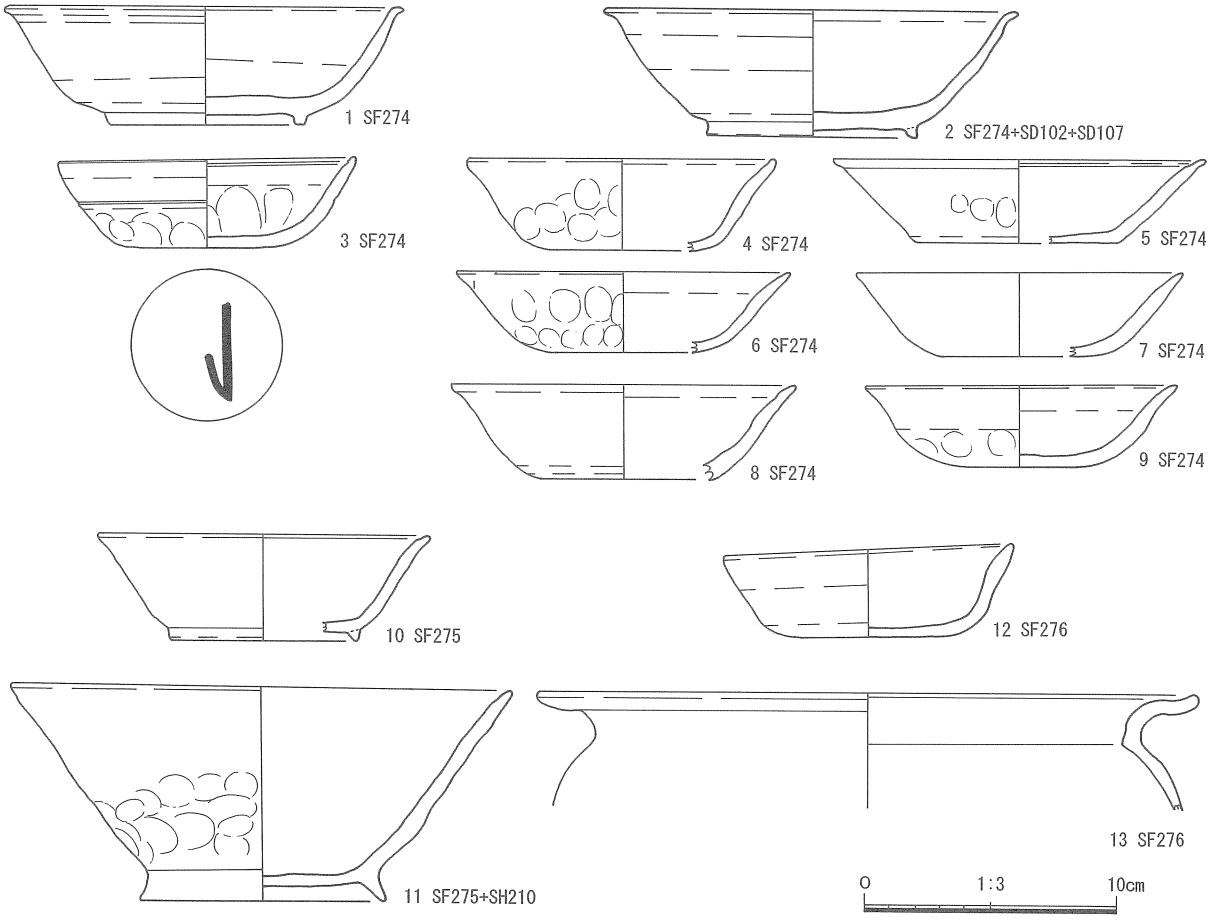
第16図－10（31p）は丹塗りの土師器の坏であるが、全体の形から、灰釉陶器を模倣している可能性がある。内面の丹は残っているが、外面の丹はほとんど剥落している。11は、土師器の鉢で、指頭圧痕が良く残っており、丹塗りである。これは、SH210－P3の出土遺物と接合する。SH210－P3の方が後から掘った遺構であることから、SH210－P3が埋没するときに、SF275の遺物が流れ込んだと考えられる。

SF276（第７図：17p）

210cm×80cm、深さ20cm程の細長い方形の土坑である。埋土は灰褐色土で、炭、焼土が多く見られ、検出は容易であった。第16図－12（31p）に示した丹塗りの土師器の坏と同図13の土師器の甕が出土している。いずれも９世紀後半で、この遺構の時期を示している。火を焚いたような形跡が見られることや、丹塗りの土師器が出土していることから、祭祀関連の土坑と考えられる。



第15図　SF274、SF275実測図とSD108断面実測図



第16図　５－２次調査奈良・平安時代土坑出土遺物

SF277、278、279（第７図：17p）

この３つの土坑は、調査区の南端、SH207の近くで検出したもので、いずれも埋土はSH207の柱穴と酷似した灰白色砂質土で、方形に近い平面形である。柱穴と思われる掘り込みは検出できなかったが、掘立柱建物跡の一部である可能性が考えられる。調査区の南端で検出したことから、調査区の南にも掘立柱建物跡が広がっているように思えるが、この調査区の南側は恒武西浦遺跡で、当研究所2000でこの調査区の南を調査した際は、自然流路を検出しており、現在も流路になっている。このことから、調査区の南に掘立柱建物跡が広がっているとは考えにくい。むしろ調査区の西側で、流路に沿って広がっていると考えられる。

溝

SD108（第７図：17p）

北西～南東方向の溝で、最初、鎌倉・室町時代の遺構面で検出したものだが、さらに掘り下げて、奈良・平安時代、２面目の遺構面を調査した際、同一の場所で、さらに幅の広い溝を検出したため、古代に掘られた溝が一度埋没した後、鎌倉・室町時代に掘り返して再利用していると考えた。第15図（30p）の断面図に示したように、底の形状から、３回ほど掘り直したことがうかがえる。後述するが、この溝は鎌倉・室町時代～江戸時代にかけても掘り直されている。

畝状遺構（第７図：17p）

調査区の南半で検出したもので、細い溝状遺構が方形区画を作るようにつながっている。畑の畝以外には考えにくい。平安時代の遺構に切られていることから、奈良時代のものであろう。

2　５－２次調査奈良・平安時代１面目の概要（第17図：33p）

調査区の北側で標高12.7m、南側で12.3mと、南に向かって緩やかに下っている。この調査区では、溝を20本程検出した。全体的に、北西～南東方向を主体として、それに直行する方向のものが少数ある。いずれも小規模な浅い溝で、畑か水田耕作に関わる溝と推定できる。

溝

SD108（第17図：33p）

奈良・平安時代の面でも検出した溝で、この面では幅が狭くなっている。後の章でも報告するが、この溝は、この後、あまり幅を変えることなく、室町・鎌倉時代以降まで続くことになる。

SD295（第17図：33p）

この調査面で検出した溝の中では、幅は狭いものの、長く連続する溝で、途中で北西～南東方向から北東～南西方向にほぼ90度曲がっている。埋土は黄褐色土の単一土層で、検出は容易であった。

第17図を見ると、直角に折れ曲がるあたりで、別の溝につながっているように見えるが、この部分でSD295を掘り直している。また、この溝の底には掘った際の工具痕が残っており、二又の鍬のようなものを使って掘削したと推定できる。

この溝からは、第20図－３（35p）に示した灰釉陶器の壺の底部と同図４に示した土師器の甕が出土している。３の壺は、外面の釉が良く発色している。時期は、３が10世紀代、後者は、口縁がほぼ平坦になり、口唇部をつまみあげていることから、８世紀代である。溝の時期は10世紀代と考えられる。

SD296～SD299、301（第17図：33p）

これらは小規模な溝であるが、ほぼ平行して掘られている。方向は、北西～南東方向、もしくはこれに直交する北東～南西方向である。埋土はいずれも暗褐色土の単一土層で、検出は容易であった。同時に存在していたのではなく、切り合いから見ると、SD298、297、296、301、299の順に古くなっていく。

遺物は、SD296から、第20図－５、６（35p）の灰釉陶器の碗が出土している。前者は時期判定が困難だが、後者は10世紀後半～11世紀初頭と判断できる。５は内側に重ね焼きの痕跡が見られる。また、同図－７に示した硯も出土している。

SD301からは、第20図－８の須恵器の壺と同図－９（35p）に示した灰釉陶器の碗が出土している。前者は８世紀代と判断できる。９は分厚く重量感があるが、年代の判定は困難である。また、同図－10に示したミニチュア土器の脚部も出土している。溝の時期は９～10世紀であろう。

3　５－１次調査奈良・平安時代の概要（第18図：34p）

５次調査区の中で、一部先行して調査した部分である。この調査区では、住居跡２軒と溝を検出した。

住居跡

SB229（第19図：35p）

調査区の中央付近で検出した方形の住居跡で、掘り込み面の大半を失っており、残っていたのは、10cm程度である。遺物は出土していないが、検出面から、奈良・平安時代であることは間違いない。

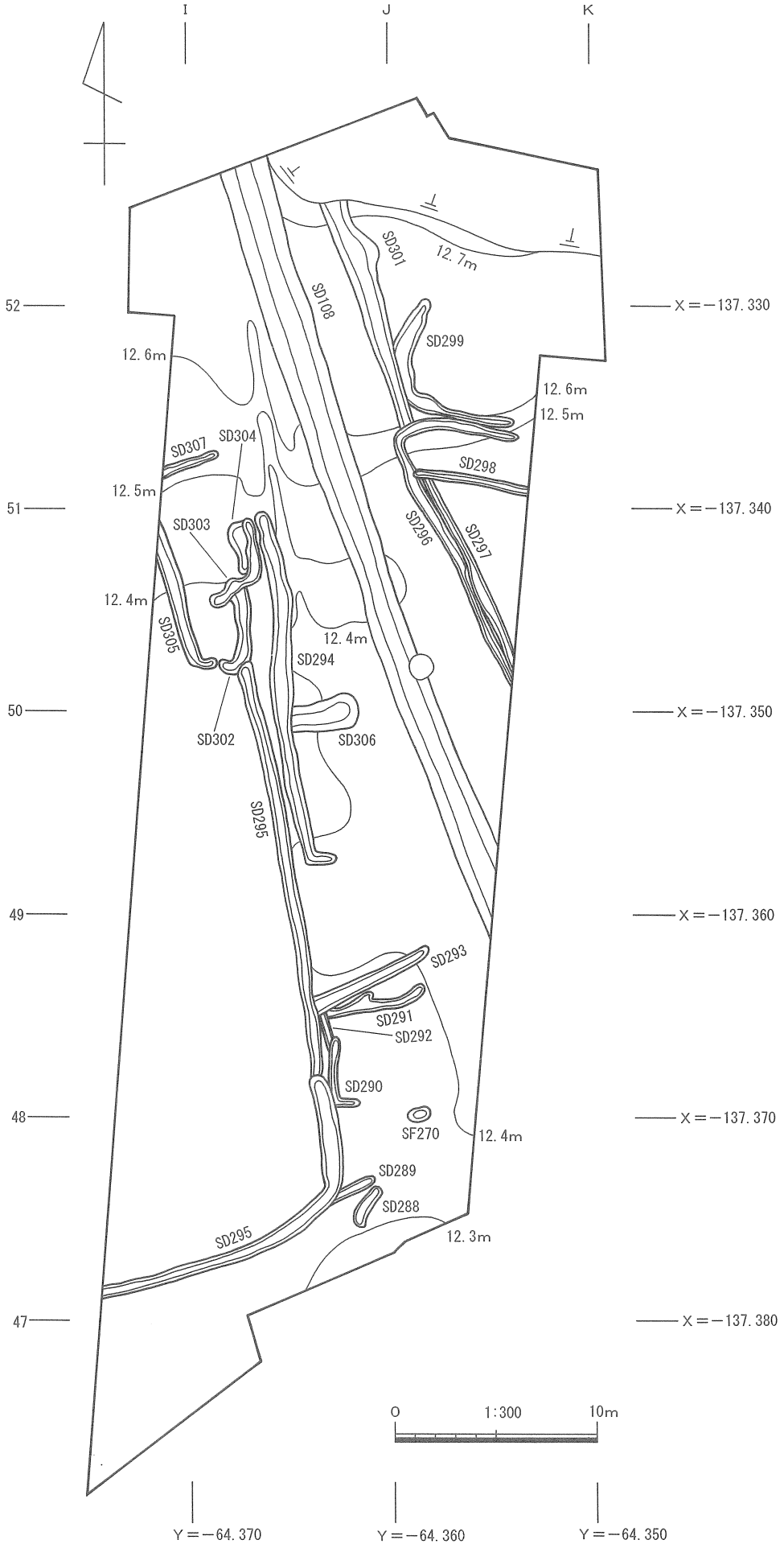
SB230（第19図：35p）

調査区の東端で住居跡の半分ほどを検出した。南側を後に報告するSD７に切られている。住居跡の中央付近で、第20図－１（35p）に示した須恵器の坏が出土している。７世紀末～８世紀前半で、灰白色の胎土から渥美・湖西産と考えられる。口縁直下にかなり強い撫でが入っており、沈線のようになっている。

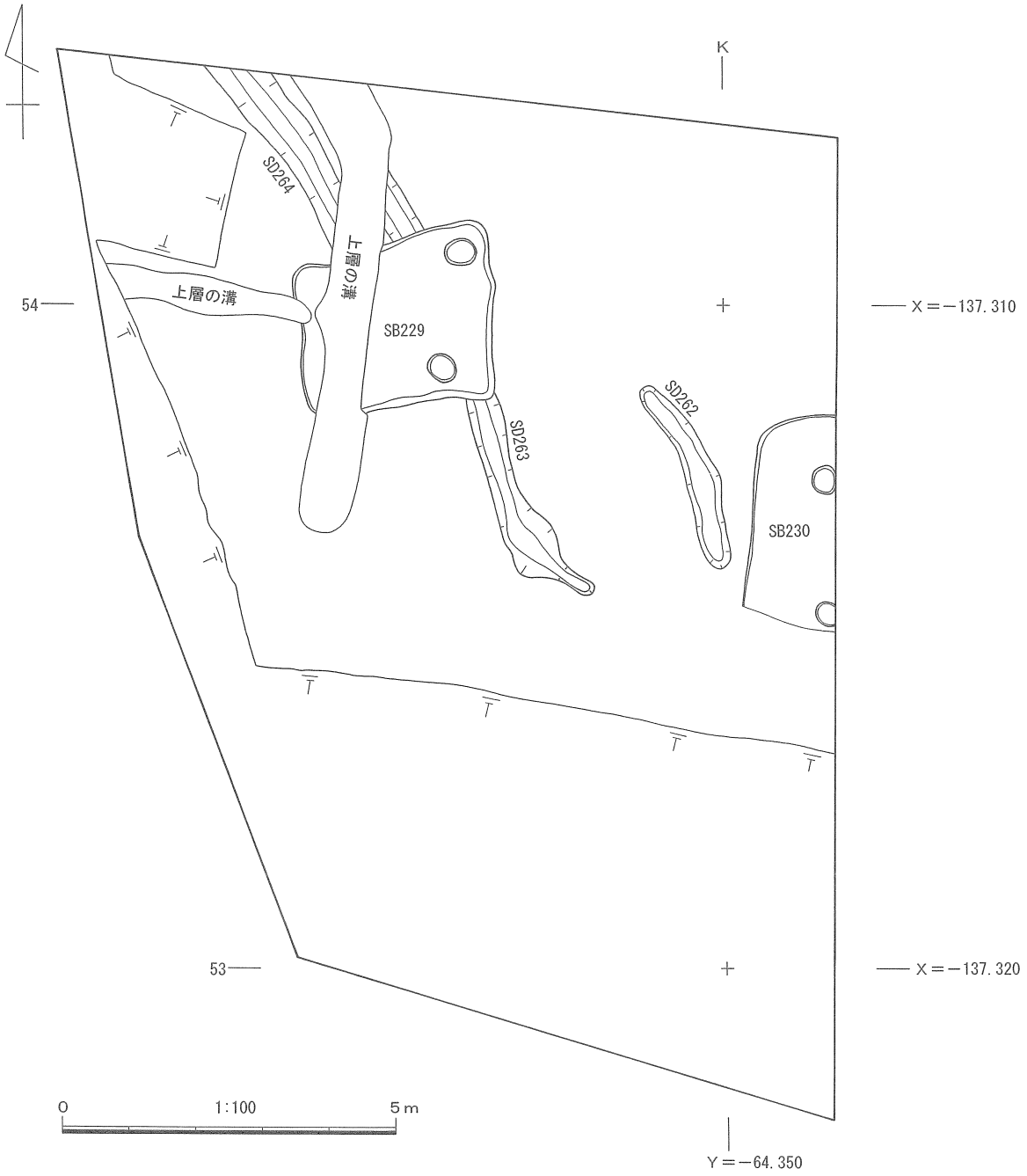
溝

SD263（第18図：34p）

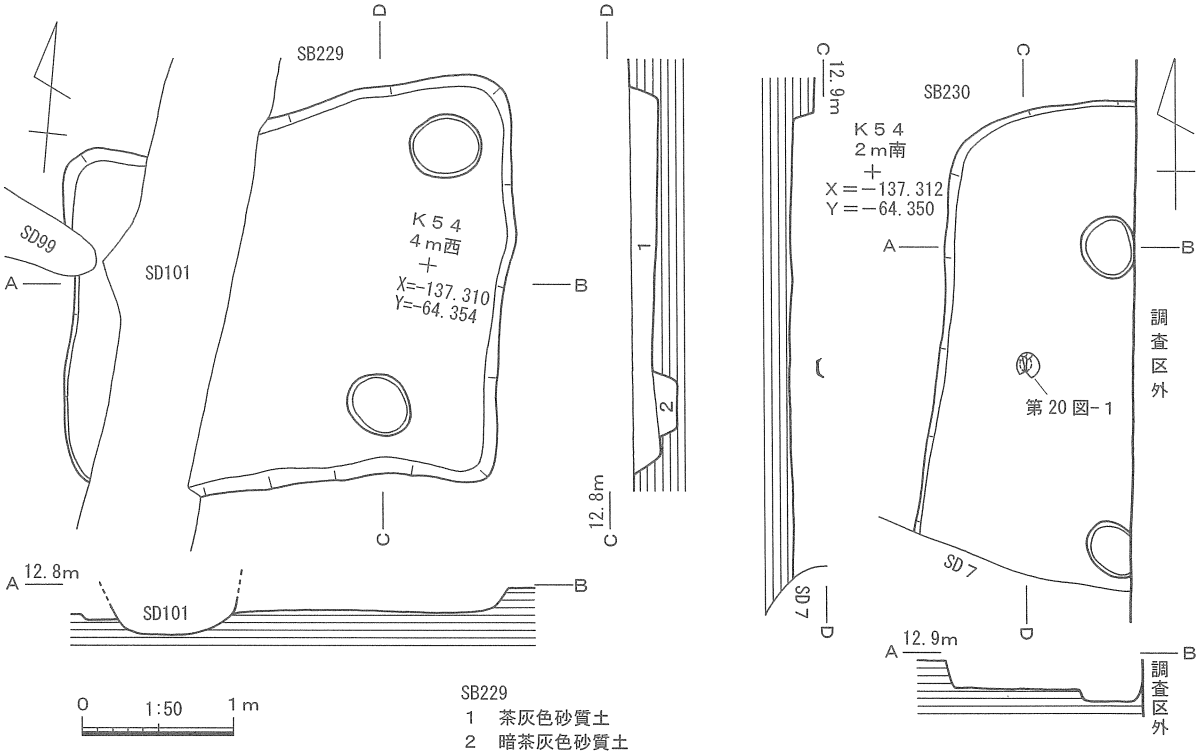
北西～南東に延びる溝で、調査区の中央付近で終っている。この溝からは第20図－２（35p）の土錘が出土している。検出面から考えて、奈良・平安時代の中に収まることは間違いない。



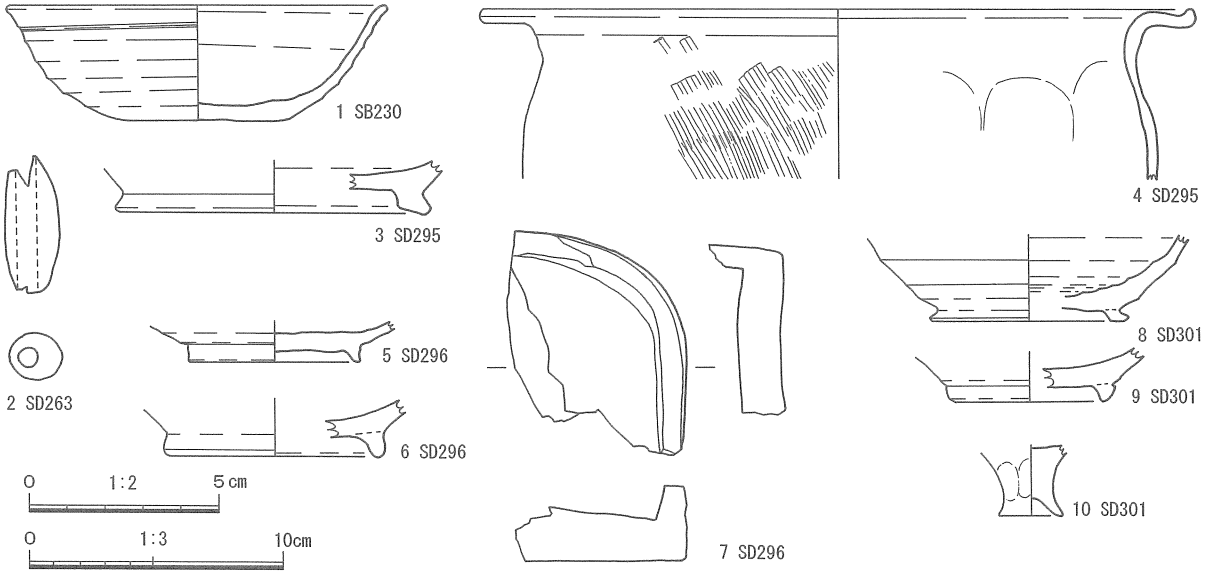
第17図　5－2次調査奈良・平安時代1面目遺構分布図



第18図　5－1次調査奈良・平安時代遺構分布図



第19図　SB229、SB230実測図



第20図　5－1・2次調査奈良・平安時代遺構出土遺物

4　6－1次調査奈良・平安時代の概要（第21図：37p）

6－1次調査は、笠井若林遺跡の北端に当たり、これより北側には、遺跡は広がっていない。検出面の標高は14.0mほどで、北西隅がやや下っている以外はほぼ平坦である。この調査区では、表土除去後、すぐに奈良・平安時代の遺構が現れた。室町・鎌倉時代以降の遺構は、江戸時代以降の耕作で失われたと思われるが、表土中にも室町・鎌倉時代以降の遺物はあまり含まれていないことから、もともと鎌倉・室町時代の遺構は少なかったのであろう。

この調査区では、北側で溝22本、南側で住居跡9軒を検出した。溝は、表土除去後、容易に検出できたが、住居跡の検出、特に切り合いの識別は難しかった。焼土が広い範囲に渡って分布していることから、複数の竈付住居があることは想定できたが、各住居跡の埋土が似ているうえに、すぐに乾燥して白っぽくなる土質のため、検出は困難であった。

まず、焼土の集中箇所から竈の数を想定し、次に焼土の分布を手がかりに住居跡を検出したが、竈付近で切り合っている住居跡は、焼土や炭が特に集中している部分を竈の中心と想定し、竈の数を推定した。また、竈のない住居跡や竈が調査区外に出ていると思われる住居跡の検出は、調査区の壁で住居跡の断面を観察するなどして、平面形を検出した。

この調査区で検出した集落が、笠井若林遺跡を構成する集落の北端である。

なお、93～94ライン以南は、表土直下まで沖積層が盛り上がっており、遺構は検出できなかったが、表土中に奈良時代の土器が多く含まれていたため、本来は遺構があったが、江戸時代以降の耕作で失われたと考えられる。

住居跡

SB231（第23図：39p）

南半分を撹乱によって失った状態で検出した。掘り込み面は失われており、20cm程が残っていただけである。柱穴は精査にもかかわらず、検出できなかった。棟方向はN34°Wで、北西側に竈がついている。竈は崩れて土坑状になっているが、埋土は比較的明瞭に分層できた。埋土は褐色砂質土で、この上面に土器が集中していたため、この面を床面と考えた。この下は地山の砂礫層である。

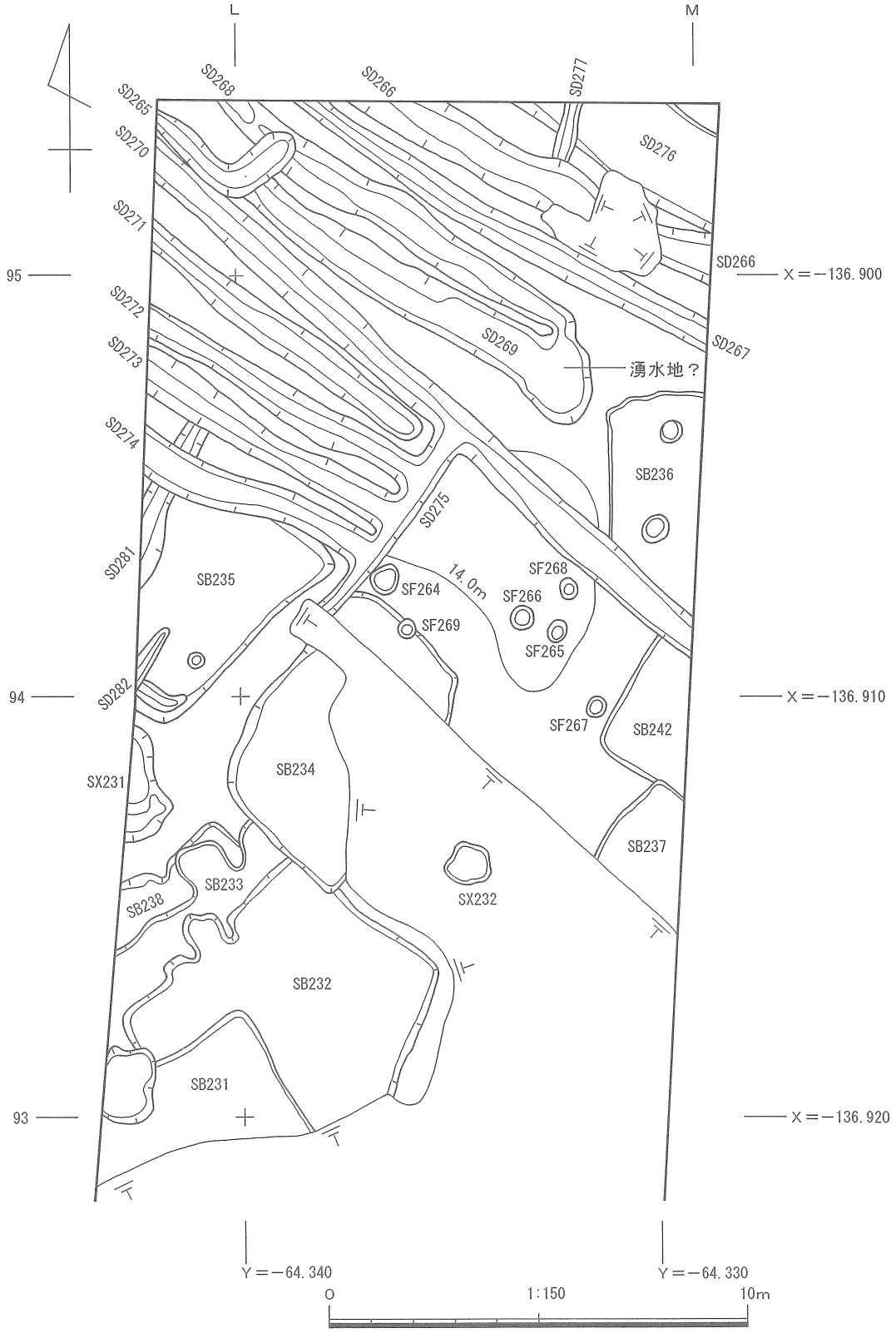
遺物は、床面から第29図－1（47p）に示した須恵器の坏、同図2に示した須恵器の甕、同図3に示した土師器の坏が出土している。1は外面に自然釉が見られる。いずれも8世紀前半で、3の土師器は丹塗りで、1の須恵器と並んで出土した（第23図の遺物出土状況の詳細B）。祭祀用土器を床面に並べて置いていたような状況を想定できる。竈内からは、第29図－4～6（47p）に示した土師器の甕が出土している。竈周辺での使用状況をそのまま残していると考えられる。4は内面に工具による強い撫でが見られる。5の口縁は平坦に近くなっているが、つまみあげてはいない。4～6は8世紀前半である。

これらの出土遺物から判断すると、この住居跡の時期は8世紀前半と考えられるが、後に述べるSB232、233、238との切り合いから、8世紀中葉の古段階まで下る可能性が高い。

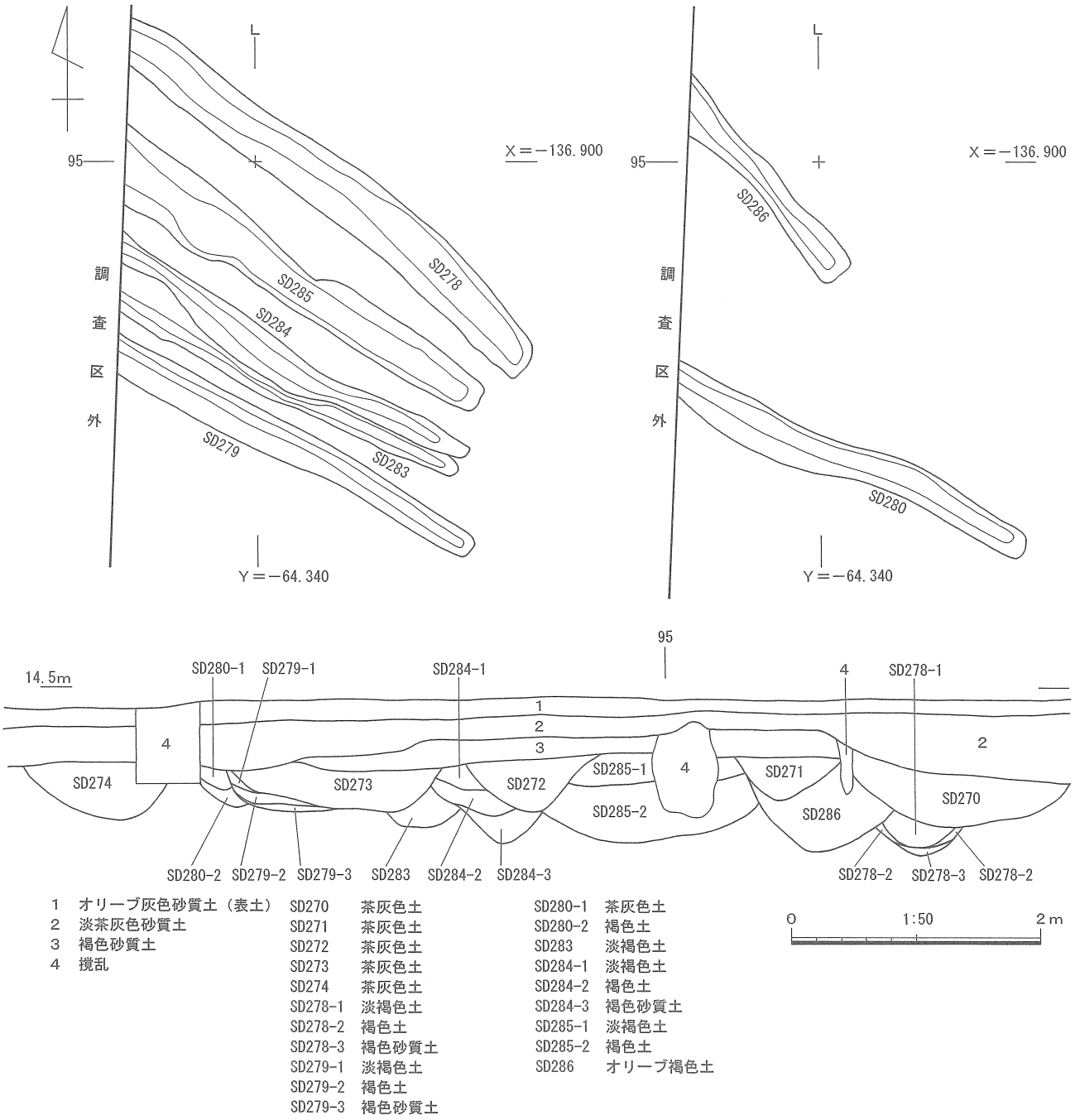
SB232（第24図：40p）

SB231とSB234に切られ、さらに南東側を撹乱で失われた状態で検出した。平面形は、やや崩れた方形である。住居跡の埋土が周囲の土と似ているうえに、すぐに乾燥して白っぽくなる土質のため、検出は難しかった。棟の方向は、N44°Wで、北西側に竈がある。この住居跡は、上面の大半を失った状態で、深さ10cm強が残っていただけである。埋土は褐色砂質土で、この上面で遺物が集中して出土したため、この面を床面と考えた。褐色砂質土の下は地山の砂礫層である。柱穴は精査にもかかわらず検出できなかった。

竈は崩れて流出した状態のため、平面形を検出したに過ぎないが、断面観察により、煙道の埋土、整地層、袖と思われる部分を識別できた。



第21図　6－1次調査遺構分布図（1）

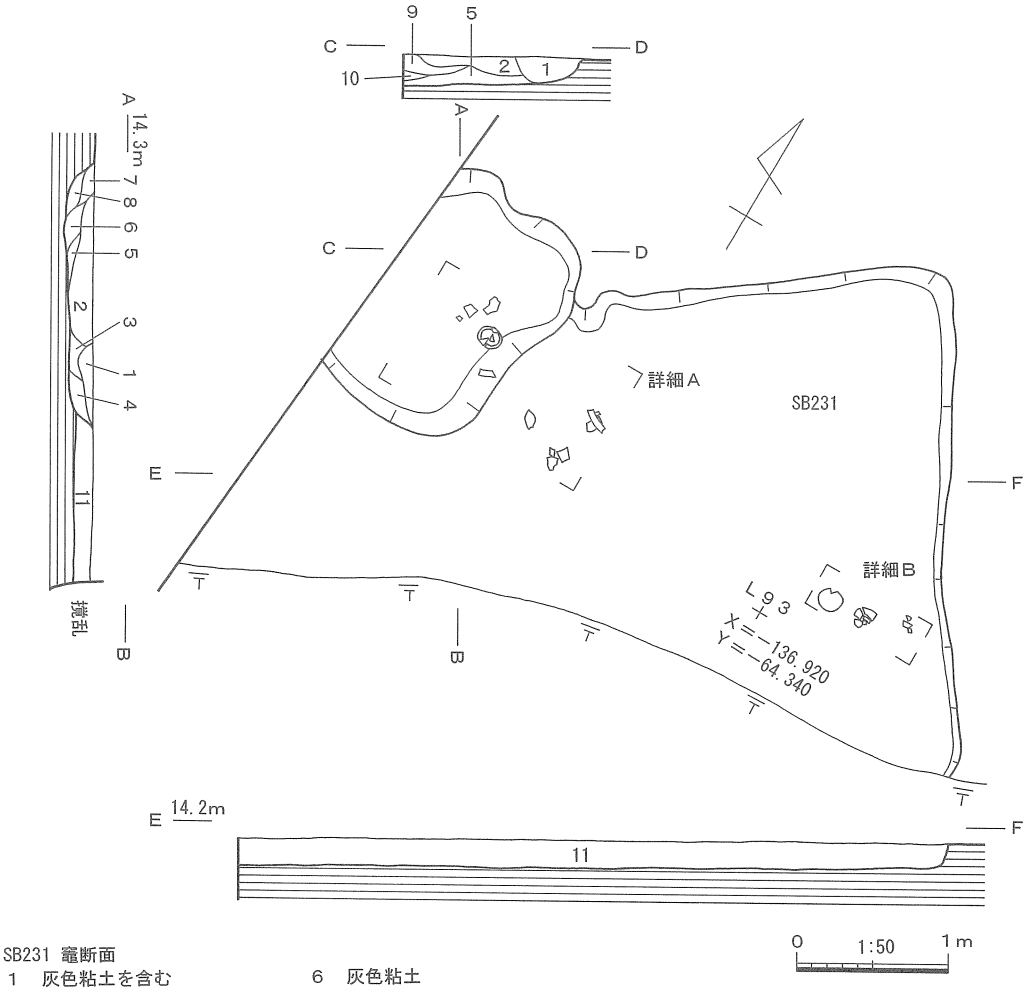


第22図　6－1次調査奈良・平安時代遺構分布図（2）と西壁断面図

遺物は、床面から第29図－7、8（47p）に示した土師器の坏と、同図9に示した土師器の甕、同図10～12の土錘が出土している。7、8の土師器は丹塗りで、8世紀前半である。ともに口縁部を強く撫でて、わずかにつまみあげる特徴がある。7、8は内外面共に丹がよく残っている。9の甕も口縁が平坦に近くなり、口縁端部をつまみあげていることから、8世紀前半と考えられる。これらの遺物から、この住居跡の時期は8世紀前半と考えられるが、他の住居跡との切り合いから、8世紀中葉古段階まで下る可能性が高い。

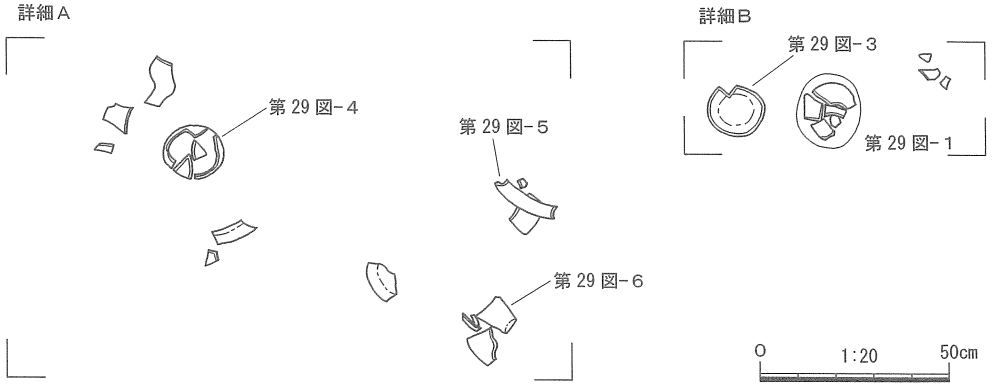
SB233（第25図：41p）

SB232とSB234に切られた状態で検出した。西側は調査区の外に出ており、検出できたのは、竈付近の一部に過ぎない。調査当初、このあたりに焼け土が分布していたため、住居跡の竈があると考えて遺構検出に努めたが、SB232とSB233は、共に主要な埋土が褐色砂質土で似ているため、分離は困難であ

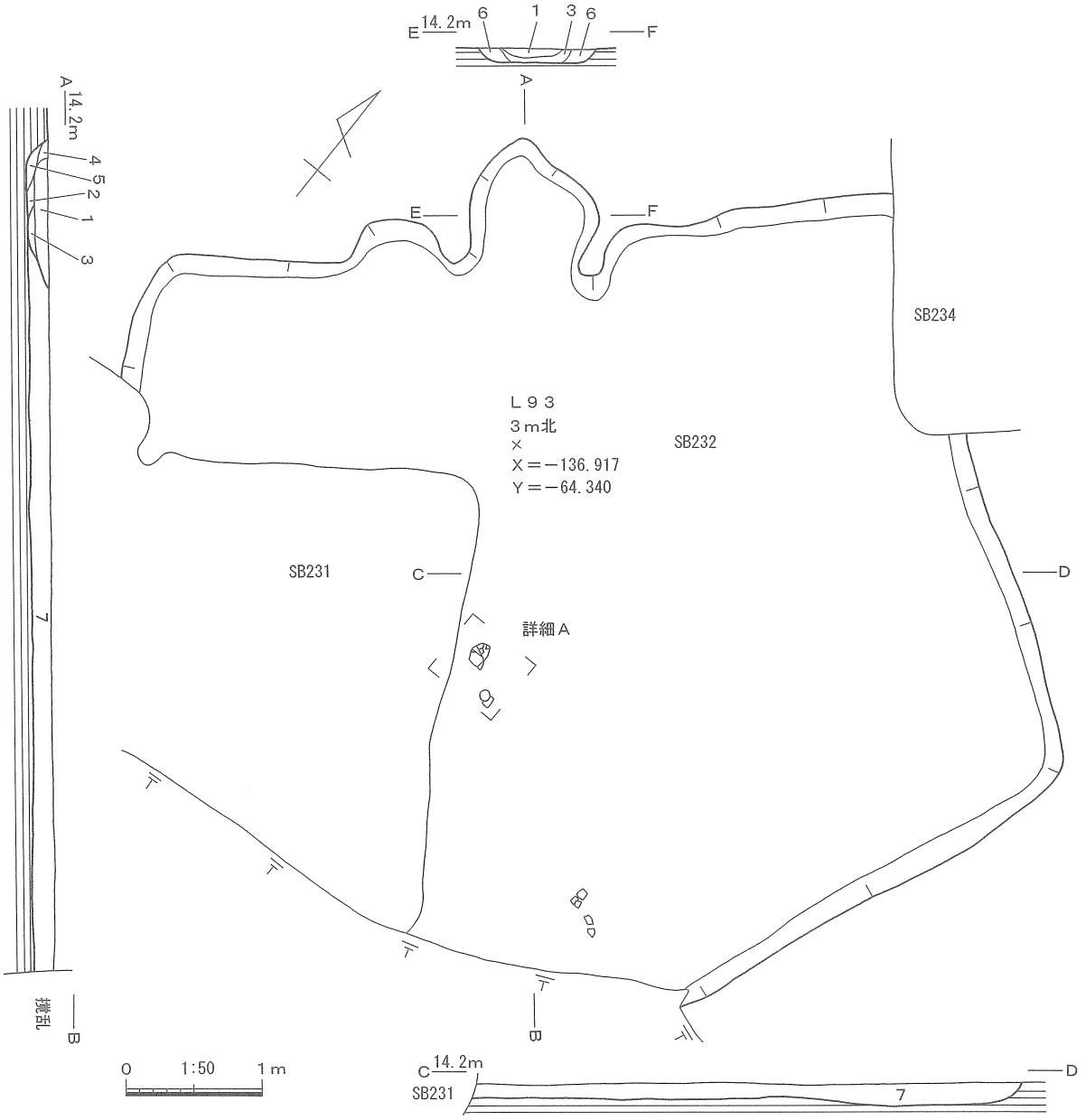


SB231 竈断面

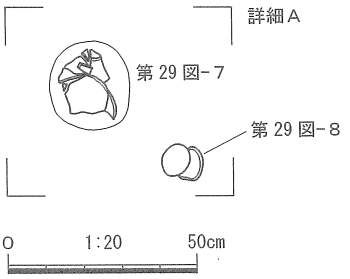
1　灰色粘土を含む
　灰白色砂質土（流出粘土）
2　茶灰色砂質土
3　褐色粘質土
4　茶灰色砂質土
5　灰色粘土と
　灰白色砂質土の混合層
　（天井の崩落か）
6　灰色粘土
7　灰色砂質土（煙道）
8　茶灰色粘土
　（煙道の整地層）
9　褐色土（炭含む）
10　黒褐色土（炭多い）
SB231 埋土
11　褐色砂質土（床土）



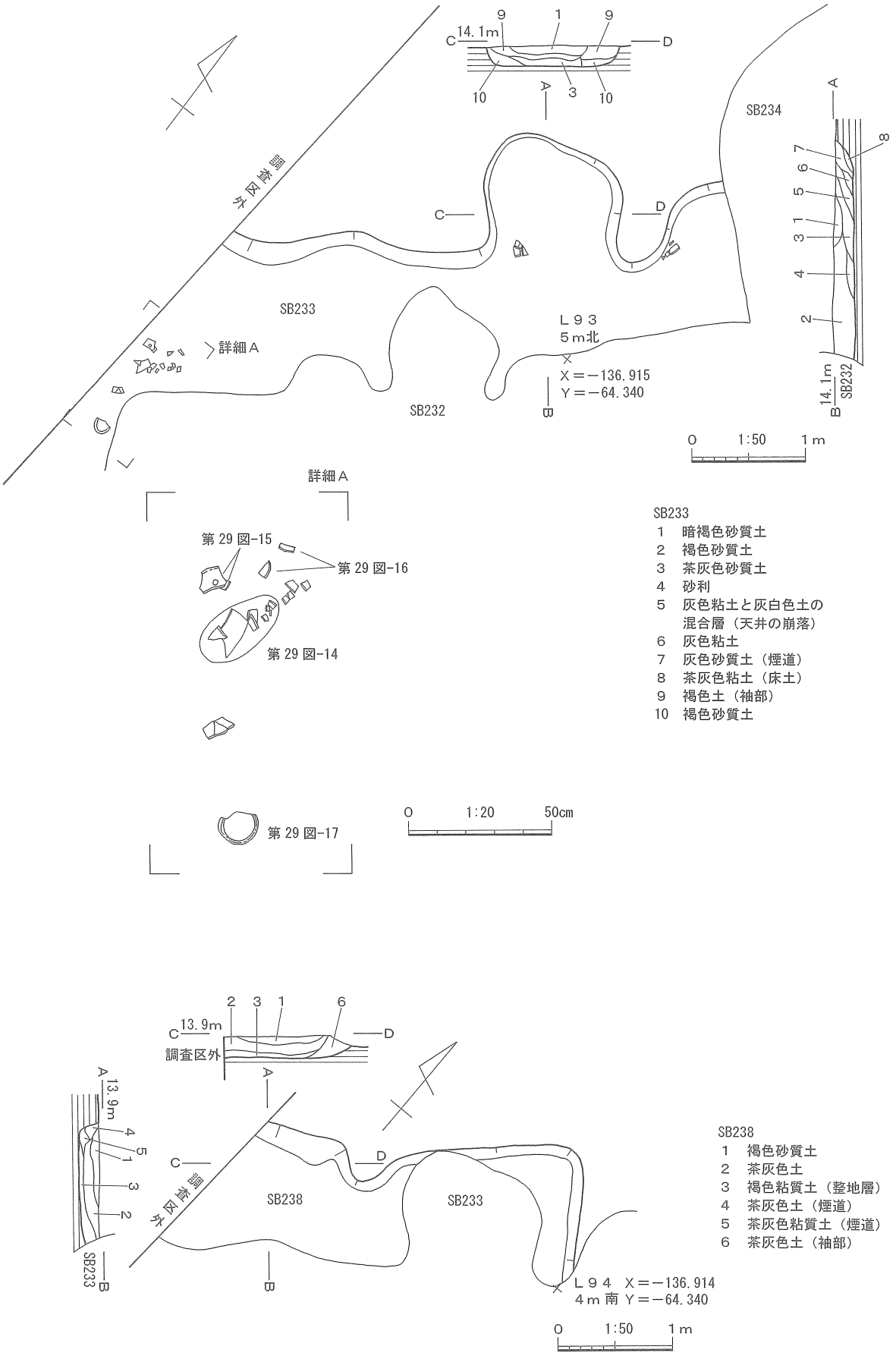
第23図　SB231実測図



SB232
竈埋土
1　茶灰色砂質土
2　淡茶灰色砂質土
3　淡褐色砂質土（整地層）
4　灰白色砂質土（煙道）
5　淡褐色砂質土（煙道）
6　褐色砂質土（袖部）
住居埋土
7　褐色砂質土（床土）



第24図　SB232実測図



第25図　SB233、SB238実測図

った。そこでまず、SB232の平面形を決定し、次にその外側に分布している焼け土と、調査区西側に現われていた住居跡の断面観察を合わせて、SB233を検出した。

埋土は褐色砂質土で、この上面で、第25図（41p）に示した遺物出土状況の詳細Ａのように、土器が集中して出土したため、この面を床面と考えた。ここで出土した遺物は下記のとおりである。須恵器は、第29図－13（47p）の坏、14の平瓶、15～17の蓋が出土している。13の坏と16の蓋は、灰白色の胎土から見て渥美・湖西産である。17は外面に自然釉が見られ、「×」のヘラ記号が見られる。土師器は、18の坏、19の皿、20の甕が出土している。いずれも住居の床面に置かれた状態で出土している。18と19は丹塗りである。時期は、13、14が８世紀前半、15、18、19が８世紀中葉古段階、16が８世紀前葉、17は７世紀後葉、20は時期判定が困難である。

これらの出土遺物から、この住居跡の時期は８世紀前半～中葉古段階に収まると考えられる。17の須恵器は、７世紀後葉と古いため、混入であろう。

竈は崩れており、平面形を検出したに過ぎない。SB232と同様に、竈の西側に偏った部分に煙道を作っていると思われる。

SB234（第26図：43p）

中央を撹乱で破壊された状態で検出した。平面形は、方形がかなり崩れていると思われ、楕円形に近くなっている。後述するように、竪穴住居跡としては、末期に近く、形態が崩れる時期にあたるため、このような平面形になっているのであろう。堀方の上方を江戸時代以降の耕作で失われ、10cm程度残っていただけであるが、床面は残っており、第26図の遺物出土状況の詳細Ａに示したように、床面で遺物が集中して出土した。

柱穴は、精査にもかかわらず検出できなかった。竈は検出していない。竈があったとすると、撹乱で失われた南東側に想定することになるが、この調査区で、南側に竈のつく住居跡はない。また、笠井若林遺跡の３次調査（当研究所2002）でも、奈良時代の住居跡を20軒ほど報告しているが、竈がつく場合は、北側が多く、東側が少数見られるが、南側につく例はない。また、この時期の竪穴住居には、竈が作られないこともあるため、もともと竈が作られなかった可能性の方が高い。

埋土は褐色土で、この面で後述する遺物が集中して出土したことから、この面を床面と考えた。

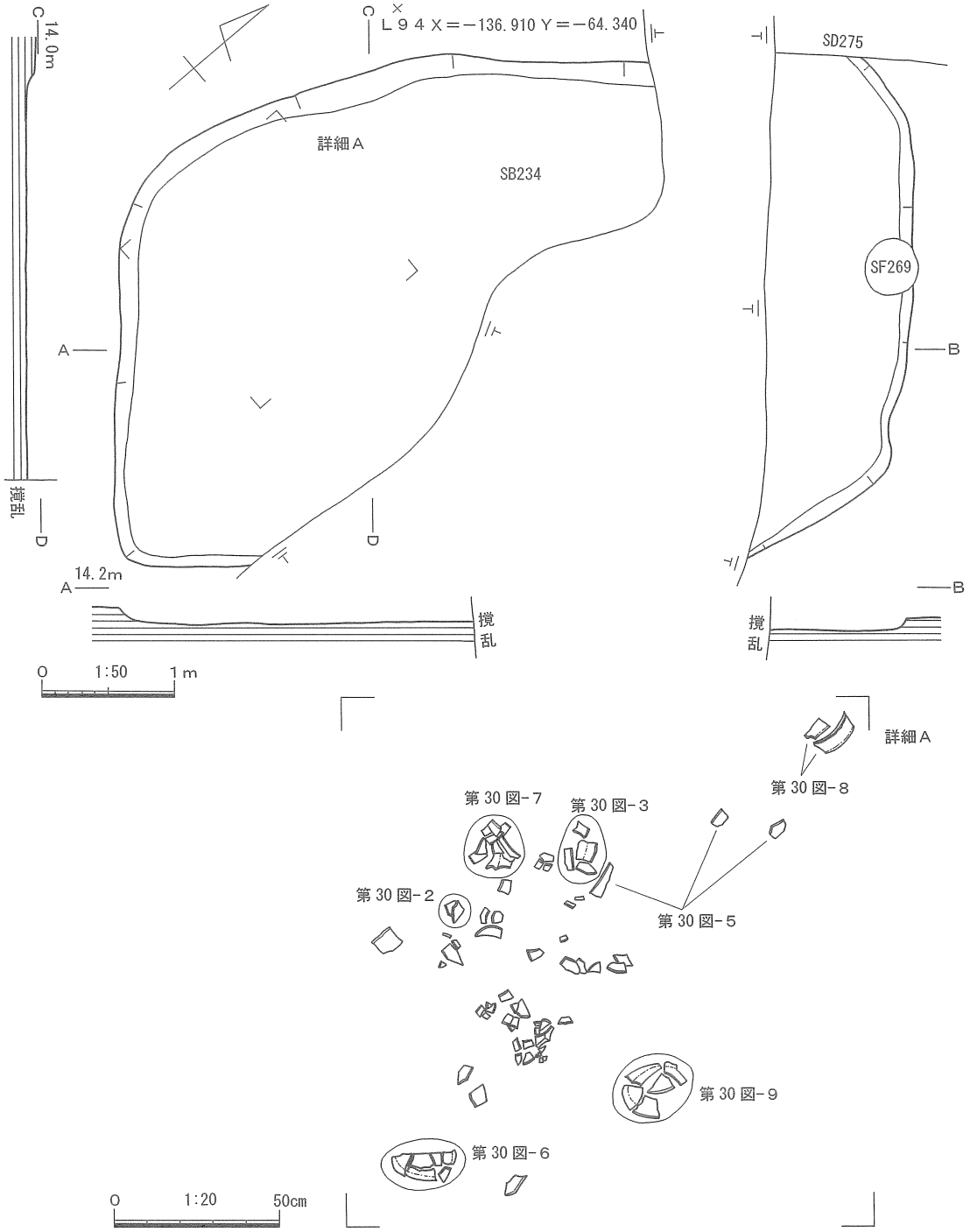
遺物は、住居跡の西隅に集中して出土した。第30図（48p）に一括で掲載してある。１は須恵器の皿で、底部が歪んでいる。また、口縁は強い撫でで平坦部を作っている。２は土師器の坏で、外面は指による押さえ、内面は工具による撫でである。口縁内面に粘土を貼り付ける特徴がある。祭祀用であろう。３～６は土師器の皿で丹塗りである。５の丹はほとんど剥落している。７、８は土師器の甕、９は土師器の鉢である。内面に指頭圧痕が良く残っている。以上の遺物の時期はすべて８世紀末～９世紀初頭であり、住居跡の時期もこの時期になる。この調査区で検出した住居跡では最も新しい時期である。

SB235（第27図：45p）

SD274、281、282に切られた状態で検出した、やや歪んだ方形の住居跡である。調査区の西端で検出したもので、調査区外にも広がっている。褐色粘質土が見られ、これが床土と考えられる。柱穴と考えられる土坑と、壁沿いに水抜きと考えられる溝を検出した。図化できる遺物は出土していないが、８世紀代に収まると考えられる。

SB236（第28図：46p）

調査区の東端で検出した方形の住居跡である。南側をSD270に切られ、東側半分は調査区外に出ている。柱穴を２つ検出している。埋土は濃褐色土で、その下に褐色土が堆積している。褐色土の下はすぐに沖積層の砂利があるため、この褐色土が床土と考えられる。図化できる遺物は出土していないが、検出面や他の住居跡との関係から考えて８世紀代に収まる可能性が高い。



第26図　SB234実測図

SB237（第28図：46p）

SB242と撹乱に切られた状態で検出した。また、調査区の東端で検出したため、半分以上が調査区外に出ており、検出できた部分は少ない。そのため、住居跡ではない可能性、例えば大型土坑の可能性もあるが、底が平坦になることから、住居跡の可能性の方が高いと判断した。埋土は褐色土で、その下は沖積層の砂利層である。柱穴は検出できなかった。また、図化できる遺物も出土していない。検出面や他の住居跡との関係から考えて８世紀代に収まる可能性が高い。

SB238（第25図：41p）

SB233を検出した際、その外側にも焼け土が分布することと、調査区の西壁に竈の断面が観察できたため、この住居跡が検出できた。大部分をSB233に切られ、さらに調査区外にも出ているため、竈付近

が残っていただけである。

遺物は、第29図－21（47p）の須恵器の坏と同図22の土師器の坏が出土している。土師器の坏は丹塗りで、外面の方が良く残っている。時期は、21の須恵器が８世紀前半、22の土師器が８世紀中葉である。これらの遺物とSB233との切り合いから、この住居跡の時期は８世紀前半～中葉であると思われる。

上記のSB231～233、238は出土遺物と切り合い関係、そして、すべて北西側に竈が付く点が共通していることや、SB232、SB233は煙道が竈の左側に偏って作られる特徴があることから、SB238、SB233、SB232、SB231の順に、８世紀前半～中葉に連続して建て直した可能性が高い。

SB242（第28図：46p）

調査区の東端でSD270に切られた状態で検出した。東側半分ほどは調査区外に出ている。埋土に褐色土が見られ、この上に白色の粘土塊が乗った状態で出土したことから、この褐色土が床土と考えられる。褐色土の下は地山の砂礫層である。出土した粘土塊は土器の材料か、竈を作る材料であろう。図化できる遺物は出土していないが、検出面や他の住居跡との関係から考えて、８世紀代に収まる可能性が高い。

溝

SD265～286（第21図：37p、第22図：38p）

調査区の北側で検出した溝群である。北西～南東方向に平行するものが多く、SD275のように、これらに直交するものもある。調査区の西壁で、第22図下段に示したような切り合いを観察できた。断面の観察から、同時に存在したのは４～５本程度で、それらの溝が埋没するたびに新しく掘り直して使っていたと考えられる。埋土は茶灰色土、もしくは褐色土を基本としている。

SD270のように調査区を貫通するものと、SD269のように調査区内で終っているものがある。これらのうち、SD270とSD272～274は、これらに直交するSD275によってつながっている。

SD268とSD269も調査区内でつながって、そこで両溝は終っている。調査区のこの辺りは北西側に下っているため、この両溝にも水が流れたとすると、この連結部分から北西側に流れたことになる。したがって、SD268とSD269の連結部分から水が出ないことには、この溝を水が流れたことにはならない。

第21図中に「湧水地？」と表示し、図版20に示したように、SD268と269の連結部分では、沖積層の砂礫が盛り上がっており、この部分の埋土には砂が多く認められた。このことから、この場所からは水が湧き出していたことが考えられる。

したがって、SD268とSD269は調査区内で終っているのではなく、調査区内にあった湧水地から溝が始まっていたと考えることができる。

同様にSD270とSD272、273、274が、SD275によってつながっている点も、SD270を南東から北西に流れる水を、SD275を介してSD272、273、274に水を分配していたのであろう。

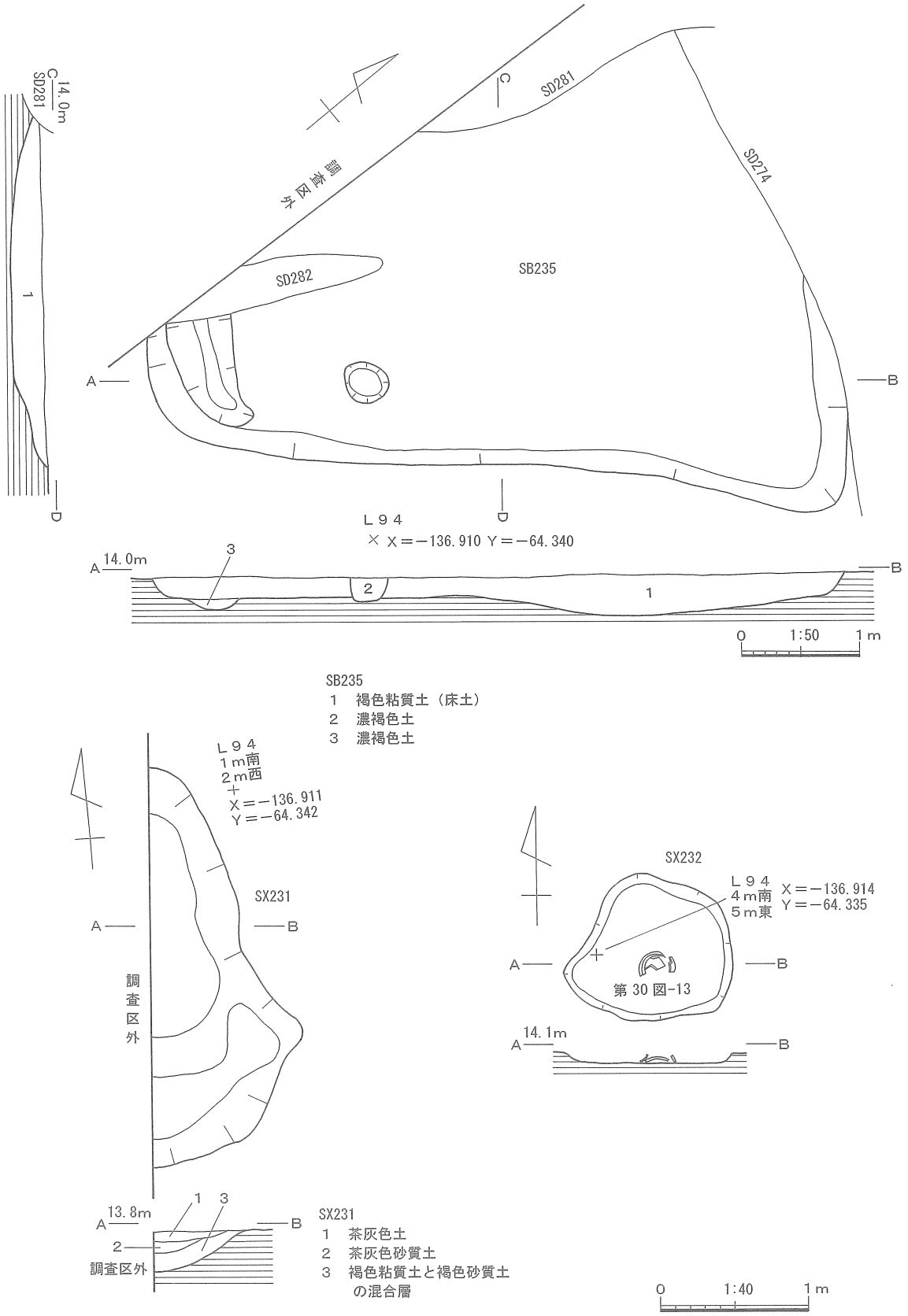
遺物は、SD278から、第30図－10、11（48p）に示した土師器の坏が出土している。10は、おそらく指による撫で調整である。11は、外面は指による撫でと思われ、内面は工具による撫でである。共に時期判定は困難だが、小型の土器で、祭祀用と思われる。水に関わる祭祀であろうか。

全体的に溝からの出土遺物が少なく、溝の時期を決定するのが困難だが、溝群の南側で検出した住居跡と埋土が似ているため、近い時期と思われる。これらの住居に住んだ集団が管理する溝と考えれば、８世紀中葉～９世紀初頭になる。

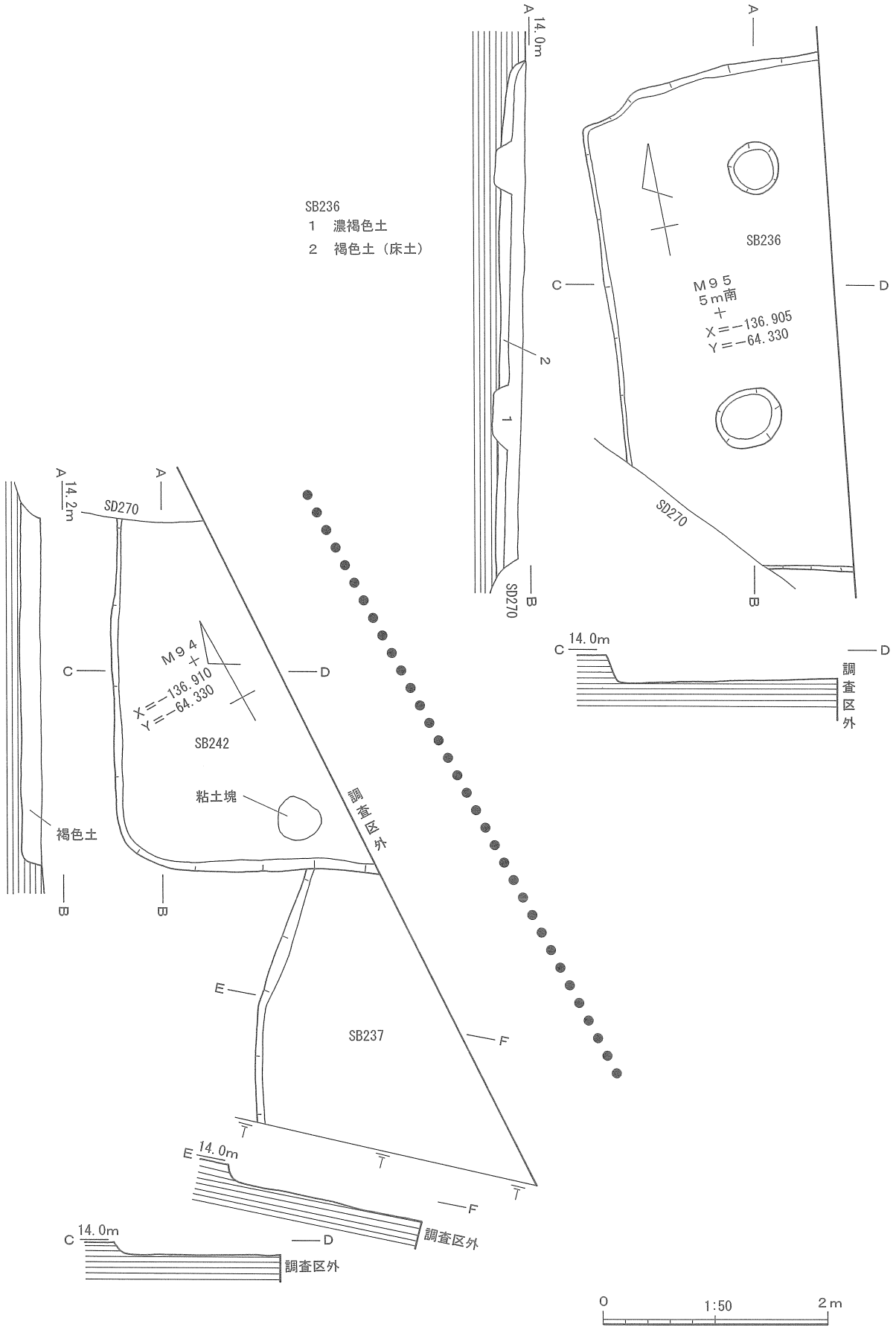
性格不明遺構

SX231（第27図：45p）

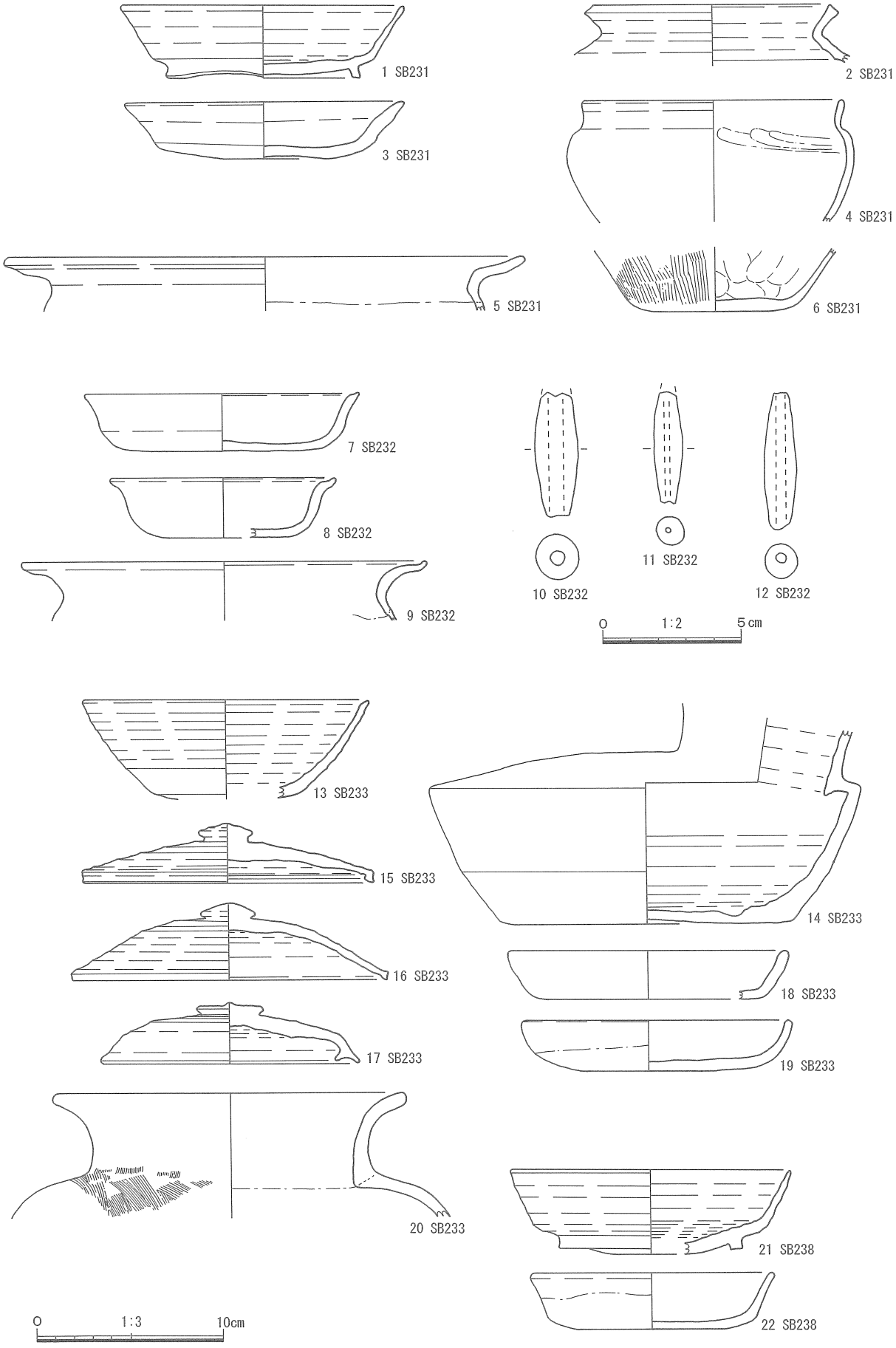
調査区の西端で検出した。不整形の落ち込みである。半分以上は調査区外に出ている。現地では住居跡の可能性があると考えて調査していたが、平面形が相当歪んでいることから、住居跡ではない可能性、例えば大型の土坑の可能性も考えられる。どちらとも判断しにくいことから、性格不明遺構とした。



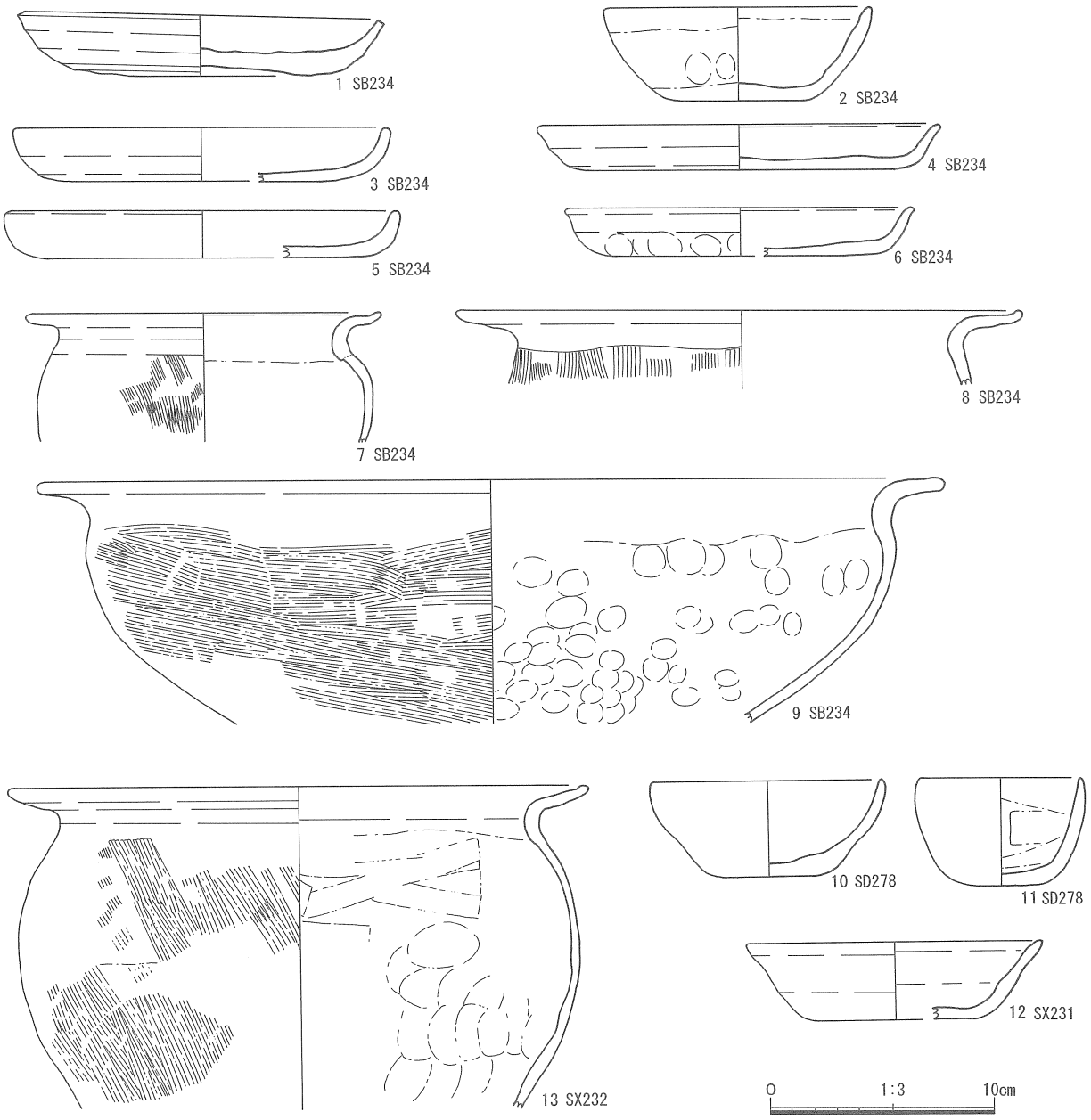
第27図　SB235、SX231、SX232実測図



第28図　SB236、SB237、SB242実測図



第29図　SB231～SB233、SB238出土遺物（10～12は1/2、その他は1/3）



第30図　SB234、SD278、SX231、SX232出土遺物

しかし、断面に見える３層は、褐色粘質土と褐色砂質土を人工的に混合したような層で、自然に堆積した層とは考えにくく、住居の床土である可能性は十分にある。

遺物は、第30図－12に示した土師器の坏が出土している。時期判定は難しいが、丹塗りである。丹は大部分が剥落し、部分的に丹が残っているだけである。また、図化はできなかったが、鉄製品と思われる遺物も出土している。これらの出土遺物から考えても、住居跡の可能性は十分にある。

SX232（第27図：45p）

これを検出した辺りは、表土直下まで沖積層が盛り上がっており、その上、江戸時代以降の耕作で撹乱されている。その撹乱の中に深さ10cm程度の土坑状の掘り込みが残っていたものである。周辺では住居跡を検出していることから、住居跡の柱穴が残っていた可能性と土坑が残っていた可能性、どちらも考えられ、判断できないことから、性格不明遺構とした。埋土は褐色土の単一土層である。

遺物は、第30図－13に示した土師器の甕が出土している。内面下半は指押さえ、上半は工具による撫でである。時期判定は困難であるが、口縁をつまみあげていることから、８世紀代と思われる。

5　6－2次調査奈良・平安時代2面目の概要（第31図：50p）

調査区の西側半分は、表土直下まで沖積層が盛り上がっており、江戸時代以降の耕作によって遺跡は失われている。また、88ラインから6－1次調査区の93ラインまでも同様であるが、耕作土中に奈良時代以降の遺物が含まれているため、本来は奈良時代以降の遺構が形成されており、撹乱で失われていると考えられる。

地形は、調査区北側で標高13.7m、調査区中央付近に向かって13.5mまで下っている以外は、ほぼ平坦である。

遺構は、住居跡を3軒検出した他は、溝と土坑である。溝の中には、方形区画溝と考えられるものがある。また、土坑には掘立柱建物の柱穴の可能性を持つものがある。

住居跡は3軒切り合っており、埋土が酷似しているため、切り合いの検出は必ずしも容易ではなかった。当初は1軒の住居として調査し始め、掘削途中で複数の住居跡が切り合っていることに気づき、改めて切り合いを確認した。

第31図（50p）で、灰色の線で示した遺構がある。これらは、奈良・平安時代の遺構調査後、念のために10cmほど掘り下げたところで検出したもので、奈良・平安時代の2面目の可能性もあるが、1面目で検出しきれなかった遺構の可能性もあるため、同一調査面として扱った。

住居跡

SB239（第32図：51p）

調査区の東端で検出した住居跡で、SB240とSF309～311に切られている。平面形はかなり歪んだ方形になると思われる。調査当初は、SB239～241を1軒の住居跡として調査し始めた。掘削の途中で、埋土に微妙な色の違いが現れたため、改めて検出し直し、SB239、SB240、SB241の3軒の住居跡を識別した。したがって、SB239として検出した部分は少ない。SB239の埋土は褐色土の単一層である。この住居跡からは、第33図－3（52p）に示した丹塗りの土師器の坏が出土している。外面の丹はほとんど剥落している。時期は8世紀末～9世紀初頭である。

SB239～241の遺物のうち、第32図に出土状況を示したものは、ほぼ同一平面で出土していることから、このレベルが住居跡の床面であったと考えられる。

SB240（第32図：51p）

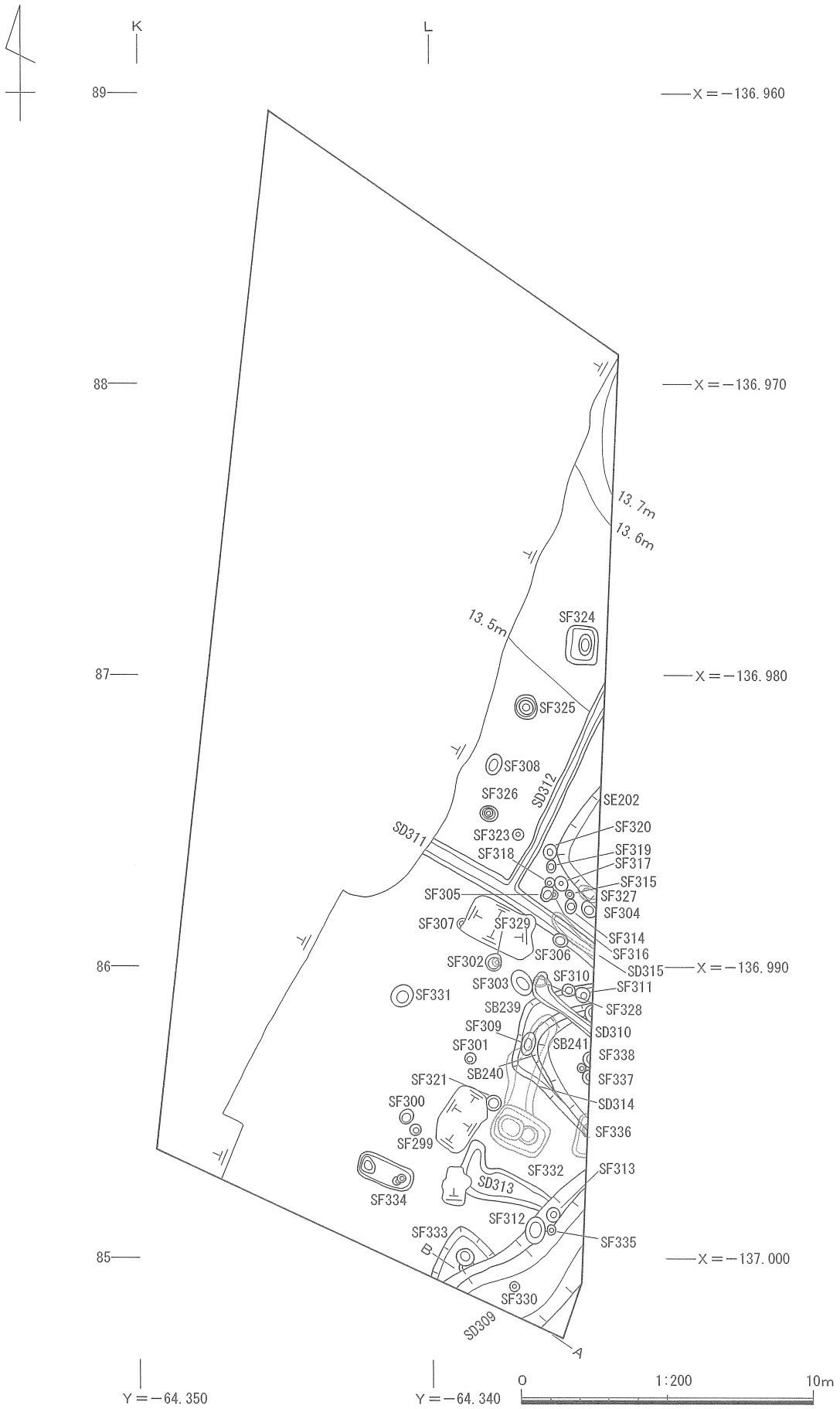
SB239を切っており、SB241に切られている。平面形は方形である。東側半分は調査区外に出ている。埋土は褐色土の単一層であるが、SB239の埋土よりもやや黒っぽいため、切り合いを検出できた。第33図－2（52p）に示した須恵器の盤と同図9に示した土師器が出土している。2の盤は、灰白色の胎土から渥美・湖西産と思われる。時期は8世紀末～9世紀初頭である。9は丹塗りで、高盤と判断したが、台付皿の可能性もある。時期は8世紀末～9世紀初頭である。また、11に示した土錘も出土している。

SB241（第32図：51p）

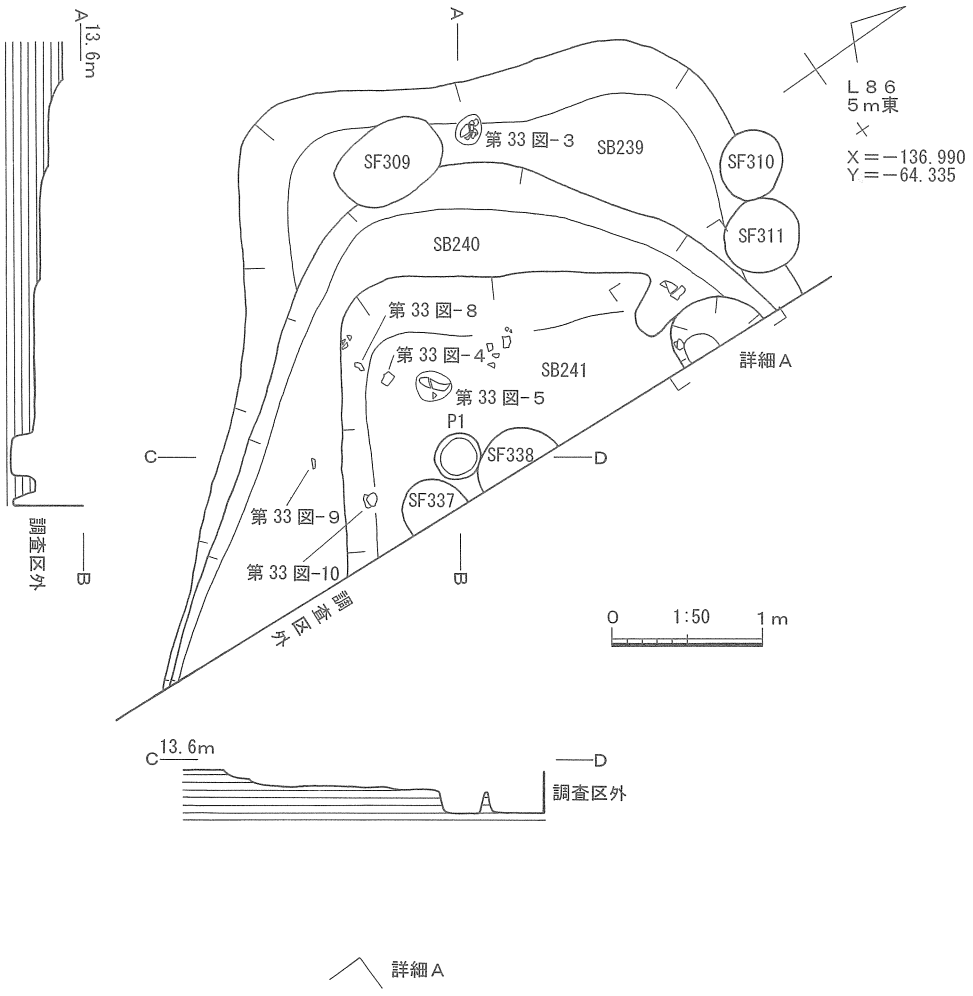
調査区の東端で検出した方形の住居跡で、東側半分ほどが調査区外に出ている。北側に竈がついているが、住居の北側中央ではなく、北側の角についているようである。柱穴はP1を検出している。埋土は褐色土であるが、SB240よりもやや暗い色であったため、切り合いを検出できた。

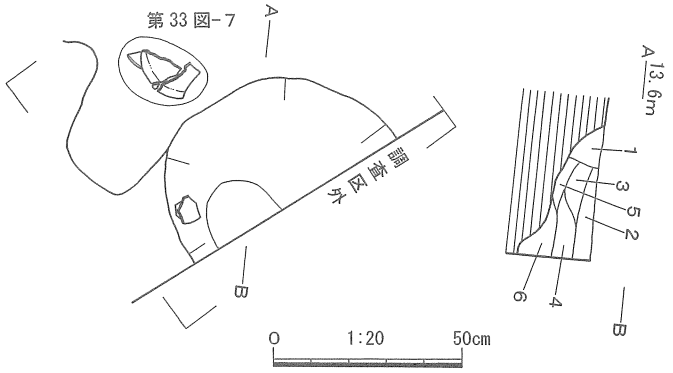
遺物は床面付近で集中して出土した。第33図－4、5（52p）に示した土師器の坏、6、7の土師器の皿が出土している。4は風化が激しい。6、7の皿は丹塗りで、丹の残りは良い。8は丹塗りで、高盤と考えたが、台付皿の可能性もある。10の土師器は、丹塗りの高盤と判断したが、台付皿の可能性もある。以上の遺物はすべて8世紀末から9世紀初頭である。また、12の土錘も出土している。

以上のように、SB239～241は8世紀末～9世紀初頭に建てられたもので、それぞれで、平面形や規模に違いがあるが、連続して建て替えたものと考えられる。



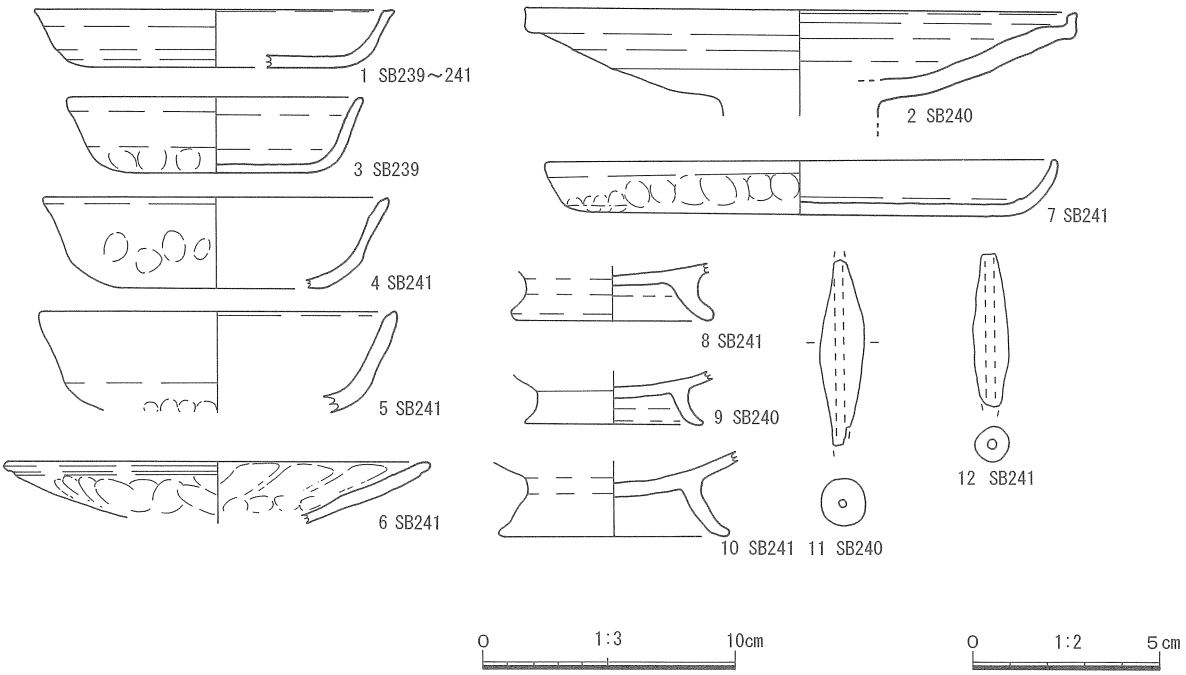
第31図　6－2次調査奈良・平安時代2面目遺構分布図





1　褐色土（煙道）
2　淡灰白色土（炭含む）
3　灰白色土（炭含む）
4　茶灰色砂質土
5　淡褐色土
6　褐色砂質土

第32図　SB239～SB241実測図



第33図　6－2次調査住居跡出土遺物（11、12は1/2、その他は1/3）

なお、第33図－1に示した須恵器の皿は、SD239～241の切り合いを検出する以前、1軒の住居跡として調査していた段階で出土したもので、いずれかの住居跡に所属することは間違いないが、正確な所属が不明なものである。口縁端部に撫でによる面取りが見られる。時期は8世紀末～9世紀初頭である。

溝

SD309（第31図：50p、第34図：53p）

調査区の南東端で検出した溝で、調査区を南東～北西方向に横切っている。第34図に断面を示したように、自然堆積で、全体的に水が流れていたのではなく、細い流路が方向を変えながら少しずつ埋没していったと考えられる。底は沖積層に達している。埋土の中で、11層の暗灰色土は目立っている。

遺物は、第35図－1（54p）に示した土師器の甕と2に示した土馬の足が出土している。1は8世紀代である。

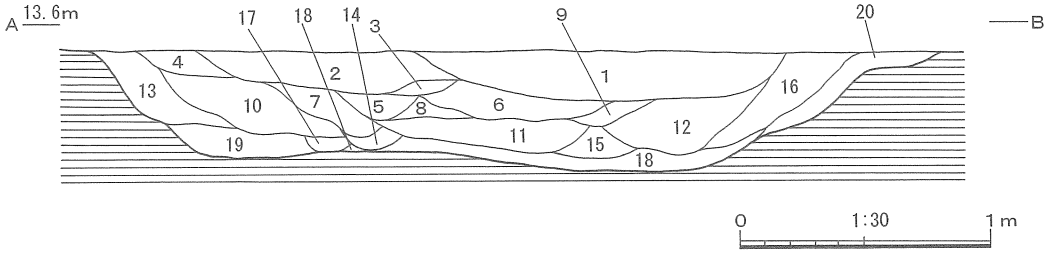
井戸

SE202（第34図：53p）

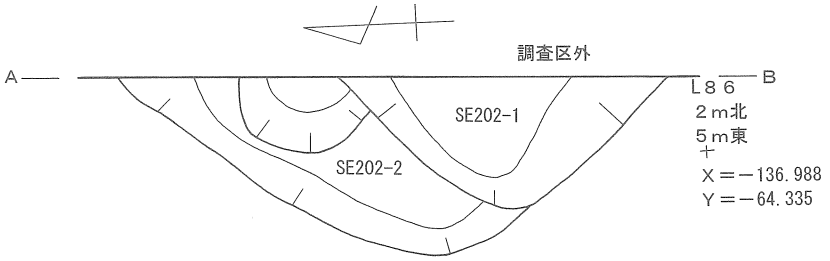
調査区の東端で検出した井戸跡で、2つの井戸が切り合っている。SE202－2は、沖積層まで掘り下げてあり、それが埋没した後で、SE202－1を掘っている。SE202－1は沖積層に達する前に掘削を止めている。これの埋土は自然堆積ではなく、ブロック状の土が投げ込まれたような状態である。新しい井戸を掘り始めたが、何らかの理由で掘削を止め、すぐに人為的に埋め戻したと思われる。

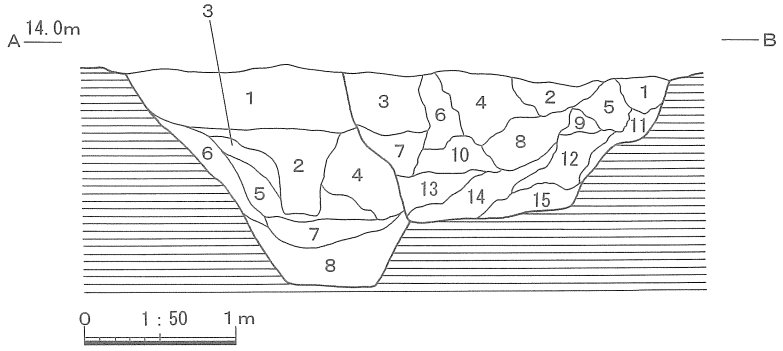
出土遺物は第36図（54p）に示した。いずれもSE202－2から出土している。1は10世紀後半～11世紀前半の灰釉陶器の碗で、内面に刻書がある。釉がかかっているため、刻書は良く残っている。細い棒状の道具で書いており、書き順はわかるが、破片のため文字なのか記号なのかは不明である。2～8は灰釉陶器の碗である。2、5は焼成が悪い。3、4、7は、内面に重ね焼きの痕跡がある。7、8は底面に糸切り痕が残っている。8は、器形から灰釉陶器と判断したが、胎土に砂が多く、山茶碗のような印象を受ける。時期は、2と4、7が10世紀中葉～後葉、3が11世紀前半、5が9世紀後葉、6が10世紀後半～11世紀前半、8が11世紀後半である。また、9の土錘と10の不明土製品も出土している。

出土遺物を見ると、9世紀後葉から11世紀後半まで200年ほどの開きがある。SE202－2は自然堆積のため、少しずつ埋まっていったと思われるが、200年は長過ぎる。9世紀の遺物は混入であり、遺物



1　灰色砂質土
2　灰色砂質土
　（黄灰色土を含む）
3　灰色砂質土
4　暗灰色砂質土
5　暗褐色土と黄灰色土
　の混合層
6　灰色土と淡灰色砂質土
　の混合層
7　黄灰色土
　（暗灰色土を含む）
8　黄灰色土と暗灰色土
　の混合層
9　灰色土
10　黄灰色土
11　暗灰色土
12　灰色土
13　暗黄灰色土
14　灰色土と白色砂
　の混合層
15　灰褐色土
16　灰褐色土と黄灰色土
　の混合層
17　暗褐色土
18　黒灰色砂質土
19　暗黄褐色砂質土
20　暗灰色土

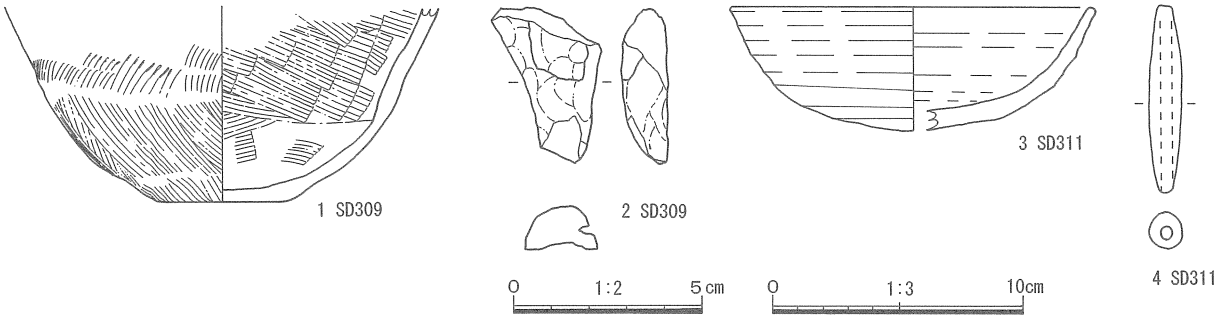




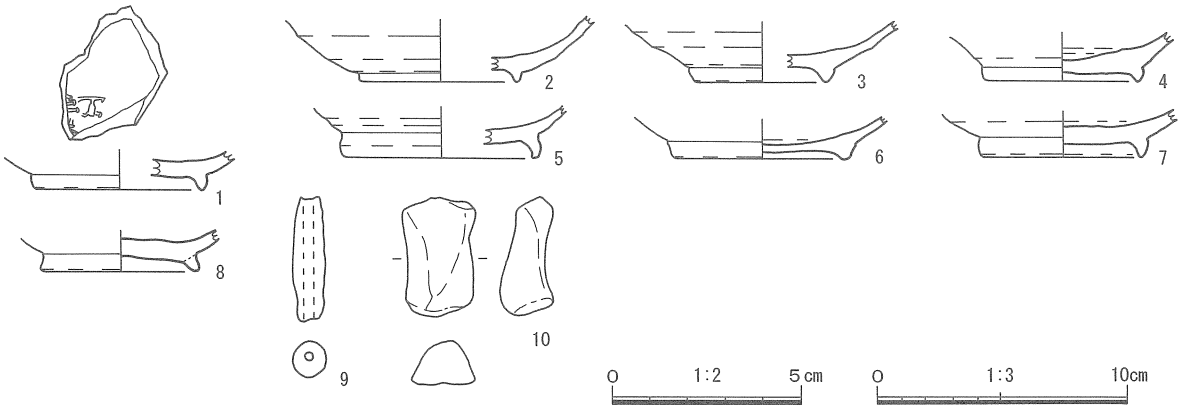
SF202-2
1　茶灰色土
2　暗褐色土
3　褐色土
4　茶灰色土と灰白色砂
　の混合層
5　茶灰色土と灰白色砂
　の混合層
6　茶灰色砂質土
7　褐色土と黄灰色土
　の混合層
8　黒褐色粘質土と灰色粘質土
　の混合層

SE202-1
1　茶灰色土
2　暗茶灰色土
3　淡褐色土
4　淡茶灰色土
5　茶灰色砂質土
6　茶灰色土
7　淡茶灰色砂質土
8　褐色土
9　淡褐色土
10　褐色土
11　暗褐色土
12　暗褐色土と茶灰色土
　の混合層
13　茶灰色土（白色砂のブロック
　を含む）
14　茶灰色土と白色砂
　の混合層
15　茶灰色土と白色砂
　の混合層（鉄分沈着）

第34図　SD309断面図、SE202実測図



第35図　6ー2次調査奈良・平安時代２面目の溝出土遺物（2、4は1/2、他は1/3）



第36図　SE202出土遺物（9、10は1/2、その他は1/3）

の多い10世紀中葉以降に廃棄されたと思われる。そして、11世紀後半には完全に埋没したと考えられる。SE202－１はその直後に掘られたと考えられるから、11世紀後半と考えるのが妥当である。

なお、SE202－１からは遺物は出土していない。

SD311、312（第31図：50p）

SD311は、北西～南東方向に直線的に延び、SD312はこれに直行してSD311につながっている。方向が違うため独立した遺構番号をつけたが、埋土が褐色土で共通しているため、両者は同時に存在し、方形区画を作っていたと考えられる。

遺物は、第35図－３（54p）に示した須恵器の坏と４の土錘が出土している。３は、らせん状の削りが良く残っている。時期は８世紀代である。

土坑

SF332、333、334、336（第31図：50p）

これらの土坑は、奈良・平安時代面の調査後、念のために10cm程度掘り下げたところで検出した。地山の砂層の中に灰色土が落ち込んでいたため、検出できたものである。奈良・平安時代面の２面目の可能性もあるが、検出面はすでに地山の砂層であるため、本来の掘り込み面はさらに上であると考えた方が良い。

これらは方形の土坑の中に円形の土坑がある点で共通しており、埋土も灰色土で共通している。SF334は、長方形の土坑の両端に円形の土坑を２つ検出した。これらは、５次調査で検出した掘立柱建物の柱穴に似ている。特にSF334は、５－１次調査で検出した布堀りの柱穴に似ている。４つ検出しただけで、調査区内で組み合うものはなかったが、掘立柱建物跡の一部である可能性は十分に考えられる。

6　6－2次調査奈良・平安時代1面目の概要（第37図：56p）

調査区の西端で標高13.9m、東端で標高13.7mであり、調査の西から東に向かって緩やかに傾斜している。表土除去後、鎌倉時代以降の調査面が現れたが、遺構が認められなかったため、すぐに掘り下げ、この面の調査にかかった。

ただし、鎌倉時代以降の調査面から、奈良・平安時代の調査面まで掘り下げる際、L85区で、16世紀後半～17世紀前半の内耳鍋が数個体分まとまって出土した。遺構がある可能性が十分考えられたため、掘削を中止して遺構検出に努めたが、遺構に関する手がかりはまったくつかめなかった。そこで、これらの内耳鍋は、包含層出土として後に報告するが、検出が非常に困難な遺構があった可能性は、なお残っている。

さて、奈良・平安時代の調査面では、土坑と溝を検出した。遺構密度は低く、遺物量も少ない。また、調査面の土層は褐色土で、遺構埋土もこれに似ているものが多く、全体的に遺構検出は難しかった。

土坑

SF290（第37図：56p）

埋土は褐色土の単一層で、検出は難しかった。第39図－1（58p）に示した土師器の皿が出土しているが、時期判定は困難である。丹塗りで、内面の丹は残りが良く、外面の丹は剥落が激しい。祭祀関連の土坑かもしれない。

SF294（第37図：56p）

埋土は褐色土の単一層で、検出は難しかった。第39図－3（58p）に示した土師器の坏が出土している。時期判定は困難である。外面は指頭圧痕が残り、粘土の積み上げの痕跡も顕著に残っている。内面は工具によって撫でている。この撫では口縁直下で終っており、口縁内側の撫でていない部分には、粘土が帯状に残っているため、口縁を内側に折り曲げたようになっている。小型の土器で、手捏ねに近い作りであることから、祭祀用と思われる。

SF295（第37図：56p）

埋土は褐色土の単一層で、検出は難しかった。第39図－4（58p）に示した須恵器の甕が出土している。口縁に近い部分だけで、他の部分は出土していない。このことから、第39図－4（58p）に図示した破片を土坑に捨てたような状況である。須恵器の時期は8世紀前半であり、土坑もこの時期であろう。

SF296（第37図：56p）

埋土は暗褐色土の単一層で、検出は難しかった。遺物は出土していないが、検出面から考えて、奈良・平安時代に収まるであろう。

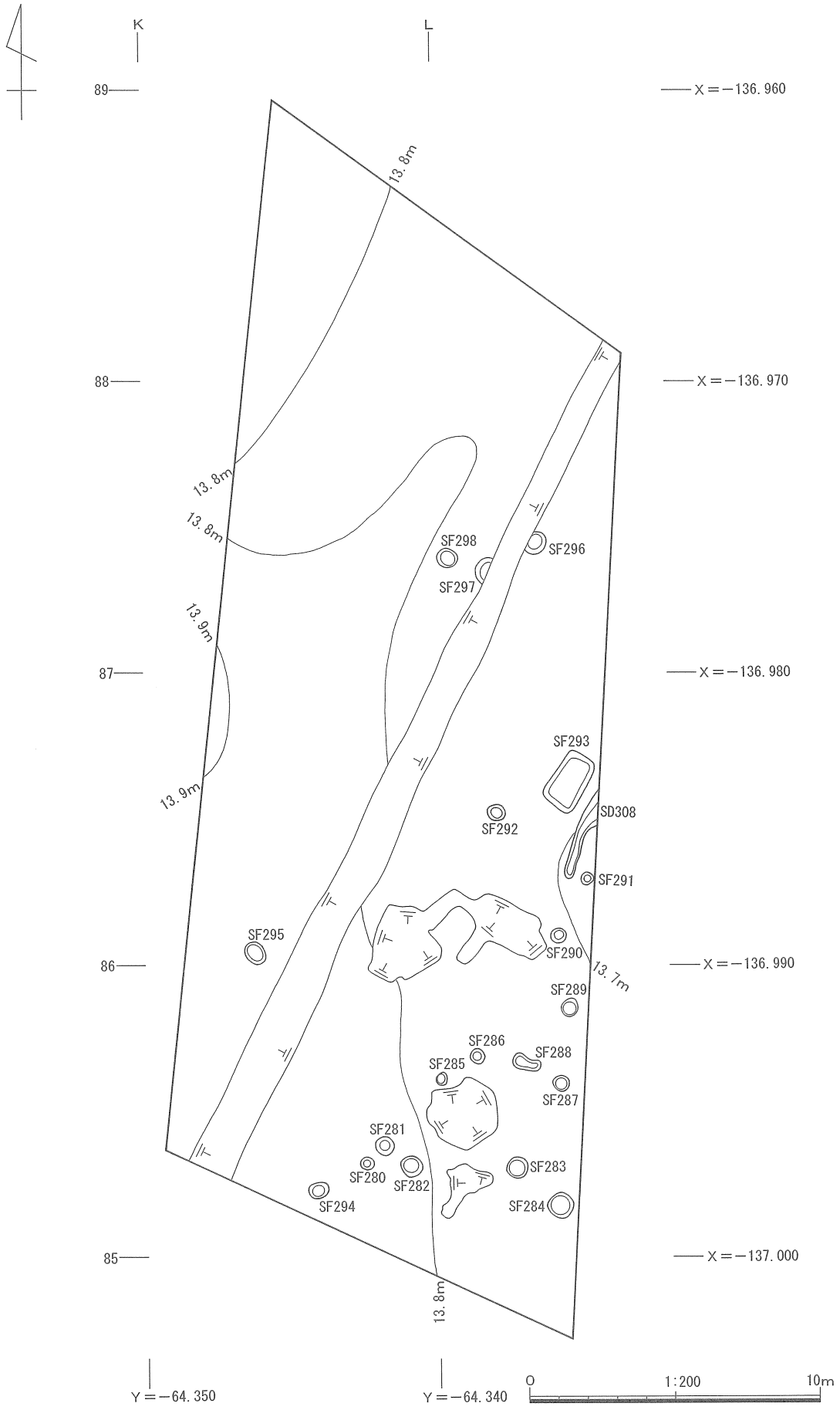
SF297（第37図：56p）

埋土は暗褐色土の単一層で、検出は難しかった。第39図－5（58p）に示した土師器の坏、6に示した土師器の甕が出土している。5は8世紀後半～9世紀初頭の土師器で、口縁部を強く撫でて端部をつまみあげているため、口縁内側には沈線のような窪みができている。そして、この土器の底には「川西」の墨書が見える。天竜川の西という意味であろう。今は、笠井若林遺跡は天竜川の西にあるが、この土器の時期、8世紀～9世紀の天竜川は、笠井若林遺跡の西側、現在の安間川付近を流れていたと言われており、そうすると、笠井若林遺跡は天竜川の東側になる。「川西」が天竜川の西側を意味するものだとすると、この土器は、天竜川の西側で焼かれたもので、笠井若林遺跡に持ち込まれたことになる。

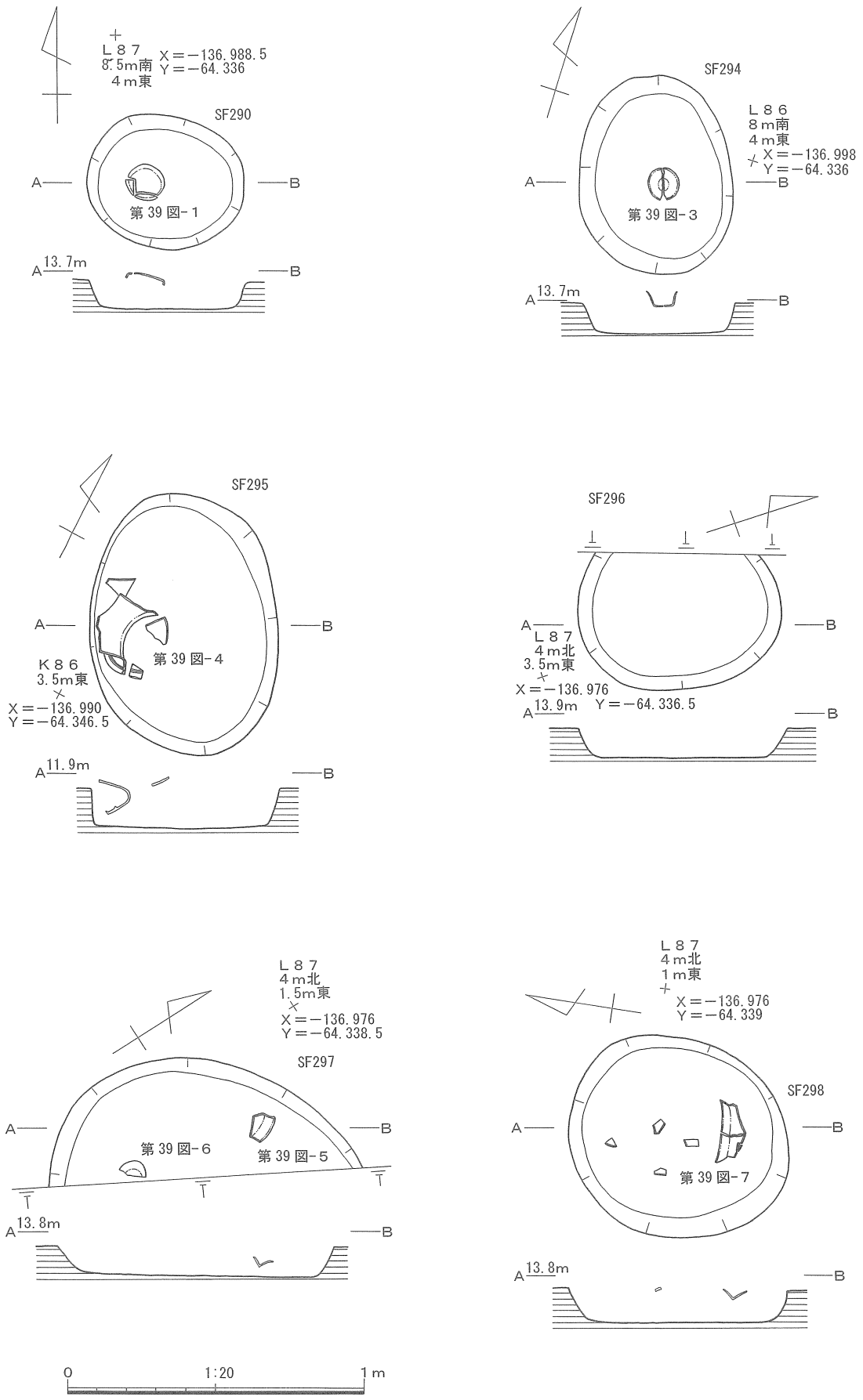
6の甕の時期は不明である。

SF298（第37図：56p）

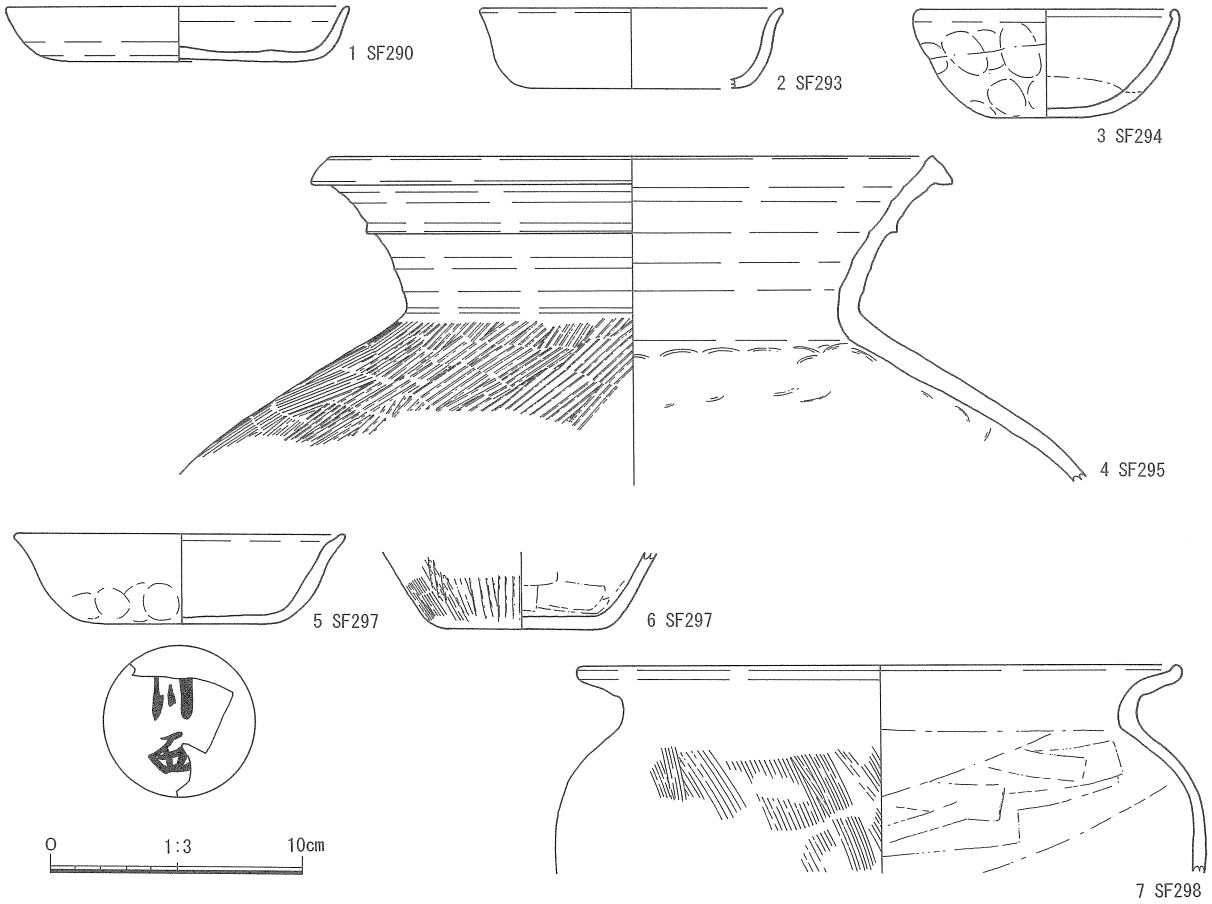
埋土は暗褐色土の単一層で、検出は難しかった。第39図－7（58p）に示した土師器の甕が出土している。時期は8世紀末～9世紀初頭である。



第37図　6－2次調査奈良・平安時代1面目遺構分布図



第38図　６－２次調査奈良・平安時代１面目土坑実測図



第39図　６－２次調査奈良・平安時代１面目の土坑出土遺物

第３節　鎌倉時代以降の遺構と遺物

１　５－２次調査鎌倉時代以降調査面の概要（第40図：60p）

調査区の地形は、北端で標高12.8m、南端で12.5mと、南に向かって緩やかに傾斜している。北端には撹乱が入っている。

この調査面では、溝を10本ほど検出した。主要な方向は北西～南東方向で、これに直行する方向の溝が少数ある。遺構密度は決して高くないが、溝の調査からいくつかの興味深い所見が得られた。

SD108は平安時代から続く溝で、調査時にはこの面で最初に検出した。断面観察から、平安時代から江戸時代以降に人為的に埋められるまで断続的に続いた溝で、途中数回の掘り直しが認められた。長期にわたって機能した溝としてその性格に興味が持たれる。

SD102は、出土遺物から13世紀に掘られた溝と思われるが、溝の一部から平安時代の土器が一括廃棄された状態で出土した。これらの土器は、後に下層で調査した平安時代の遺構から出土した遺物と接合し、その解釈が課題となった。

SD107も15世紀に掘られたと考えられ、江戸時代以降に一度掘り直されている。また、この溝から出土した平安時代の土器も、後に下層で調査する平安時代の遺構から出土した遺物と接合した。

これらの他に、江戸時代以降の掘り直しの痕跡は、SD109でも認められた。

このように、この調査面では、奈良時代、または鎌倉時代から江戸時代以降まで長期にわたって断続的に続く溝が数本見られる。鎌倉時代以降の主要な土地利用は、水田や畑と考えられることから、それらに水を引くための溝であろう。特にSD108は平安時代から断続的に続く溝で、土地を区画する性格も持っていたと考えられる。

溝

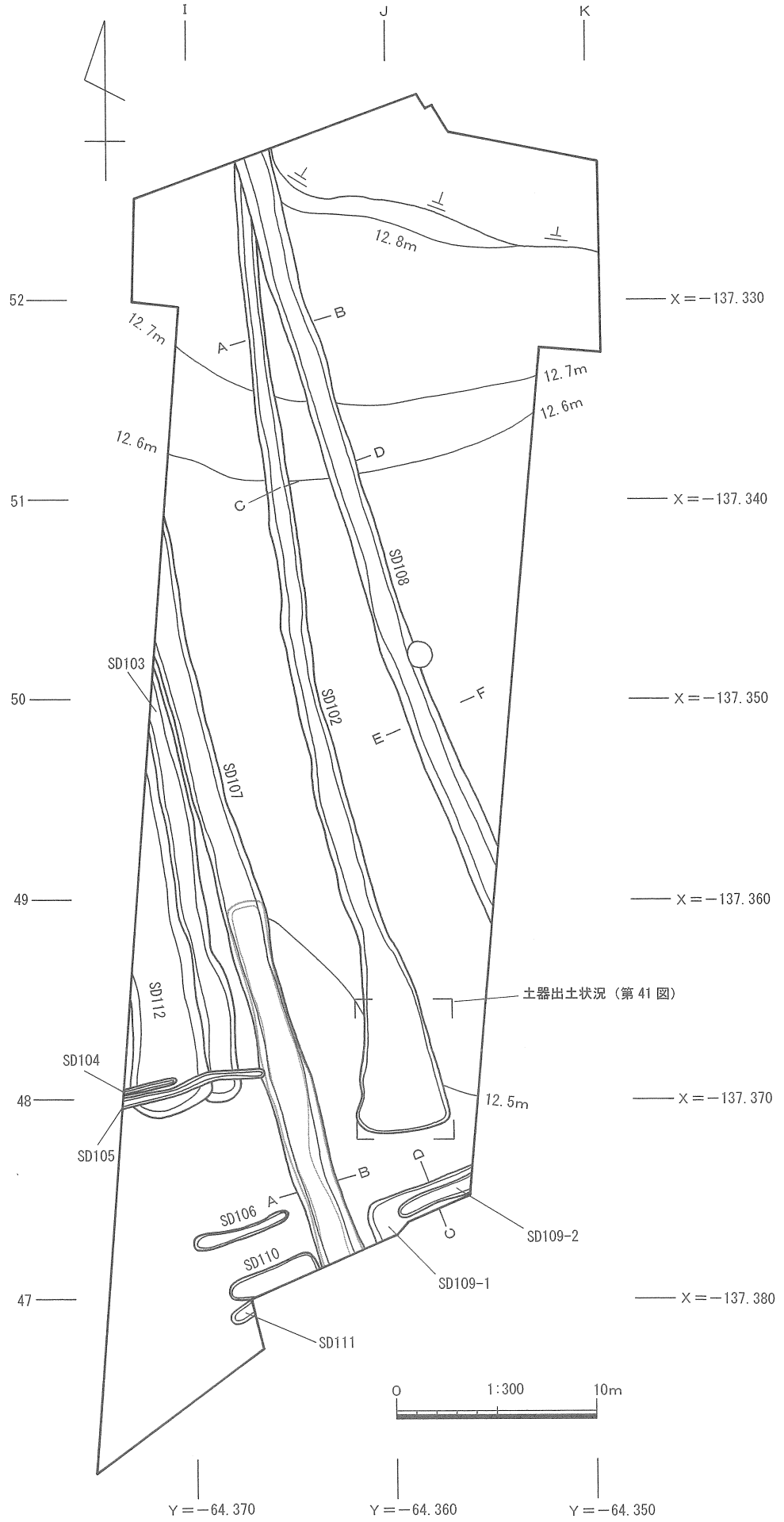
SD102（第40図：60p）

調査区の中央を北西～南東に延びている溝で、調査区の南端付近で終っている。埋土は淡褐色土の単一層であるため、短時間で埋没したと考えられる。検出は容易であった。溝が終る部分では、溝の幅が広くなり、溝が膨らむような形で終っている。

出土遺物から13世紀の溝と考えられるが、溝が終る部分、第40図に土器出土状況と示した範囲で、第41図（61p）に示したように土器が集中して出土した。すべて平安時代、９世紀代の土器である。当初は平安時代の遺構の可能性も考えたが、平安時代の遺構が検出できるのは、さらに下層であり、他の出土遺物からは、やはり、SD102は13世紀の溝としか考えられなかった。それでも、この土器集中部には、13世紀の土器は１点も見られなかった。そして、この一括出土した土器の中では、あまり接合しないため、完全な形の土器を捨て、その後に割れて破片になったのではなく、当初から破片の状態で一括廃棄したと考えられた。しかし、この溝を調査していた時点では、13世紀の溝から平安時代の土器が一括出土する理由は不明であったため、出土状況の記録をとるにとどめた。

その後、下層で平安時代のSF274やSH208を調査した際、一括遺物が出土し、中にSD102で出土した土器と同一と思われる土器が含まれていたため、これらの遺構から出土した土器と、SD102で一括出土した土器の接合作業をしたところ、複数の接合例が認められた。なお、SF274やSH208は、SD102の下にある遺構ではないので、SD102を掘削した際に巻き上げて混入したものではない。考えられることは、13世紀頃の何らかの作業、例えば耕作などで、下層にある平安時代の遺構を破壊し、その時に出土した土器をSD102に捨てた可能性である。

出土した遺物は第42図（63p）に示した。１は、９世紀中葉の灰釉陶器の碗で、SD107から出土した土器、SF274から出土した土器と接合している。なお、この土器は、第16図－２（31p）に掲載した土器と同一の土器であるため注意されたい。SF274、SD102のどちらの遺構から見ても一括資料として扱う



第40図　5－2次調査鎌倉・室町時代遺構分布図

第41図　SD102遺物出土状況

ことができるため、同一土器を２つの図面に掲載してある。

２は、９世紀後葉の灰釉陶器の碗で、SH208－P5から出土した土器と接合している。これは第14図－１（25p）に掲載した土器と同一の土器である。これも１の土器と同様、SH208、SD102のどちらの遺構から見ても一括遺物として扱うことができるため、両方の図面に掲載してある。

３、５、７は灰釉陶器の碗で、いずれも９世紀中葉である。３は内面に釉が塗られ、良く発色している。５は、やや焼成が悪い。７は内面に釉が塗られ、発色が良い。８は９世紀中葉の灰釉陶器の皿である。以上の１、３、５、７、８の土器は、SF274の時期と整合するもので、本来はSF274に含まれていた可能性が高い。４、６は９世紀後葉の灰釉陶器の碗であり、６は内面に厚く釉が塗られ、発色も良い。

９は、９世紀後葉に属する灰釉陶器の壺の底部である。内面の一部に釉がかかっている。10は９世紀後半の土師器の坏である。９と10は、SF275、SF276の時期と整合することから、本来はこのいずれかの土坑に属すると考えられる。

11～13は、土師器の坏で、いずれも９世紀前半である。11は丹塗りで、内面の丹は良く残るが、外面の丹は部分的にしか残っていない。12も丹塗りだが、丹は内面の一部に残っているだけである。13は風化が激しい。14、15は９世紀前半の土師器の皿で、14が丹塗りであるが、外面の丹は剥落が激しい。15は風化が激しい。16は土師器の甕で、口縁部をつまみあげているというよりも、これは折り曲げに近い。時期は９世紀前半である。

以上のように、９世紀前半の土師器がややまとまっているが、下層で９世紀前半になる可能性がある遺構は少なく、溝ではSD301、SD306、掘立柱建物跡ではSH207、SH212が９世紀前半になる可能性があるが、SH207、SH212は、他の掘立柱建物跡との関連から９世紀後半の可能性の方が高い。したがって、SD102から一括出土した９世紀前半の土器は、SD301、306あたりを破壊した際に出土したのかもしれないが、共に遺物の多い溝ではなく、この両溝からの出土遺物とSD102の出土遺物の間に接合関係は見られない。このことから、調査区外の別の遺構を破壊し、その遺物を捨てていると考えた方が良い。

17は山茶碗で13世紀である。砂質の強い胎土から、渥美・湖西産である。SD102の時期を示す土器である。また、18に示した砥石も出土している。

SD103（第40図：60p）

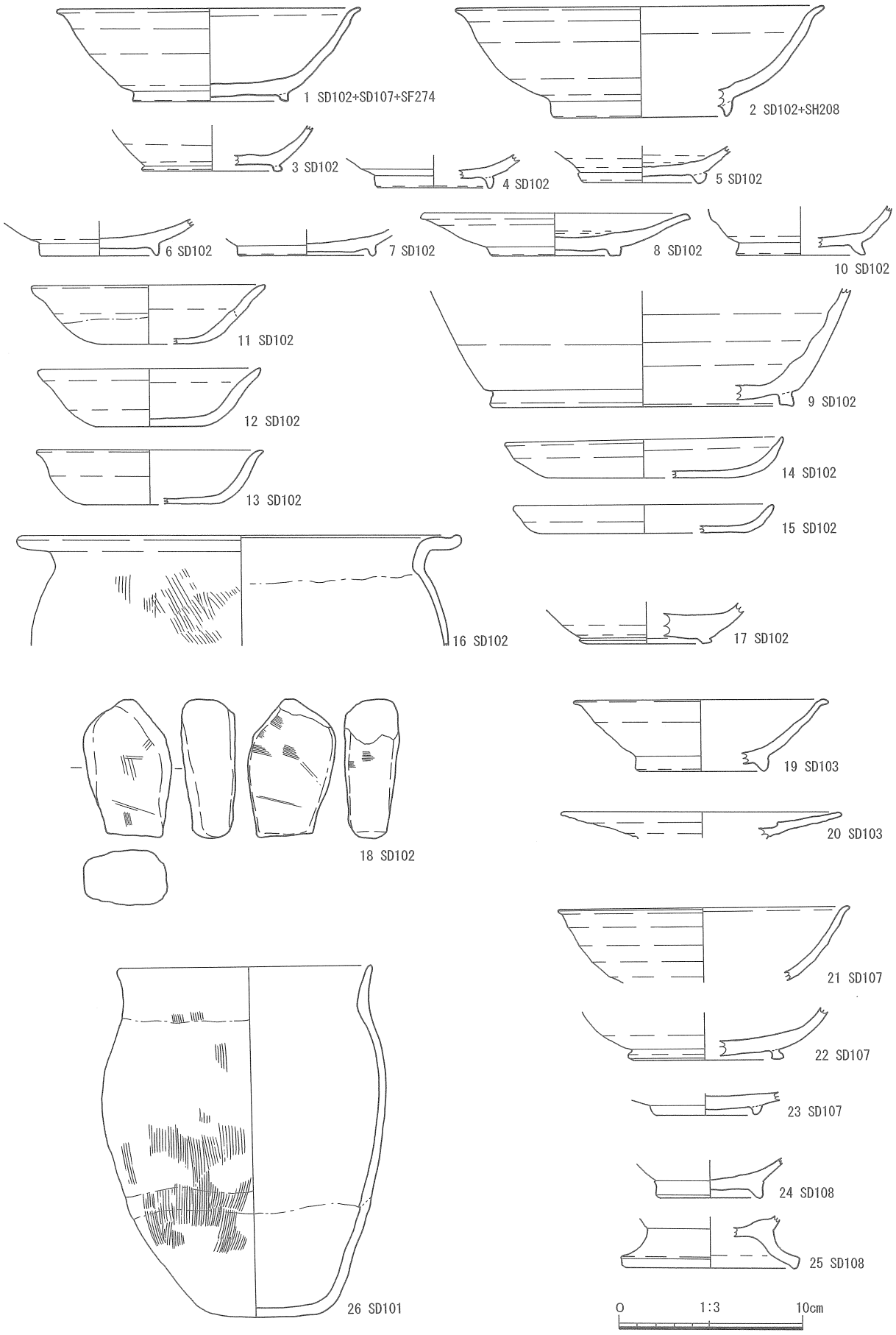
SD112に切られた状態で検出した。調査区の中ほどで終っている。第42図－19（63p）に示した灰釉陶器の碗、20の段皿が出土している。19は口縁部を強く外反させており、やや焼成が悪い。ともに10世紀後半の遺物であるが、他の出土遺物から判断して、13世紀後半～14世紀の溝である。

SD107（第40図：60p）

北西～南東方向に延びる溝で、15世紀の常滑焼と16世紀の白磁が出土している。今回検出した部分の中間あたりで、江戸時代以降に掘り直した痕跡がある。第40図には掘り直した部分を薄い線で表示してある。第43図（65p）に断面の所見を示してある。鎌倉・室町時代に掘った部分の埋土は暗黄褐色土で、江戸時代以降に掘った部分の埋土は灰褐色土で、区別は容易であった。

この溝からは、第42図（63p）－21～23に示した灰釉陶器の碗が出土している。21、22は９世紀中葉、23は10世紀前半である。21、22は内面に塗られた釉が良く発色している。

この溝から出土した遺物は、平安時代、９世紀中葉のSF274から出土した土器（例：第16図－２、第42図－１の土器）と接合している。SF274はこの溝の直下にあり、SD107の底の標高は、SF274検出面の標高とほぼ一致するため、調査時にこの溝を掘り下げる際に、下にあるSF274の土器を掘り上げた可能性は考えなければならない。したがって、第42図－21、22（63p）の灰釉陶器は、SF274の時期と一致することから、本来はSF274の土器である可能性が高い。なお、21は、SF274とSD102の遺物が接合した第16図－２・第42図－１の灰釉陶器と同一の土器の可能性がある。



第42図　5－2次調査鎌倉・室町時代溝出土遺物

SD108（第40図：60p、第43図：65p）

調査区を北西～南東方向に延びる溝で、平安時代から江戸時代以降に人為的に埋められるまで断続的に続く溝である。最初に検出したのはこの面で、検出は容易であった。この面での調査後、さらに掘り下げて奈良・平安時代の面で、同一の場所で古代にも掘った溝が検出できたため、古代から江戸時代以降まで断続的に続く溝と判断した。

そこで、奈良・平安時代の調査面で記録した断面図（第15図：30p）とこの面で記録した断面図を合成すると、第43図（65p）のようになる。

この断面から、この溝が最初に掘られてから江戸時代以降に埋められるまでの経過を見ることができる。第42図－24、25（63p）に示した灰釉陶器は、時期判定は困難だが、これらの遺物から考えて、最初に掘られたのは、平安時代と思われる。その後、３回ほどの掘り返しの後、４～８層が堆積して埋没していく。４～８層は下に行くほど砂質が強くなっていき、７、８層は砂であることから、常時水が流れながら堆積していったことがうかがえる。４層まで堆積した時点でこの溝は埋没し、一度機能を失う。その後、鎌倉・室町時代になってから再び掘り返され、２層、３層が堆積していく。３層が堆積したところで、再びこの溝は埋没して機能を失ったようである。そして、江戸時代以降に最後の掘削が行われ、最後は１層が堆積して、この溝は終っている。１層は、褐色土、灰色土、黒灰色土の固まりが入り混じった層で、自然に堆積する土層ではなく、人間が土を入れて埋めたと考えられる。

この溝は調査区の北側、２次調査区に延びており、当研究所2002で報告したSD10、14～16のいずれかにつながると思われるが、SD10、14～16は、平安時代までさかのぼる溝ではなく、その点でSD102の時期幅に合わない。おそらく調査区外で西側に方向を変えているのではないかと思われる。

また、このような溝は土地の区画溝になる可能性を考えられるが、江戸時代以降の地籍図を見る限り、この溝に該当する地境はない。ただし、この辺りの地境は、北西～南東方向であり、SD108もこれに平行しているため、これまで知られていない地境の可能性がある。

SD109（第40図：60p）

調査区南端で検出した北東～南西方向の溝である。これも第43図（65p）に断面を示したように、掘りなおした部分（図中の１層）が見られる。図示できる遺物は出土していない。９世紀前半の灰釉陶器が出土しているが、流れ込みであろう。

SD112（第40図：60p）

調査区の西端で検出した溝で、SD104、105に切られている。深さは20cm程度だが、５m近い幅がある。埋土は黄褐色土の単一層である。15世紀中頃～後半の瀬戸・美濃の縁釉皿が出土している。

SD104、105、106、110、111（第40図：60p）

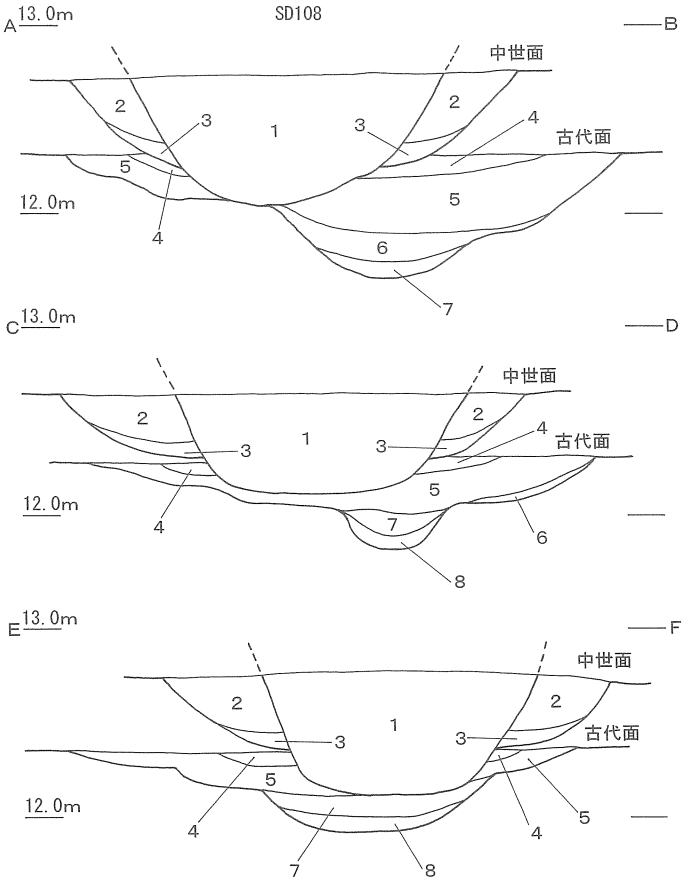
これらは小規模溝群として一括する。いずれも東西方向に掘られており、黄褐色土を埋土としている。検出は容易であった。

２　５－１次調査鎌倉時代以降調査面の概要（第44図：66p）

狭い調査区であったため、調査区内での地形変化はなく、平坦である。また、西端と南側は撹乱で遺跡は失われていた。

遺構密度は比較的高く、この調査区では、溝を10本近く検出した。ほとんどの溝が東西、もしくは南北方向に延びており、調査区内で直角に曲がる溝も見られる。これらは、２次調査で検出した溝と連続するものがあり、その際に検出した掘立柱建物跡を囲む方形区溝となる可能性が高い。他の溝も方形区画をなしていると思われる。

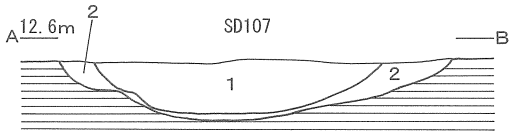
南側に隣接する５－２次調査区では方形区画を作る溝は検出していないため、この調査区で東西方向に延びる溝は、方形区画集落の南端を示していると考えられる。



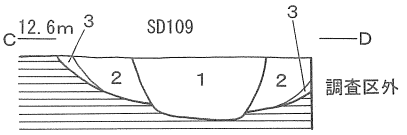
SD108
近世掘削部分
1　褐色土、灰色土、黒灰色土の混合層

中世掘削部分
2　灰褐色土
3　黄褐色土

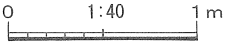
古代掘削部分
4　黄灰色土
5　暗黄灰色土
6　灰色砂質土
7　灰色砂
8　灰色砂（鉄分沈着）



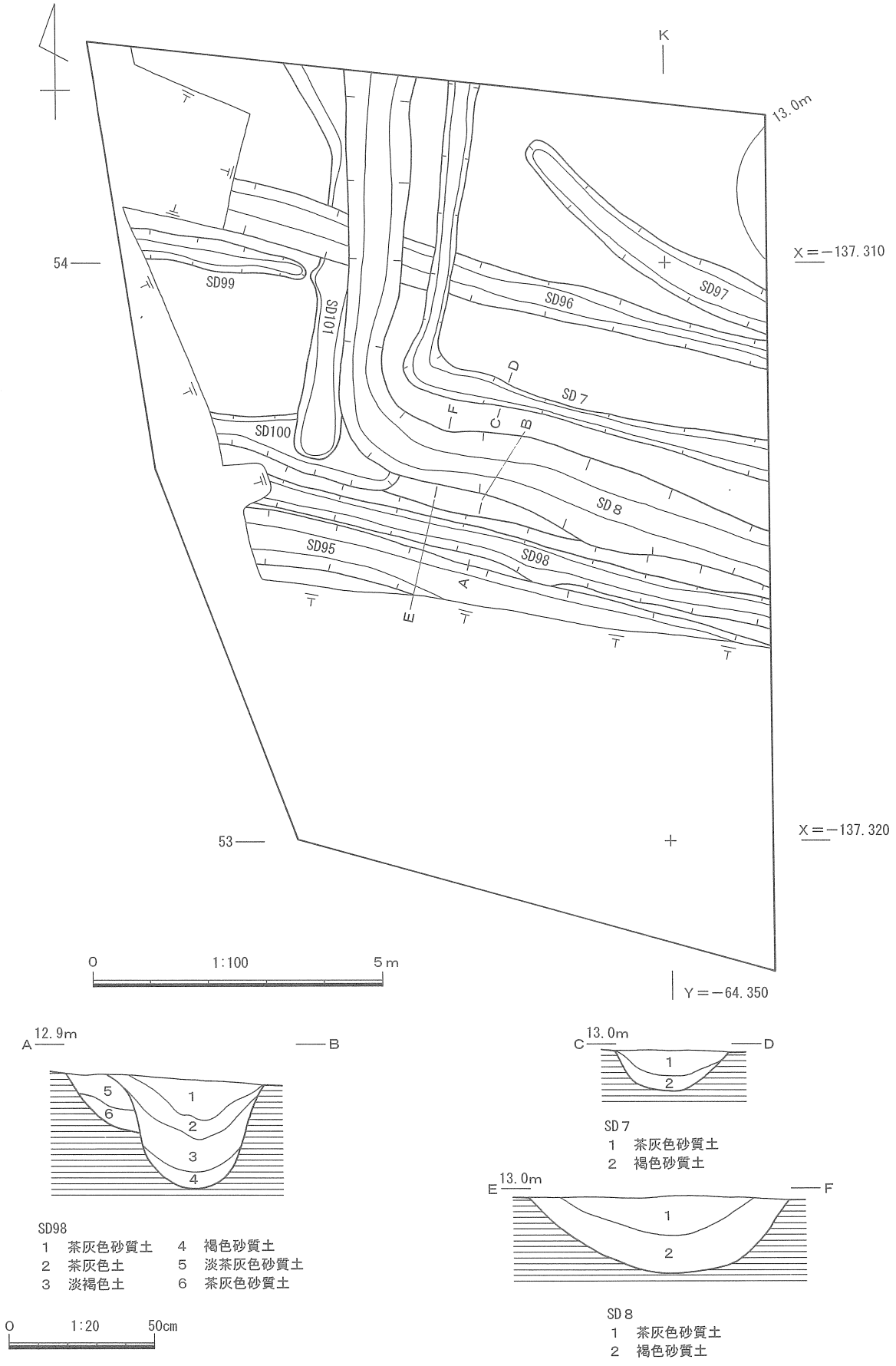
SD107
1　灰褐色土
（掘り直し部分）
2　暗黄褐色土



SD109-2
1　灰色土
SD109-1
2　黄灰色土
3　灰褐色土



第43図　SD107～SD109断面図



第44図　5－1次調査鎌倉・室町時代遺構分布図と主要遺構断面図

SD７、８（第44図：66p）

この調査区の北側に隣接する２次調査区で検出し、当研究所2002でSD７、８として報告した溝につながる溝である。明らかに同一の溝であるため、遺構番号も同一にしてある。調査区内で直角に曲がっていることで、この溝が、当研究所2002で報告したSD２～４、６のいずれかにつながって、同報告書でSH１、３、４として報告した掘立柱建物跡を囲む二重の方形区画溝になる可能性が高くなった。溝の幅から考えて、SD７が２次調査区のSD６、SD８が２次調査区のSD４につながる可能性が高い。そして、東西南北それぞれ40m程の方形区画を作っていたと考えられる。

図化できる遺物は出土していないが、溝の時期は、当研究所2002の報告どおり16世紀後半～末であると考えられる。

SD95、98（第44図：66p）

これらは、ほぼ東西方向に平行して延びている溝で、二重の区画溝に見えるが、一部でSD95がSD98を切っているため、同時に存在したのではなく、二重の区画溝にはならないであろう。SD98は第44図の断面図に示したように、１回掘り直した形跡がある。これらの埋土は、褐色土の単一土層で、マンガンの集積が見られたため、検出は容易であった。これらの溝は、西側で行った２次調査（当研究所2002）で報告した南北方向の溝、SD10、14～16、および東側で検出した、同じく南北方向の溝、SD１～３のいずれかとつながって、東西南北それぞれ60m程の方形区画を形成している可能性が高い。一辺60mの方形区画を作っているとなると、内側に上記のSD7、８で形成される二重の方形区画があり、その外側を囲んでいることになるが、SD8がSD98を切っているため、両者は別の時期の方形区画となる。

図化できる遺物は出土していないが、16世紀後半～末と考えられる。これは、SD１～３、10、14～16の時期と整合しており、このことからもSD95、96、98～100がこれらの溝とつながって、方形区画を作っていることが考えられる。

SD96（第44図：66p）

これも東西方向の溝で、SD７、８に切られている。検出は容易であった。SD95、98同様、２次調査（当研究所2002）で報告した南北方向の溝、SD10、14～16、および東側で検出した、同じく南北方向の溝、SD１～３のいずれかとつながって方形区画を作っている可能性がある。

SD97（第44図：66p）

調査区内で終る小規模な溝である。比較的明瞭に検出できた。調査区東側でSD96と平行したまま延びていくか、SD96につながっていると思われる。

SD100（第44図：66p）

調査区の西側から延びてきて調査区内で終わる溝である。深さ10cm程度の浅い溝である。

SD101（第44図：66p）

北側に隣接する２次調査区の方向から延びてきている溝であるが、２次調査（当研究所2002）ではこれにつながる溝は報告されていない。したがって、この調査区と２次の調査区の境界付近で終っているのであろう。このことから、全長６m程度の小規模な溝と考えられる。第42図－26（63p）に示した土師器の甕が出土している。時期は８世紀代であるが、この面では奈良時代の遺構は検出できないため、混入であろう。

この調査区で検出した溝の切り合いは下記のとおりである。

SD98＜SD95、SD100＜SD101＜SD96＜SD７、８

SD97、99は他の遺構と切りあっていない。

したがって、SD98が最も古く、SD７、８が最も新しいことになる。

第４節　遺構外出土遺物

第45図（69p）に５次調査で出土した遺物、第46図（71p）、47図（72p）に６次調査で出土した遺物を掲載した。６－２次調査は、江戸時代以降の耕作で、奈良・平安時代の遺構をかなり破壊していると見えて、耕作土から多くの遺物が出土した。特に６－２次調査では、８世紀後半の遺物が多い点が注目される。

１　５次調査出土遺物

第45図－１は、灰釉陶器の碗であるが、これは器形から灰釉陶器と判断したもので、胎土は須恵器そのものである。時期は10世紀前半である。２は８世紀後半の須恵器の坏である。内面に自然釉が見られる。小型の箱形坏になると思われる。３は須恵器の広口の壺で、７世紀後半になる。５次調査では７世紀の遺構は検出していないため、特異な存在である。４、５は10世紀前半と思われる灰釉陶器で、共に重ね焼きの痕跡がはっきり残っており、底面には糸切痕が見られる。また、４の焼成は良くない。５の底部には「二万」の墨書が読み取れる。吉祥句であろう。６は須恵器の壺の底部で、内面の口縁直下と思われる部分にだけ自然釉が見られる。時期は８世紀代である。

７は土師器の坏で、９世紀前半である。口縁の内側を強く撫で、わずかにつまみ上げているため、口縁内部に沈線が走っているようになっている。

８は、９世紀前半の土師器の坏で、丹塗りである。これも口縁の内側を強く撫でており、沈線のようになっている。９は、土師器の甕で、口縁部が平坦に近くなり、口縁先端をわずかにつまみ上げていることから、８世紀代であることは間違いない。10は、９世紀代の土師器の坏で、器形から見て、灰釉陶器の模倣と思われる。

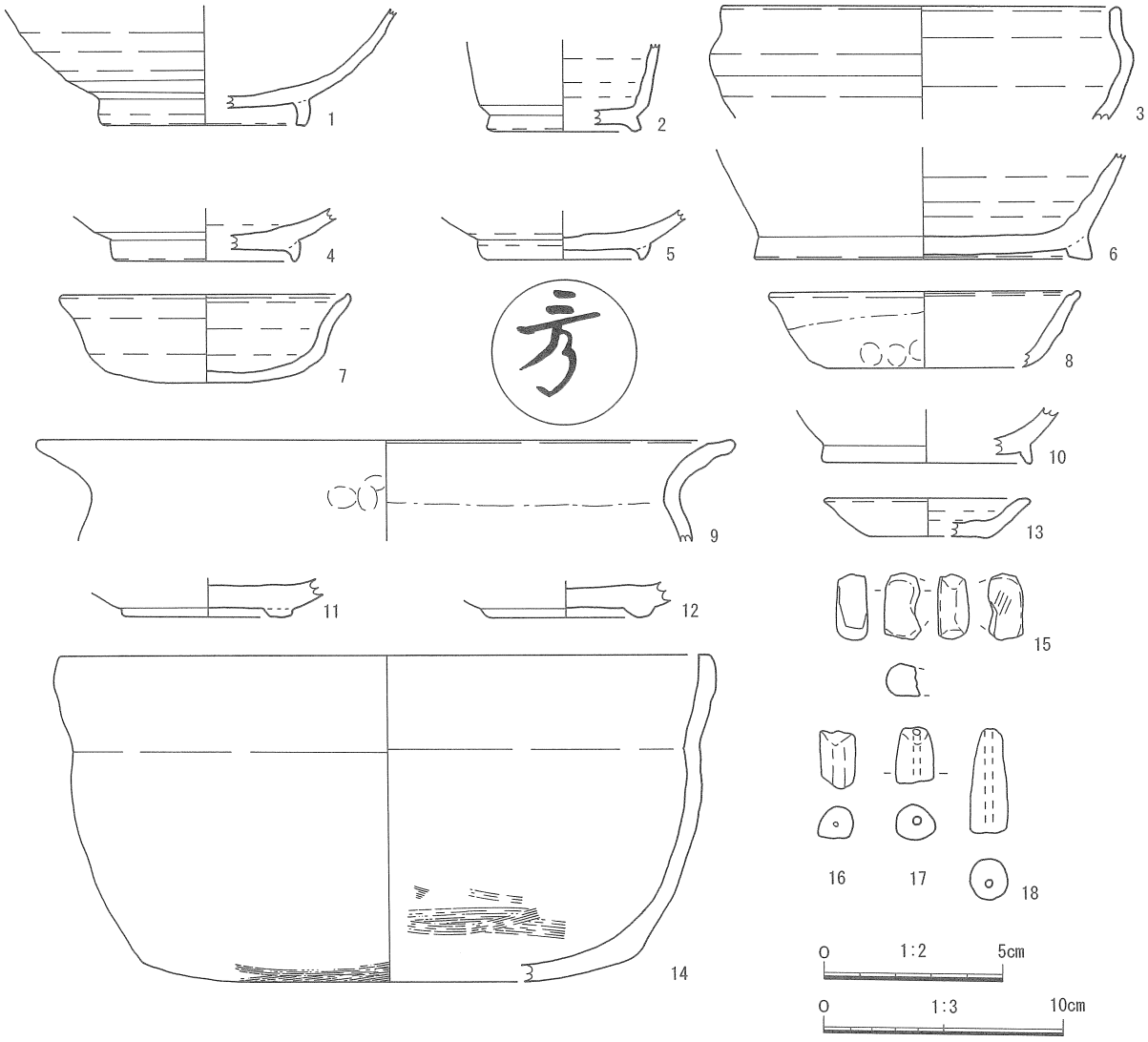
11は13世紀中頃～後半の山茶碗で、砂質の強い胎土から見て渥美・湖西産である。12も渥美･湖西産の山茶碗で、13世紀中頃～後半である。13も渥美・湖西産の小皿で、12世紀末～13世紀初頭である。

14は、17世紀代の内耳鍋である。内耳の部分は残っていない。15は土製品であるが、形は不明である。16～18は土錘である。

２　６次調査出土遺物

第46図－１は、８世紀前半の須恵器の坏で、灰白色の胎土から見て渥美・湖西産である。外面には撫でによる凹凸が顕著である。２は、須恵器の箱形坏で、８世紀後半である。底部は一回転の削りで平坦になっている。３は、須恵器の坏で、内外面共に強く撫でている。底面には不定方向の削りが見られる。時期は８世紀後半である。４も８世紀後半の須恵器の坏である。底部がやや厚く、重量感が感じられる。５は、須恵器の坏で、底面は削りが顕著に残っている。高台の撫でも強く、削りに近い。時期は８世紀後半である。６は、にぶい黄橙色で、土師器に見えるが、焼成は大変硬く、須恵器という判断もできる。当初は須恵器と考えていたが、９世紀後半以降の可能性が高いことから、須恵器よりも土師器と考えた方が妥当であろうと判断した。７は須恵器の坏で、底面が高台よりもわずかに下に飛び出している。時期は８世紀前半である。８は須恵器の皿で、口縁部に撫でによる面取りが見られる。時期は８世紀後半である。９は須恵器の皿で、高台が付くタイプである。口縁内側に強い撫でによる面取りが見られる。10は須恵器の坏と判断したが、坏の割には重量感があり、壺の可能性もある。底面は一回転の削りで平坦に仕上げてある。時期は８世紀後半である。11は須恵器の壺で、外面に自然釉が見られる。時期は８世紀代である。12は須恵器の壺であるが、時期判定は困難である。13は須恵器の甕で、外面に発色の悪い自然釉が見られる。時期判定は困難である。

14～20は須恵器の蓋である。14は、端部の返しに接合痕が残っている。時期は７世紀後葉である。15は、強い撫でによって端部を折り返している。時期は８世紀中頃である。16は、端部を撫でて三角形に仕上げている。また、外面に自然釉が見られる。時期は８世紀前半である。17は灰白色の胎土から、



第45図　5次調査包含層出土遺物（15～18は1/2、他は1/3）

湖西産と判断できる。天井部は削りで平坦になっており、つまみのつかないタイプと思われる。端部は撫ででつまみ出して、さらに外反させている。時期は8世紀後半である。18は8世紀後半で、墨痕が見られるが、硯のように磨った痕跡はない。天井部は削りが顕著である。端部は撫でによって折り返している。時期は8世紀後半である。19はつまみが取れている。端部は撫でによって三角形に仕上げてある。時期は8世紀後半である。20は灰白色の胎土から、渥美・湖西産と判断できる。天井部にはつまみが取れた痕跡がある。端部はわずかにつまみ出している。時期は8世紀前半と思われる。

21～28、30、31、37は土師器の坏で、すべて丹塗りである。29、32～36は皿で、33を除いて丹塗りである。時期は特記しない限り8世紀後葉である。21は、口縁の内側を強く撫でて、沈線状になっている。22は内外面ともに丹がよく残っている。23も内外面共に丹がよく残っている。そして、口縁を外反させる特徴がある。24は8世紀末まで時期が下る可能性がある。内面の丹は良く残っているが、外面の丹は剥落しかけている。25は内外面とも丹が剥落しかけている。26は内面の丹が良く残っており、指先で塗ったような痕跡が観察できる。27は外面で丹の剥落が著しい。28は口縁を外反させている。丹の残りは良い。29は皿と判断したが、胴部が丸く立ち上がるため、坏とも考えられる。丹塗りであるが、内外面共に煤が付いたように黒い部分がある。30は箱型のような坏である。口縁内側に強い撫でが見られる。31は内外面とも丹塗りであるが、煤がついたように黒くなっており、汚れた印象を受ける。32は口縁をやや外反させる特徴がある。これも煤がついたように汚れた部分がある。33は丹塗りではないが、内面を磨いて黒色にしてある。内黒土器と呼ばれるものである。33の時期は、単独では判断できない。34は口縁部をやや外反させている。35は内面に暗文が見られる。35は8世紀前半である。36は口縁部

をやや強く撫でて外反させている。37は丹塗りであるが、煤がついたように黒くなっており、汚れた印象を受ける。煤がついて汚れたようになっている土師器が複数見られることから、意図的に黒くしたと思われるが、詳しい原因は不明である。

第47図－１～４は土師器の甕である。１は口縁部までハケ目が見られる。時期は７世紀代である。２は外面にハケ目調整と共に、棒状工具か、櫛状工具による横方向の調整が見られる。また、内面には棒状工具による撫での後に、板状工具で撫でた跡が見られる。時期は８世紀後葉である。３は頸部内側の粘土接合痕が顕著に残っている。時期は８世紀後葉である。４は、口縁をつまみ出した際に端部が肥大したように厚くなっている。時期は８世紀後葉である。

第47図－５～９は灰釉陶器である。５は10世紀前半の灰釉陶器の碗で、胎土から見て浜北産である。６は内面に重ね焼きの痕跡が顕著である。時期は10世紀前半である。７は内面に釉が塗られ、良く発色している。時期は９世紀前半である。８は胎土から浜北産と思われる。時期は10世紀後半である。９は内面に釉が見られる。灰釉陶器であるが、砂質の強い胎土は山茶碗に良く似ている。時期は11世紀前半である。

10は、14世紀代の古瀬戸の小皿である。11は灰釉陶器の皿で、内面に塗られた釉が良く発色している。時期は９世紀後半である。

12は土師器の小皿で、指頭による圧痕がよく残っている。時期は16世紀～17世紀前半である。13も土師器の小皿で、内面は工具を使ってきれいに撫でてある。時期は16世紀～17世紀前半である。

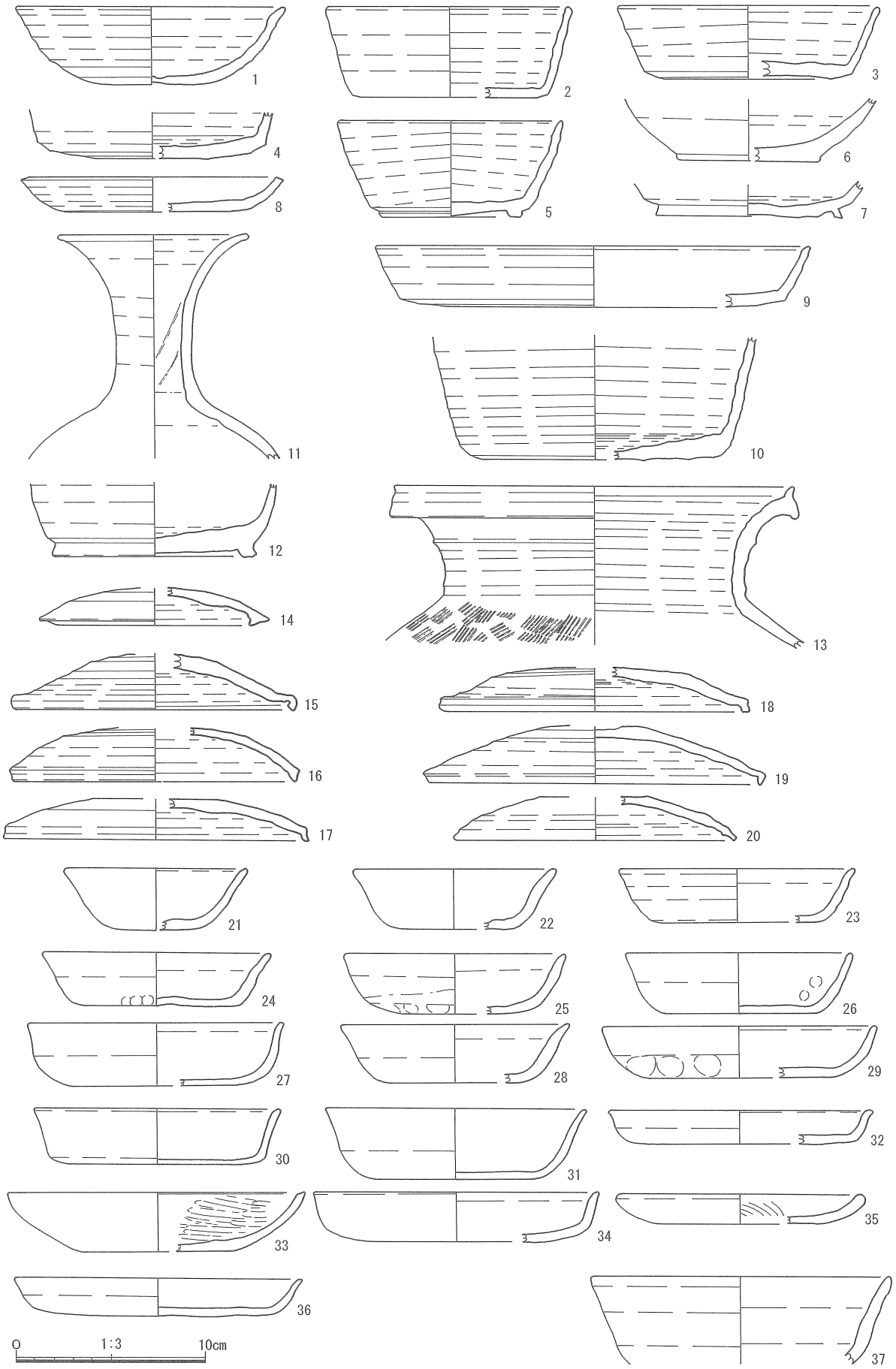
14は須恵器の短頸壺で、外面に自然釉が見られる。時期は８世紀後葉と思われる。

15～18は山茶碗である。15は渥美・湖西産の山茶碗である。高台がしっかりした作りで、12世紀前半と考えられる。16は高台に籾殻の痕跡が見られる。12世紀末である。17は高台が低く潰れたようになっており、籾殻の痕跡が顕著に見られる。時期は13世紀前半～中頃である。18は底面に糸切痕が見られる。底部は分厚く、高台を付けた後の撫でも雑である。内面には煤のような黒い付着物がある。時期は13世紀前半である。

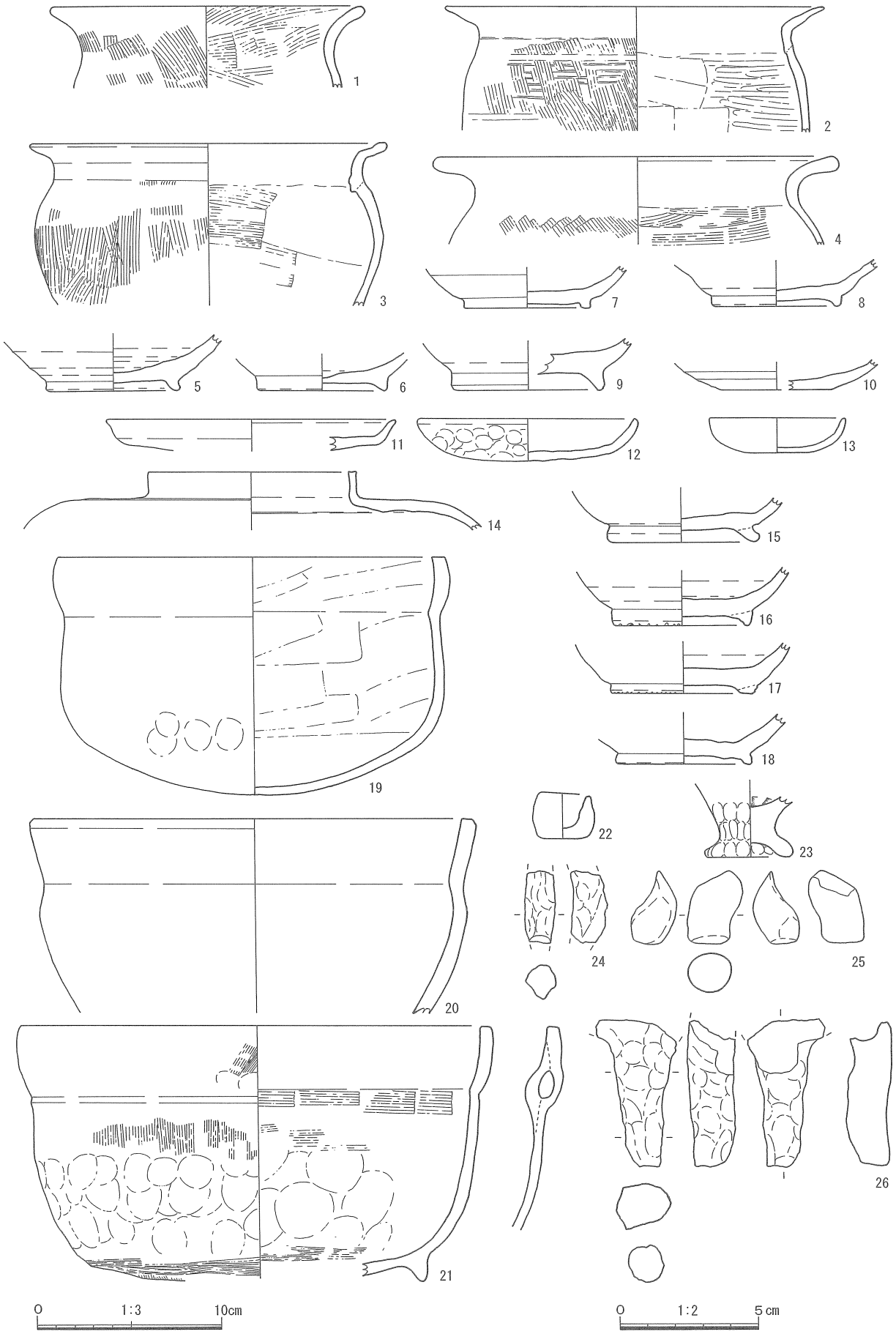
19～21は内耳鍋である。３点とも16世紀後半～17世紀前半で、かなりの煤が認められる。

22はミニチュア土器である。内面には指先を入れて回しながら撫でた後が見られる。23は土器の高台部で、手捏ね土器と思われる。指の跡が顕著である。

24と25は不明土製品である。24は土馬の足かもしれない。26は土馬の足である。



第46図　６次調査包含層出土遺物（１）



第47図　6次調査包含層出土遺物（2）

第Ⅵ章　まとめ

第１節　笠井若林遺跡５・６次調査全体について

今回の調査では、５次調査で平安時代の掘立柱建物跡を検出した。恒武遺跡群、笠井若林遺跡とその周辺遺跡のこれまでの調査で、大規模な祭祀跡の検出と祭祀用遺物の出土、墨書土器や硯など文字に関わる資料の出土などから、官衙関連遺跡が存在する可能性が指摘されてきた。

今回の掘立柱建物群の検出は、建物の性格は、さらに検討を要するが、官衙関連遺跡の一角に当たっている可能性を十分に考えて良いであろう。

６次調査では、奈良時代の集落跡を調査した。笠井若林遺跡の３次調査では、６次調査区の南側で奈良時代～平安時代の集落を調査しており、今回の調査と合わせて、笠井若林遺跡における集落の南北範囲を確定できたことになる。なお、笠井若林遺跡の７次調査では、東西方向の調査をしているが、住居跡は発見されなかったことから、東西にはあまり広がっていないと考えられる。現在の標高では、今回調査したあたりから東西方向は、標高が低くなっていることから、微高地が南北方向に伸びていたと考えられる。したがって、集落も南北方向に展開し、東西方向には広がらなかったのであろう。

第２節　掘立柱建物跡について

１　規模

今回検出した掘立柱建物跡の規模は、周辺遺跡の中でどれほどなのか検討する。今回比較に使うのは、奈良・平安時代の掘立柱建物跡に限る。

周辺遺跡で掘立柱建物跡を検出した遺跡は多い。笠井若林遺跡の周辺では、笠井若林遺跡の過去の調査や恒武遺跡群で検出されている。南に下った宮竹野際遺跡では規格性の高い掘立柱建物跡が検出されている。伊場遺跡群では、伊場遺跡の他に梶子北遺跡でも大型のものが多く検出されている。笠井若林遺跡の西にある下滝遺跡では奈良・平安時代に属するものだけで200軒近い掘立柱建物跡が検出されている。

今回はこれらの遺跡で検出された掘立柱建物跡と比較する。規模の比較方法はいくつか考えられる。１つは桁行、もしくは梁行の長さである。規模という点では桁行の方が理解しやすい。もう１つは建物面積である。ここでは梁行と桁行の長さを掛けた数字を建物面積とした。建物の規模を表わすには、面積を比較する方が有効であろう。

そこで、第６表（74p、75p）に笠井若林遺跡、恒武西宮遺跡、伊場遺跡群、宮竹野際遺跡、九反田遺跡、下滝遺跡で検出された奈良・平安時代の掘立柱建物跡を建物面積順に表示した。

これを見ると、今回検出したSH207とSH208は周辺遺跡で検出された掘立柱建物の中でも、大きな建物に入る。ちなみに桁行の長さで比較すると、SH207の9.1mというのは、５番目になる。これは梶子北遺跡で検出された大型建物群に匹敵する規模である。SH208の６mは、31番目で、梶子北遺跡で検出した大型建物群には劣るが、全体から見ると、やはり大きな規模である。

これに対してSH209、210、211はむしろ小型の建物になる。しかし、第７表（75p）に示したように、面積別の軒数で比較すると、掘立柱建物跡では、10～30㎡のものが主体となっている。特に10㎡代のものが群を抜いて多い。したがって、SH209の13㎡という面積は、小さい印象を受けるが、もっとも出現軒数の多い面積であり、SH210、211のように10㎡に満たない大きさのものは、むしろ、小型という点に特徴を見出すべきであろう。

さて、掘立柱建物跡の規模に多い、10㎡～30㎡という面積は何を意味するのであろうか。この面積は、

第６表　周辺遺跡で検出された奈良・平安時代掘立柱建物跡の面積別一覧

順位	遺跡名	報告遺構名	梁(m)	桁(m)	面積(㎡)
1	下滝	SH14 (4・5-1東-B8-f3, g3)	15	6	95
2	梶子北	SH04	5	17	79
3	梶子北	SH10	5	11	59
4	下滝	SH13 (7-E7-f6, f7)	10	6	59
5	下滝	SH18 (2-B11-e8, f9)	11	5	57
6	下滝	SH09 (7-E7-e7, e8)	8	6	50
7	下滝	SH06 (7-E7-g9, g10)	12	4	49
8	下滝	SH04 (2-C10-d7, e7)	9	5	45
9	下滝	SH03 (7-E7-f9, f10)	8	5	42
10	下滝	SH14 (7-E7-g7, h7)	8	5	40
11	下滝	SH02 (3-C9-e3, e4)	8	5	40
12	恒武西宮	SH202	5	8	39
13	伊場	NB318	9	5	39
14	下滝	SH14 (5-1西-C8-c2, c3)	8	5	39
15	九反田	SH01	5	8	39
16	梶子北	SH13	4	9	39
17	下滝	SH17 (2-B11-e8, f8)	7	5	38
18	伊場	NB325	8	5	38
19	下滝	SH06 (7-F7-b5, b6)	8	5	37
20	下滝	SH18 (7-E7-g4, g5)	7	5	37
21	下滝	SH19 (7-E7-g4, g5)	7	5	37
22	恒武西宮	SH203	5	8	36
23	下滝	SH11 (7-E7-e6, f6)	7	5	36
24	下滝	SH27 (7-E7-j8, j9)	7	5	35
25	下滝	SH02 (7-E7-g7, g8)	8	4	34
26	笠井若林	SH202	5	8	34
27	下滝	SH15 (7-E7-g6)	8	4	34
28	下滝	SH05 (4・5-1東-B8-h2, i2)	7	5	34
29	梶子北	SH11	4	8	33
30	恒武西宮	SH206	5	7	33
31	下滝	SH03 (6-2南-D3-f7, f8)	7	5	32
32	下滝	SH36 (4・5-1東-B8-d2, e2)	7	5	32
33	梶子北	SH08	4	8	32
34	梶子北	SH09	5	7	32
35	下滝	SH04 (7-E7-f8, f9)	7	5	32
36	梶子北	SH03	4	7	31
37	宮竹野際	SH03	4	7	31
38	笠井若林	SH204	4	8	30
39	下滝	SH12 (7-E7-e5, e6)	7	4	30
40	下滝	SH33 (7-E7-g3, g4)	7	4	30
41	伊場	NB319	6	5	30
42	下滝	SH03 (7-E8-e2, f2)	6	5	30
43	笠井若林	**SH207**	**3**	**9**	**30**
44	下滝	SH23 (7-E7-i3, j3)	5	5	29
45	宮竹野際	SH03'	4	7	29
46	下滝	SH26 (4・5-1東-B8-h7)	6	5	29
47	伊場	NB202	7	4	28
48	梶子北	SH05	4	8	28
49	下滝	SH08 (7-E7-d9, d10)	7	4	28
50	宮竹野際	SH01	4	7	28
51	恒武西宮	SH204	5	6	28
52	伊場	NB315	6	5	27
53	下滝	SH29 (7-E7-j4)	7	4	27
54	下滝	SH04 (7-F7-a7)	5	5	27
55	下滝	SH15 (2-B11-g8)	6	5	27
56	下滝	SH08 (4・5-1東-B8-j3)	5	5	27
57	笠井若林	SH205	4	6	26
58	下滝	SH35 (4・5-1東-B8-d1)	5	5	26
59	下滝	SH04 (5-2・6-1-D5-b4, b5)	5	5	26
60	笠井若林	**SH208**	**4**	**6**	**26**
61	下滝	SH17 (7-E7-d3)	7	4	26
62	下滝	SH09 (2-C10-f7, f8)	6	4	25
63	下滝	SH11 (2-C10-b9)	6	4	25
64	下滝	SH01 (3-C9-i1, i2)	6	4	25
65	伊場	NB317	7	4	25
66	下滝	SH08 (7-F7-a3, a4)	5	5	25
67	下滝	SH07 (2-B11-i6, i7)	5	5	25
68	下滝	SH14 (2-B11-g7)	5	5	25
69	下滝	SH16 (7-E7-c3, c4)	6	4	25
70	下滝	SH20 (7-E7-g2, g3)	6	4	25
71	下滝	SH21 (7-E7-g3, h3)	6	4	25
72	下滝	SH04 (5-2・6-1-C6-f2, f3)	6	4	25
73	伊場	NB307	5	5	25
74	下滝	SH34 (4・5-1東-B8-b1, b2)	7	4	24
75	下滝	SH02 (5-2・6-1-D6-c1, c2)	5	5	24
76	下滝	SH27 (4・5-1東-B8-g7, h7)	6	4	24
77	下滝	SH24 (7-E7-h4, i4)	5	5	24
78	下滝	SH13 (2-B11-g7)	5	5	24
79	宮竹野際	SB01	3	7	24
80	宮竹野際	SH02	4	6	24
81	宮竹野際	SH04	3	7	23
82	笠井若林	SH206	4	6	23
83	宮竹野際	SH08	3	7	23
84	下滝	SH07 (7-E7-g10, h10)	5	4	23
85	下滝	SH22 (7-E7-h3, h4)	5	4	23
86	下滝	SH20 (4・5-1東-B8-f4, f5)	5	4	23
87	下滝	SH09 (4・5-1東-C8-a2)	6	4	23
88	笠井若林	SH201	3	8	23
89	下滝	SH03 (4・5-1東-B7-d10)	6	4	22
90	下滝	SH11 (5-1西-C8-c1, d1)	5	4	22
91	伊場	NB239	5	5	22
92	伊場	NB309	5	5	22
93	伊場	NB321	5	4	22
94	下滝	SH02 (7-E8-e2)	6	4	21
95	下滝	SH17 (4・5-1東-B8-e4, f4)	6	4	21
96	下滝	SH03 (5-2・6-1-C6-f4)	4	6	21
97	宮竹野際	SH05	5	5	21
98	宮竹野際	SH06	5	5	21
99	下滝	SH04 (6-2北-E2-d4, d5)	5	4	21
100	下滝	SH01 (7-E7-g8, h8)	5	4	21
101	下滝	SH02 (5-1西-D8-a1)	5	4	21
102	下滝	SH07 (6-2中-D3-f4)	5	4	21
103	宮竹野際	SB03	4	6	21
104	下滝	SH02 (6-2北-E2-b7)	5	4	21
105	下滝	SH28 (7-E7-j5, j6)	5	5	20
106	下滝	SH02 (6-2南-D4-b1, c1)	5	5	20
107	伊場	NB316	5	4	20
108	山の神	SB34	4	5	20
109	伊場	NB327	5	4	20
110	伊場	NB203	6	3	20
111	下滝	SH29 (4・5-1東-B8-b1, c1)	5	4	20
112	伊場	NB332	5	4	20
113	下滝	SH05 (6-2北-E2-d4, d5)	5	4	20
114	伊場	NB304	5	4	19
115	下滝	SH11 (6-2中-D3-e6)	5	4	19
116	下滝	SH01 (1-A9-j4)	5	4	19
117	下滝	SH19 (4・5-1東-B8-f4, f5)	5	4	19
118	下滝	SH30 (4・5-1東-B8-b1, c1)	4	5	19
119	下滝	SH31 (4・5-1東-B8-c1)	4	5	19
120	下滝	SH32 (4・5-1東-B8-c1)	4	5	19
121	下滝	SH07 (4・5-1東-C7-b8, b9)	4	5	19
122	下滝	SH01 (5-1西-C7-g10)	5	4	19
123	下滝	SH02 (5-1西-C7-g10)	5	4	19
124	伊場	NB312	4	4	19
125	下滝	SH11 (2-B11-h7, i8)	5	4	19
126	下滝	SH04 (5-1西-C8-g2)	5	4	19
127	下滝	SH16 (2-B11-f7)	5	4	18
128	梶子北	SH02	3	6	18
129	伊場	NB322	5	4	18
130	下滝	SH03 (6-2北-D2-j7)	5	4	18
131	下滝	SH05 (7-F7-a6)	5	4	18
132	下滝	SH03 (2-B11-g5, h5)	5	4	18
133	下滝	SH06 (4・5-1東-B8-i2, i3)	5	4	18
134	下滝	SH01 (6-2南-D3-c7, c8)	5	3	18
135	下滝	SH01 (7-E8-b1, c1)	5	3	18
136	下滝	SH13 (5-1西-C8-c2)	5	3	18
137	伊場	NB311	5	4	18
138	山の神	SB26	3	5	18
139	伊場	NB313	4	4	18
140	宮竹野際	SH05	4	4	18
141	下滝	SH02 (6-2北-D2-h5, h6)	5	4	18
142	下滝	SH01 (5-1西-D8-a1, b1)	5	4	18

順位	遺跡名	報告遺構名	梁(m)	桁(m)	面積(㎡)
143	伊場	NB306	5	4	17
144	下滝	SH05 (6-2中-D3-h6)	4	5	17
145	下滝	SH12 (6-2中-D3-i5)	4	5	17
146	下滝	SH06 (2-B11-g7, h7)	5	4	17
147	下滝	SH08 (2-B11-i7)	5	4	17
148	下滝	SH23 (3-C8-d7)	5	4	17
149	下滝	SH04 (4・5-1東-B7-c9, c10)	5	4	17
150	下滝	SH07 (7-F7-a3)	4	4	17
151	下滝	SH08 (6-2中-D3-f4, f5)	4	4	17
152	下滝	SH01 (7-F7-a8, a9)	4	4	17
153	下滝	SH06 (4・5-1東-C7-a7, a8)	4	4	17
154	下滝	SH21 (4・5-1東-C8-a5, a6)	4	4	17
155	下滝	SH03 (5-1西-C7-f10)	4	4	17
156	宮竹野際	SH10	4	4	17
157	梶子北	SH14	4	4	17
158	下滝	SH10 (7-E7-d6, e6)	5	3	17
159	下滝	SH20 (4・5-1東-C8-a5, a6)	5	3	17
160	下滝	SH01 (5-1西-C8-i1, i2)	5	3	17
161	下滝	SH09 (6-2中-D3-f3, f4)	5	4	16
162	下滝	SH02 (2-C10-d8)	5	4	16
163	下滝	SH06 (4・5-1東-B7-h8, h9)	4	5	16
164	下滝	SH19 (4・5-1東-C8-a3)	5	4	16
165	下滝	SH02 (5-2・6-1-C5-h8, i8)	5	4	16
166	下滝	SH02 (5-2・6-1-D5-a4, a5)	5	4	16
167	下滝	SH06 (6-2中-D3-g7, h7)	4	4	16
168	伊場	NB324	5	4	16
169	伊場	NB330	4	4	16
170	下滝	SH05 (2-B11-h6)	4	4	15
171	下滝	SH05 (7-E7-e8, f8)	4	4	15
172	下滝	SH01 (2-B11-i4)	4	4	15
173	伊場	NB328	4	4	15
174	下滝	SH01 (3-B9-g3, h3)	5	3	15
175	下滝	SH04 (2-B11-g6, h6)	4	4	15
176	下滝	SH01 (5-1西-D7-a2)	4	4	15
177	下滝	SH18 (5-1西-C8-b4)	4	4	15
178	宮竹野際	SH901	3	4	14
179	伊場	NB305	4	4	14
180	下滝	SH30 (7-E7-j1)	4	3	14
181	伊場	NB310	4	3	14
182	伊場	NB302	4	3	14
183	下滝	SH09 (2-B11-i7)	4	3	14
184	下滝	SH02 (2-B11-i4)	3	5	14
185	下滝	SH21 (4・5-1東-B8-f5)	5	3	14
186	下滝	SH25 (4・5-1東-B8-h6, i6)	5	3	14
187	下滝	SH02 (5-1西-C8-g1)	5	3	14
188	下滝	SH10 (4・5-1東-B8-i4, j4)	4	3	13
189	下滝	SH04 (6-2南-D3-g6, h6)	4	4	13
190	下滝	SH10 (6-2中-D3-e4)	4	4	13
191	下滝	SH26 (7-E7-j7, j8)	4	4	13
192	下滝	SH03 (2-C10-d8, e8)	4	4	13
193	下滝	SH08 (4・5-1東-C7-a9, b9)	4	4	13
194	下滝	SH05 (5-1西-C8-e2, f2)	4	4	13
195	下滝	SH12 (5-1西-C8-c1)	4	4	13
196	下滝	SH16 (5-1西-C8-b3)	4	4	13
197	下滝	SH03 (6-2南-D4-f2, g2)	4	4	13
198	下滝	SH04 (6-2南-D4-f3, g3)	4	4	13
199	笠井若林	**SH209**	**3**	**5**	**13**
200	恒武西宮	SH201	2	6	13
201	下滝	SH01 (5-1西-C6-i9)	4	3	13
202	伊場	NB308	4	3	12
203	下滝	SH22 (3-C8-a8)	3	4	12
204	下滝	SH10 (2-C10-e8)	5	3	12
205	下滝	SH31 (7-E7-h1, i1)	4	3	12
206	下滝	SH10 (2-B11-i7, i8)	4	3	12
207	下滝	SH01 (4・5-1東-B7-e10)	4	3	12
208	下滝	SH02 (4・5-1東-B7-c10)	3	4	12
209	下滝	SH02 (4・5-1東-B8-h1)	4	3	12
210	下滝	SH37 (4・5-1東-B8-c2)	3	4	12
211	下滝	SH01 (6-2北-D2-j4, j5)	3	4	12
212	宮竹野際	SB01	3	4	12
213	下滝	SH05 (4・5-1東-B7-i8, i9)	4	3	12
214	下滝	SH06 (5-1西-C8-e2, f2)	4	3	12
215	伊場	NB101	4	3	11
216	下滝	SH05 (5-1西-C7-d10, e10)	4	3	11
217	下滝	SH04 (5-1西-C7-d10)	4	3	11
218	下滝	SH07 (4・5-1東-B8-i2, j2)	3	3	11
219	下滝	SH13 (4・5-1東-B8-f3)	3	3	11
220	下滝	SH23 (4・5-1東-B8-g6)	3	3	11
221	下滝	SH02 (5-2・6-1-C6-b5)	3	3	11
222	伊場	NB326	3	3	11
223	伊場	NB331	3	4	11
224	梶子北	SH06	3	4	11
225	下滝	SH16 (4・5-1東-B8-f3, g3)	4	3	11
226	下滝	SH03 (5-1西-C8-f1, g1)	4	3	11
227	伊場	NB205	4	3	11
228	伊場	NB204	4	3	11
229	伊場	NB320	4	3	11
230	下滝	SH11 (4・5-1東-B8-j4)	3	3	10
231	下滝	SH15 (4・5-1東-B8-f3, g3)	3	3	10
232	下滝	SH18 (4・5-1東-B8-g4, h4)	3	3	10
233	下滝	SH38 (4・5-1東-B8-i7)	3	3	10
234	下滝	SH08 (5-1西-C8-e3, f3)	3	3	10
235	下滝	SH01 (5-2・6-1-C5-i8)	3	3	10
236	下滝	SH01 (5-2・6-1-D6-c1, d1)	3	3	10
237	下滝	SH12 (4・5-1東-B8-j5)	3	4	10
238	下滝	SH28 (4・5-1東-B8-b1)	3	4	10
239	下滝	SH01 (5-2・6-1-D5-a5, b5)	3	3	10
240	伊場	NB303	4	3	9
241	下滝	SH32 (7-E7-i2, j2)	4	2	9
242	宮竹野際	SB02	2	4	9
243	下滝	SH02 (7-F7-a7, a8)	3	3	9
244	下滝	SH03 (7-F7-a7, a8)	3	3	9
245	下滝	SH01 (2-C10-c9)	3	3	9
246	下滝	SH06 (2-C10-e4)	3	3	9
247	下滝	SH01 (4・5-1東-B8-h1, i1)	3	3	9
248	下滝	SH09 (4・5-1東-B8-j3, j4)	3	3	9
249	下滝	SH24 (4・5-1東-B8-f6, g6)	3	3	9
250	下滝	SH07 (5-1西-C8-e2, e3)	3	3	9
251	下滝	SH15 (5-1西-C8-b3)	3	3	9
252	下滝	SH17 (5-1西-C8-b3, c3)	3	3	9
253	下滝	SH33 (4・5-1東-B8-b1, b2)	3	3	9
254	梶子北	SH07	2	4	9
255	笠井若林	**SH211**	**3**	**3**	**8**
256	下滝	SH04 (4・5-1東-B8-h2, i2)	3	3	8
257	下滝	SH03 (5-2・6-1-D5-b5)	3	3	8
258	下滝	SH12 (2-B11-h8)	3	3	7
259	下滝	SH05 (2-C10-e6)	3	3	7
260	下滝	SH07 (2-C10-e4)	3	3	7
261	下滝	SH08 (2-C10-f6, f7)	3	3	7
262	下滝	SH22 (4・5-1東-B8-g5, g6)	3	3	7
263	下滝	SH01 (6-2北-E2-b1)	3	2	7
264	笠井若林	SH203	3	2	7
265	笠井若林	**SH210**	**2**	**3**	**5**
266	下滝	SH03 (4・5-1東-B8-h1, i1)	2	2	3
267	下滝	SH02 (6－2南-D3-e7)	2	2	3

第７表　奈良・平安時代の面積別遺構軒数

面積（m²）	掘立柱建物跡軒数	竪穴住居跡軒数
90～	1	0
80～89	0	1
70～79	1	0
60～69	0	2
50～59	4	8
40～49	5	6
30～39	32	10
20～29	70	35
10～19	126	34
1～9	28	7

掘立柱建物跡は、下滝遺跡群、伊場遺跡群、宮竹野際遺跡、九反田遺跡のデータ
竪穴住居跡は、下滝遺跡群、笠井若林遺跡１～３次調査のデータ

第７表に示したように、標準的な竪穴住居の面積とほぼ同じである。下滝遺跡の調査成果から、奈良時代に入ると、竪穴住居が小型化し、平面形は不整形になる、竈が作られない、柱穴が顕著でなくなるなどの現象が指摘された。これは、住居の主体が竪穴住居から掘立柱建物に移行するに伴って、竪穴住居の性格が、本来の住居から、掘立柱建物の付属施設に変化したことが指摘されている。

掘立柱建物の、最も出現頻度の高い面積が、竪穴住居の標準的な面積と一致することは、掘立柱建物が竪穴住居の代わりに建てられたことの根拠の1つになるであろう。

このように考えると、SH207の30㎡、SH208の26㎡という面積は、竪穴住居の面積とさほど変わらない規模であり、竪穴住居に変わる住居跡ということになってしまうが、やはり、柱穴の大きさ、深さは竪穴住居の柱穴とは一線を画する。今回は規模を判定できなかったが、SH212も同様である。このことから、住居レベルの建物とは考えられない。すなわち、家族単位のような集団が管理する建物ではなく、さらに上位の集団が管理する建物と考えられる。このことからも郡衙の一角に当たっている可能性を指摘できる。

２　規格

これらの掘立柱建物跡の桁行方向を建物の主軸として、その方向を見るとN75°EとN15°Wの二方向認められた。これは直行する方向であり、建物群の一角を調査しただけであるが、「コ」の字形に配列しているようにも見える。出土遺物から検討した時期も、９世紀後半でほぼ同時期と考えられることから、これらの建物を計画的に配置していた可能性が高い。

柱間距離については、平安時代に実在したとされる高麗尺と天平尺との比較をした。中央の国衙クラスの遺構は別として、地方でこうした尺がどれほど守られていたかは不明であるうえに、今回は柱根が残っていたわけではなく、柱の痕跡が検出できたものはその中心、柱の痕跡が検出できなかったものも、柱穴の中心に柱が立っていたものと想定して、柱穴の中心で距離を測った。そのため、高麗尺と天平尺の5cm程度の差は測定誤差に埋もれてしまう。また、高麗尺５尺と天平尺６尺がほぼ一致することも考え合わせると、今回の柱間距離の検討は、参考程度にとどめた方が良いであろう。

上記を踏まえた上で第４表（26p）を見ると、すべての掘立柱建物跡で、柱間距離が高麗尺よりも天平尺に近い値を示したことは、天平尺を採用していたかどうかは、なお検討を要するとしても、１尺30cm程度の尺度を意識した上で柱間距離を決定していた可能性は大いに考えて良いであろう。

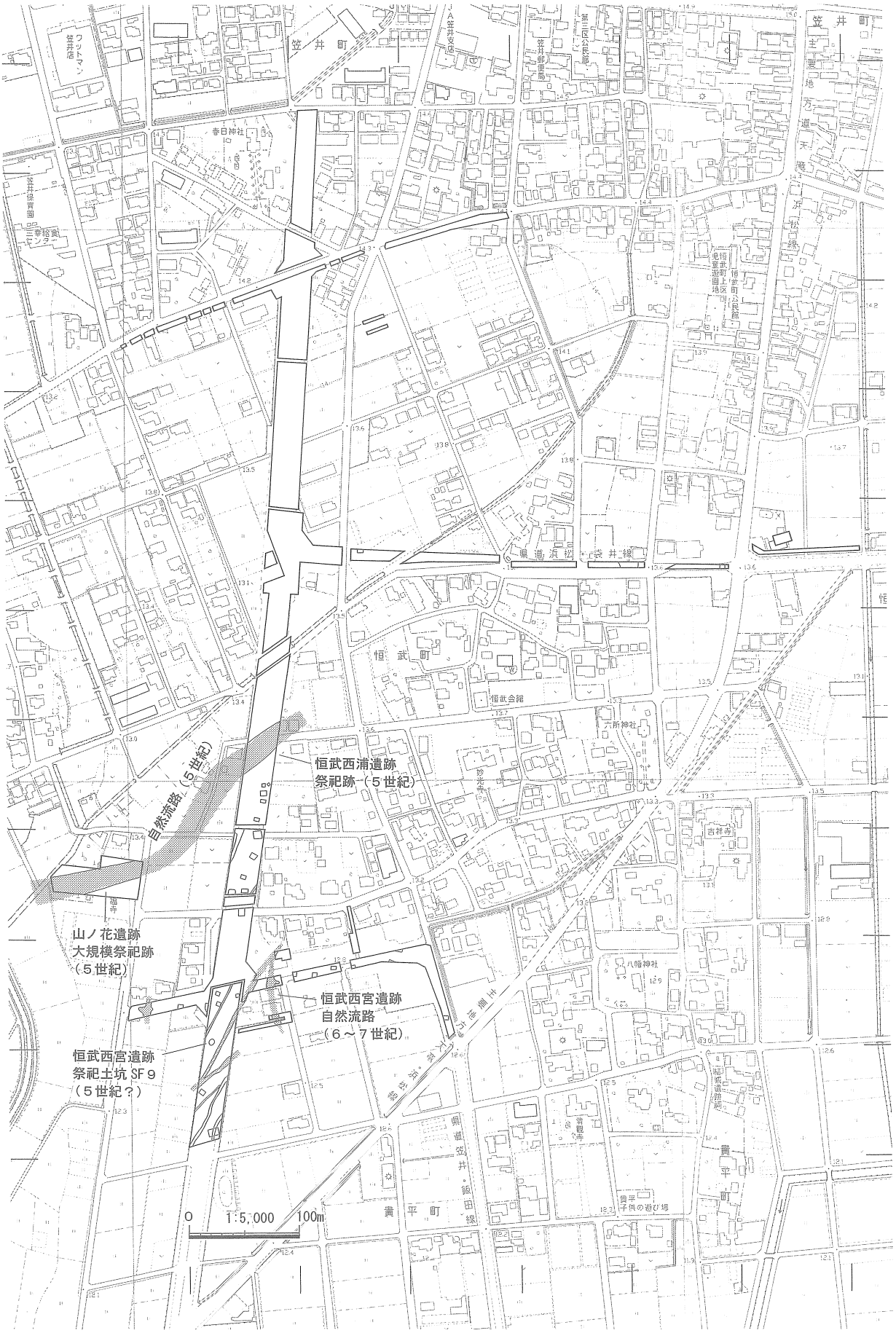
第３節　恒武遺跡群・笠井若林遺跡とその周辺遺跡での時期別遺構変遷

今回の調査で、恒武遺跡群・笠井若林遺跡とその周辺で行ってきた一連の調査は、ひとまず終了したことになる。第48図（77p）に示したように、恒武遺跡群と笠井若林遺跡に長大なトレンチを入れたようになっており、両遺跡の概要を知る上で良好な資料を提供している。これらの調査成果から、恒武遺跡群と笠井若林遺跡の遺構の変遷を見ながら、遺跡の盛衰をたどることにする。

１　古墳時代

古墳時代の遺構は、恒武西浦遺跡以南に集中している（第48図：77p）。これより北では、恒武東覚遺跡で７世紀後半の住居跡と自然流路が断片的に報告されている程度である。

恒武遺跡群に本格的に遺跡が形成されるのは５世紀からである。この時期の集落は確認されていないが、山ノ花遺跡では、５世紀の自然流路から、初期須恵器とともに、子持勾玉、勾玉形、剣形、有孔円盤などの石製模造品、木製農工具や武器形木製品、祭祀用木製品などが多量に出土した。また、恒武西浦遺跡でも、山ノ花遺跡で検出した流路と同一と思われる流路を検出し、同様に初期須恵器や木製祭祀具が出土している。さらに、恒武西宮遺跡１次調査では、200点以上の滑石製模造品などを埋納した土坑が発見されている。これらは、有力首長による大規模な祭祀が行われたことを示している。このこと



第48図　恒武遺跡群・笠井若林遺跡とその周辺遺跡の主要遺構（古墳時代）

から、５世紀にはいると急速に集落が発達したことがうかがえ、近隣にこの時期の集落が存在したことは間違いない。

古墳時代で遺構が最も多いのは６～７世紀である。この時期には恒武西宮・西浦遺跡で掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出されている。これらの遺構は特定の場所に集中することはなく、散在している状況である。また、掘立柱建物跡や竪穴住居跡の空間を埋めるように畑の畝状遺構が検出されている。これらの調査成果からは、散在する集落とその周辺に耕地が広がる景観を想定できる。

２　奈良・平安時代

８世紀に入ると、集落の中心は恒武遺跡群から笠井若林遺跡に移る（第49図：79p）。恒武遺跡群では、この時代の遺構は激減する。これに対して、笠井若林遺跡３次調査では、８世紀後半～９世紀前半の竪穴住居跡を20軒ほど調査した。おそらく笠井若林遺跡の中心になると思われる。笠井若林遺跡が最も栄えた時期でもある。

また、今回の調査では、笠井若林遺跡の北端で、８世紀～９世紀初頭の竪穴住居を14軒調査した。これに対して、笠井若林遺跡の７次調査では、同遺跡３次調査で住居跡が集中していたあたりを東西方向に調査したが、集落の広がりは確認されなかった。このことと上記の笠井若林遺跡３次調査で検出した集落と合わせて、南北方向に細長い集落域を想定できる。南北に細長い微高地の形を反映しているのであろう。

さらに詳細に見ると、集落の移動を見ることができる。８世紀前半～中頃は、今回、６－１次調査で調査した笠井若林遺跡の北端に集落が営まれる。それが廃絶した後、８世紀後半～９世紀には、６－１次調査では１軒しか検出していないが、それより南の６－２次調査と３次調査では竪穴住居跡が集中する集落を検出した。このように、笠井若林遺跡の中で、８世紀から９世紀にかけて集落が北から南に移動していると同時に、住居跡が特定地域に集中する集落が形成されていたことがわかる。

このような集落は９世紀前半でなくなる。９世紀後半以降の遺構は、さらに南に下った２次調査で掘立柱建物跡や竪穴住居跡が断片的に報告されているだけで、住居跡が集中する地域は発見されていない。

しかし、９世紀後半には、今回報告した掘立柱建物群が出現する。先に検討したように、郡衙の一部に当たっている可能性があり、近隣にこの時期の集落があったと思われるが、今のところこの時期の集落は確認されていない。ただし、住居跡が集中するような集落は確認されていないが、笠井若林遺跡の２次調査では９世紀後半～10世紀前半の掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出されており、同遺跡の４次調査では、９世紀後半の住居跡が検出されていることから、散在的な集落が形成されていることは間違いないようである。

３　鎌倉時代以降

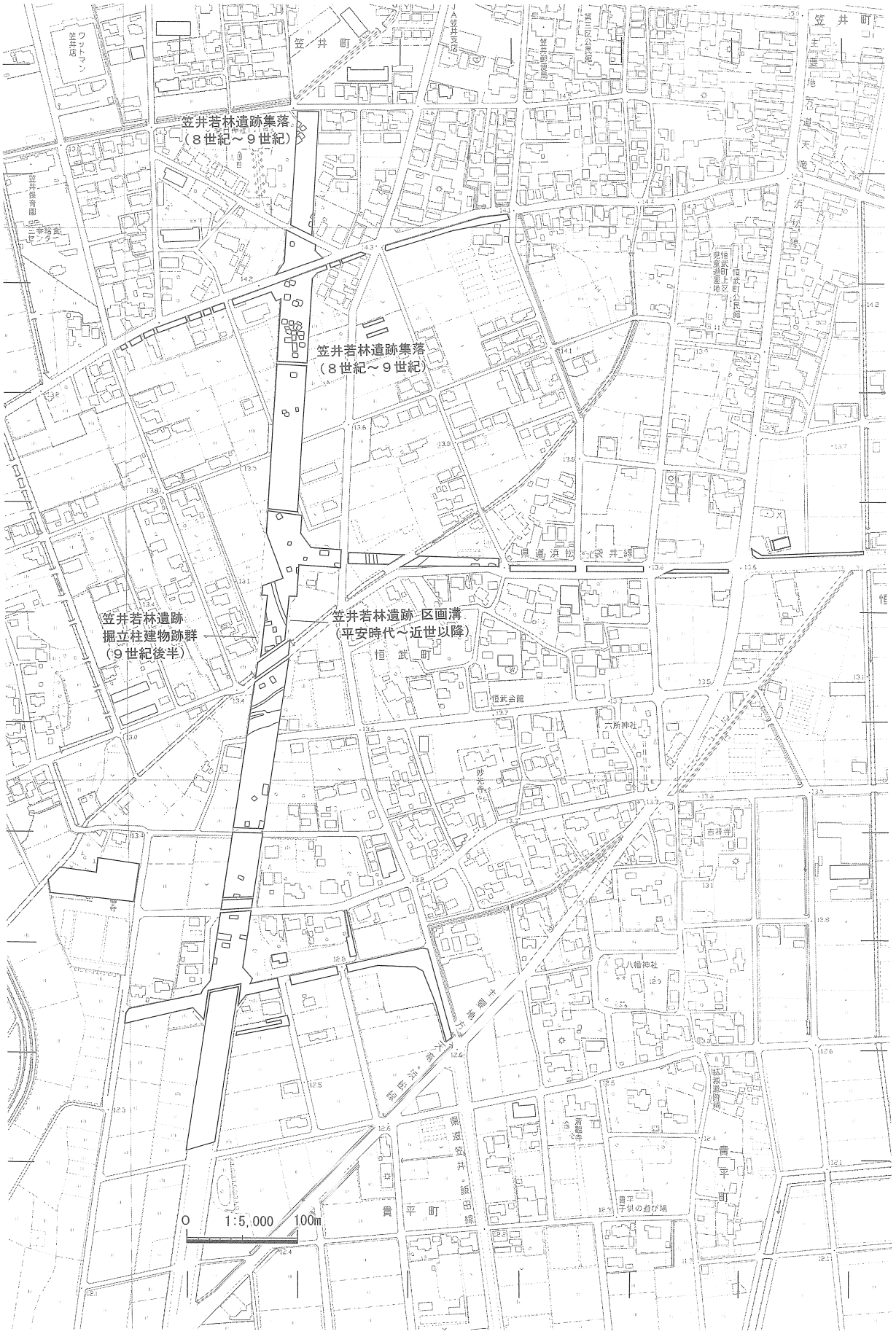
10世紀後半以降、15世紀中頃までは遺構、遺物とも少ない時期が続く。

15世紀中頃～後半には再び遺物が増えるようになり、集落が見られるようになる。最盛期は16世紀～17世紀初頭で、恒武遺跡群、笠井若林遺跡全体で集落が見られるようになる（第50図：80p）。遺物量は、笠井若林遺跡では、遺跡の南側、２・３次調査区に多く、今回調査した北側では極端に少ないことから、主要な居住区は、笠井若林遺跡の南半よりも南と考えられる。

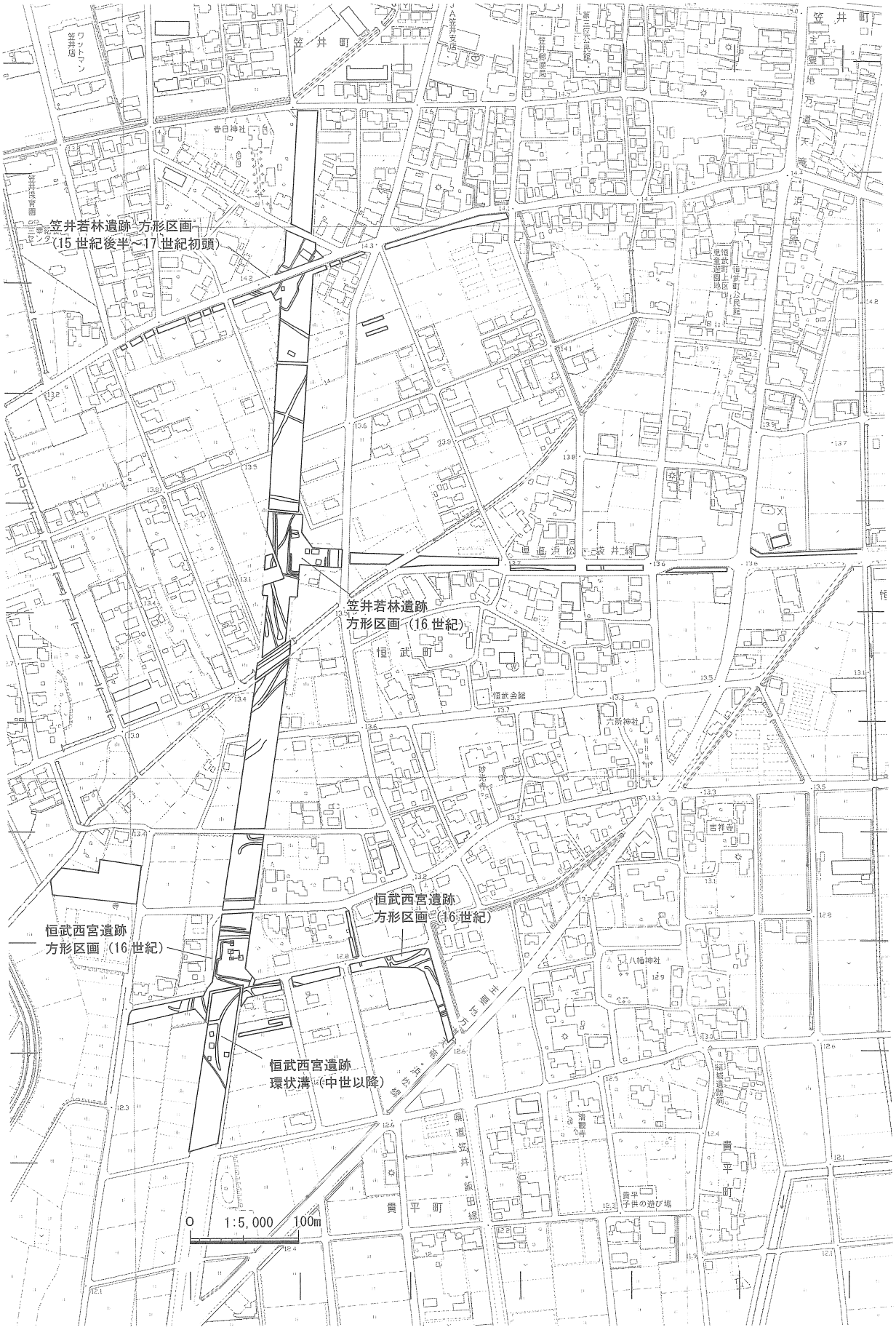
鎌倉時代以降の集落では、方形区画溝に囲まれた集落が目を引く。方形区画は、東西・南北方向のものと、北を基準とした場合、やや東に振れるものがある。この地割は、現在の地割ともほぼ一致しているものがあることから、現在の地割の発生を考える資料となる。

最後になりましたが、現地調査にあたっては、下記の方々から、貴重な御教示をいただきました。記して御礼申上げます。

佐藤由紀男、佐野一夫、鈴木一有、鈴木敏則、辰巳 均、松下一明（敬称略、五十音順）



第49図　恒武遺跡群・笠井若林遺跡とその周辺遺跡の主要遺構（奈良・平安時代）



第50図　恒武遺跡群・笠井若林遺跡とその周辺遺跡の主要遺構（鎌倉時代以降）

第４節　鎌倉・室町時代遺物について

今回の調査で出土した鎌倉・室町時代遺物の総量と当研究所が2004年に報告した恒武東覚遺跡で出土した鎌倉・室町時代遺物の総量を第８表（82p）にまとめた。これは、菊川市（旧菊川町）横地城の総合調査や磐田市（旧福田町）元島遺跡、島田市矢崎遺跡、そして、恒武遺跡群の過去の調査などで実施してきたもので、今回の調査では、鎌倉・室町時代の集落から外れた部分を調査したため、全体的に鎌倉・室町時代の遺物は少ない。しかし、遺物総量のデータは悉皆調査をすることで、初めて活用できるため、鎌倉・室町時代研究における基礎データの一環として掲載する。データの掲載方法は当研究所2002に従っている。

山茶碗については、時期別に示した。時期はⅢ期、13世紀が主体となる。産地は、すべて湖西・渥美産であるため、編年は、後藤2004に従った。

鍋類は、元島遺跡（当研究所1999）の分類によった。今回出土した鍋は、すべて内耳鍋で、内湾形ばかりである。また、出土場所は６－２次調査で集中して出土している。

かわらけは、成形方法で分類した。時期は16世紀～17世紀前半で、すべて非ロクロ成形である。

貿易陶磁もわずかながら確認できた。龍泉窯系の碗類以外は、16世紀の白磁を確認しただけである。

瀬戸・美濃系施釉陶器も少ないが、確認できたため、第８表（82p）にまとめた。編年は、藤澤良祐氏の編年によっている。

参考文献

菊川町教育委員会2000『横地城跡総合調査報告書　資料編』
後藤建一2004「渥美・湖西中世窯の概観」『東海地方山茶碗研究の現在と課題』文部科学省特定領域研究「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」班
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1999『元島遺跡Ⅰ（遺物・考察編１－鎌倉・室町時代－）』
浜松市博物館1997『梶子北遺跡　遺構編』　財団法人浜松市文化協会
浜松市立郷土博物館1977『伊場遺跡遺構編』浜松市教育委員会
浜松市博物館1994『下滝遺跡群』財団法人浜松市文化協会
浜松市博物館1994『宮竹野際遺跡２』財団法人浜松市文化協会
藤澤良祐1993「瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史　陶磁史編四』瀬戸市
松井一明1989「宮口古窯群と清ヶ谷古窯群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会１

恒武東覚遺跡の追加資料（第51図、第９表：82p）

浜松市恒武町にある恒武東覚遺跡については、当研究所2004『恒武東覚遺跡』で報告済みであるが、その後の追加資料を下記に報告する。追加するのは３点の山茶碗である。いずれも渥美・湖西産で、底面に墨書が見られる。

１は、文字か記号か不明だが、筆の運びから、図中に示した向きと判断した。２は「川」の文字が読み取れる。３は、ウ冠のような文字の一部と、その下に「口」を書いてあるようである。そして、その下にも墨書があるようだが、読めない。一番近い文字としては「宮」が考えられる。

第８表　笠井若林遺跡、恒武東覚遺跡出土の鎌倉・室町時代遺物一覧表

項目	破片数
山茶碗類	34
山茶碗	34
小皿	
小碗	
土師質土器類	109(12)
かわらけ	2
鍋類	107(10)
その他	
渥美・湖西産	1
壺・甕	1(1)
瀬戸・美濃産	4
皿類	1
器種不明	3
貿易陶磁	5
青磁	
碗	3
器種不明	1
白磁	
坏	1
初山窯	2
皿類	2
合計	155
調査面積	4350㎡
1㎡あたりの点数	0.04

山茶碗時期別分類一覧

	渥美・湖西Ⅰ期	渥美・湖西Ⅱ期	渥美・湖西Ⅲ期
碗	2(2)	9(9)	23(23)
小碗			
小皿			
合計	2(2)	9(9)	23(23)

かわらけ分類一覧

ろくろ	非ろくろ
	2

鍋類分類一覧

内耳鍋(くの字型)	内耳鍋(内碗型)	内耳鍋(半球型)	羽釜	合計
	104(8)		3(2)	107(10)

貿易陶磁分類一覧

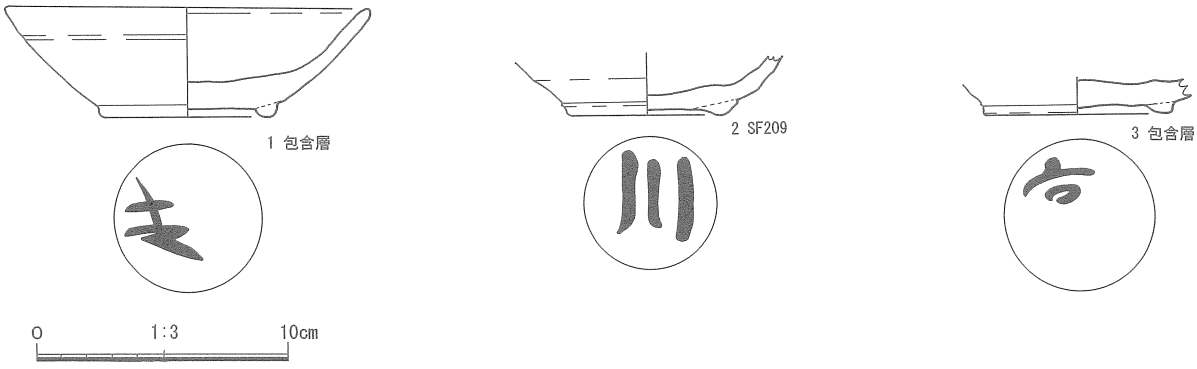
器種名		分類	年代	破片数
青磁	碗類	龍泉窯系B1類	13世紀	1
		龍泉窯系E類	(12世紀後半以降)	1
		龍泉窯系B類	12世紀	1
	不明破片		不明	1
白磁	坏		16世紀	1
合計				5

瀬戸・美濃系施釉陶器一覧表

器種名		古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期					小計	大窯製品									
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ前	Ⅳ後		1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後	小計	合計
器種不明									1	1				2			1							1	3
皿類	縁釉皿											1		1										0	1
合計									1	1		1		3										1	4

初山

器種名		古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期					小計	大窯製品									
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ前	Ⅳ後		1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後	小計	合計
皿類	鉄釉丸皿																				1			1	1
	小皿																				1			1	1
合計																					2			2	2



第51図　恒武東覚遺跡の鎌倉・室町時代資料（追加）

第９表　恒武東覚遺跡の鎌倉・室町時代資料（追加）の一覧表

図番号	図中番号	図版番号	出土遺構	種別	器種	時期	口径	高台径	器高	色調	残存率	反転実測	備考
51	1		包含層	山茶碗	碗	13C前半	14.6	6.4	4.3	灰白	80%		墨書判読不明、渥美・湖西産
51	2		SF209	山茶碗	碗	13C後半		6.0		灰白	20%		旧SF204、墨書「川」、渥美・湖西産
51	3		包含層	山茶碗	碗	13C後半		7		灰白	20%		墨書「宮」？「當」？渥美・湖西産

第10表　笠井若林遺跡検出遺構一覧表

調査次	遺構番号	大きさ	深さ	方向	時期	備考
5	SB229	300cm×270cm	10cm	—	(奈良・平安時代)	
5	SB230	—	19cm	—	7世紀末～8世紀前半	
6	SB231	—	14cm	N34°W	8世紀前半～中葉古段階	
6	SB232	—	4cm	N44°W	8世紀前半～中葉古段階	
6	SB233	—	7cm	N45°W	8世紀前半～中葉古段階	SB238出土遺物と接合する。
6	SB234	—	7cm	—	8世紀末～9世紀初頭	
6	SB235	—	25cm	—	(8世紀代)	
6	SB236	—	12cm	—	(8世紀代)	
6	SB237	—	11cm	—	(8世紀代)	旧6次調査SB230
6	SB238	—	7cm	—	8世紀前半～中葉	SB233出土遺物と接合する。
6	SB239	—	7cm	—	8世紀末～9世紀初頭	
6	SB240	—	10cm	—	8世紀末～9世紀初頭	
6	SB241	—	12cm	—	8世紀末～9世紀初頭	
6	SB242	—	10cm	—	(8世紀代)	
5	SD07	46cm	16cm	N8°E～N76°W	16世紀後半～末	
5	SD08	111cm	26cm	N2°E～N70°W	16世紀後半～末	
5	SD095	77cm	15cm	N75°W	16世紀後半～末	
5	SD096	68cm	25cm	N74°W	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD097	68cm	14cm	N57°W	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD098	66cm	29cm	N76°W	16世紀後半～末	
5	SD099	55cm	14cm	N73°W	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD100	85cm	13cm	N76°W	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD101	66cm	14cm	N7°E～N28°W	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD102	130cm	15cm	N10°W	13世紀	平安時代一括遺物 SH208、SF274と遺物接合。
5	SD103	140cm	20cm	N10°W	13世紀後半～14世紀	8Cの須恵器が混じる。
5	SD104	40cm	11cm	N76°E	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD105	45cm	18cm	N78°E	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD106	60cm	9cm	N68°E	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD107	200cm	27cm	N15°W	(室町・鎌倉時代以降)	15C～16Cの常滑焼あり。 江戸時代に掘り直し。
5	SD108	250cm	40cm	N18°W	平安時代～近世	数回の掘り直し
5	SD109-1	—	18cm	N68°E	(室町・鎌倉時代以降)	K14段階の灰釉陶器、須恵器含む。
5	SD109-2	75cm	26cm	N68°E	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD110	135cm	16cm	N68°E	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD111	70cm	7cm	N60°E	(室町・鎌倉時代以降)	
5	SD112	350cm	23cm	N10°W	15世紀中頃～後半	旧SD101
5	SD262	42cm	8cm	N24°W	(奈良・平安時代)	
5	SD263	50cm	16cm	N27°W	(奈良・平安時代)	
5	SD264	67cm	18cm	N32°W	(奈良・平安時代)	
6	SD265	87cm	27cm	N49°E～N50°W	(奈良・平安時代)	
6	SD266	110cm	30cm	N60°W	(奈良・平安時代)	
6	SD267	220cm	23cm	N59°W	(奈良・平安時代)	
6	SD268	105cm	30cm	N56°W	(奈良・平安時代)	
6	SD269	100cm	22cm	N55°W	(奈良・平安時代)	
6	SD270	96cm	14cm	N48°W	(奈良・平安時代)	
6	SD271	82cm	20cm	N53°W	(奈良・平安時代)	
6	SD272	82cm	34cm	N60°W	(奈良・平安時代)	
6	SD273	94cm	26cm	N60°W	(奈良・平安時代)	
6	SD274	85cm	17cm	N67°W	(奈良・平安時代)	
6	SD275	63cm	14cm	N37°E	(奈良・平安時代)	
6	SD276	220cm	16cm	N59°W	(奈良・平安時代)	
6	SD277	45cm	21cm	N13°E	(奈良・平安時代)	
6	SD278	46cm	20cm	N50°W	(奈良・平安時代)	
6	SD279	27cm	27cm	N60°W	(奈良・平安時代)	
6	SD280	32cm	10cm	N64°W	(奈良・平安時代)	
6	SD281	67cm	14cm	N13°E	(奈良・平安時代)	
6	SD282	48cm	6cm	N32°E	(奈良・平安時代)	
6	SD283	35cm	20cm	N62°W	(奈良・平安時代)	
6	SD284	24cm	13cm	N59°W	(奈良・平安時代)	
6	SD285	43cm	17cm	N56°W	(奈良・平安時代)	
6	SD286	28cm	17cm	N40°W	(奈良・平安時代)	
	SD287					欠番
5	SD288	60cm	15cm	N29°E	(奈良・平安時代)	
5	SD289	50cm	17cm	N62°E	(奈良・平安時代)	
5	SD290	40cm	10cm	N2°E	(奈良・平安時代)	灰釉陶器片あり。
5	SD291	52cm	11cm	N77°E	(奈良・平安時代)	
5	SD292	45cm	11cm	N15°W	(奈良・平安時代)	

調査次	遺構番号	大きさ	深さ	方向	時期	備考
5	SD293	72cm	15cm	N63°E	(奈良・平安時代)	
5	SD294	100cm	17cm	N7°W	(奈良・平安時代)	12Cの山茶碗あり。
5	SD295	70cm	34～25cm	N62°E～N10°W	10世紀	
5	SD296	60cm	11cm	N26°W～N94°E	10世紀後半～11世紀初頭	
5	SD297	55cm	13cm	N26°W	11世紀初頭以後	
5	SD298	45cm	12cm	N81°W	11世紀初頭以後	
5	SD299	70cm	12cm	N77°W～N25°E	9～10世紀以前	
	SD300					欠番
5	SD301	120cm	18cm	N17°W	9世紀～10世紀	
5	SD302	85cm	16cm	N2°E	(奈良・平安時代)	
5	SD303	60cm	23cm	N51°E～N7°W	(奈良・平安時代)	
5	SD304	90cm	16cm	N11°W	(奈良・平安時代)	
5	SD305	75cm	19cm	N17°W	(奈良・平安時代)	
5	SD306	145cm	20cm	N77°E	9世紀	K53～K90の灰釉陶器あり。
5	SD307	40cm	17cm	N71°E	(奈良・平安時代)	
6	SD308	47cm	12cm	N25°E	(奈良・平安時代)	
6	SD309	312cm	46cm	N44°E	8世紀代	
6	SD310	38cm	10cm	N51°W	(8世紀代)	方形区画溝か
6	SD311	63cm	16cm	N57°W	8世紀代	方形区画溝か
6	SD312	41cm	13cm	N26°E	8世紀代	
6	SD313	90cm	14cm	N68°W～N11°E	(奈良・平安時代)	
6	SD314	103cm	11cm	N19°E	(奈良・平安時代)	
6	SD315	50cm	9cm	N49°W	(奈良・平安時代)	
6	SE202	—	140cm	—	10世紀中葉～11世紀後半	旧6次調査SB229
6	SF264	60cm×70cm	—	—	(奈良・平安時代)	
6	SF265	45cm×55cm	24cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF266	—	16cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF267	50cm×55cm	28cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF268	40cm×50cm	19cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF269	—	21cm	—	(奈良・平安時代)	
5	SF270	70cm×110cm	17cm	—	(奈良・平安時代)	
5	SF271	60cm×60cm	15cm	—	(奈良・平安時代)	
5	SF272	70cm×55cm	19cm	—	(奈良・平安時代)	
5	SF273	75cm×75cm	21cm	—	(奈良・平安時代)	
5	SF274	100cm×110cm	3～15cm	—	9世紀中葉	SD102,107出土遺物と接合する。
5	SF275	100cm×140cm	15cm	—	9世紀後半	SH210の柱穴出土遺物と接合する。
5	SF276	210cm×80cm	25cm	—	9世紀後半	炭、焼土多い
5	SF277	—	44cm	—	(奈良・平安時代)	掘立柱建物跡の一部か
5	SF278	—	25cm	—	(奈良・平安時代)	掘立柱建物跡の一部か
6	SF279	—	36cm	—	(奈良・平安時代)	掘立柱建物跡の一部か
6	SF280	40cm×50cm	8cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF281	60cm×60cm	10cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF282	75cm×75cm	11cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF283	70cm×70cm	18cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF284	80cm×80cm	16cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF285	40cm×40cm	12cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF286	48cm×48cm	30cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF287	55cm×55cm	24cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF288	50cm×95cm	18cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF289	60cm×60cm	14cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF290	48cm×54cm	13cm	—	奈良・平安時代	
6	SF291	40cm×45cm	13cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF292	55cm×65cm	23cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF293	120cm×200cm	18cm	—	8世紀後半～9世紀初頭	
6	SF294	50cm×55cm	16cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF295	65cm×80cm	17cm	—	8世紀前半	
6	SF296	70cm×55cm	12cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF297	—	12cm	—	8世紀後半～9世紀初頭	
6	SF298	65cm×70cm	17cm	—	8世紀末～9世紀初頭	
6	SF299	38cm×38cm	19cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF300	42cm×54cm	16cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF301	35cm×35cm	16cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF302	60cm×60cm	21cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF303	62cm×74cm	15cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF304	—	38cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF305	25cm×55cm	20cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF306	45cm×50cm	32cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF307	—	8cm	—	(奈良・平安時代)	

調査次	遺構番号	大きさ	深さ	方向	時期	備考
6	SF308	52cm×66cm	30cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF309	52cm×66cm	20cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF310	40cm×45cm	30cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF311	50cm×60cm	36cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF312	70cm×92cm	21cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF313	45cm×53cm	18cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF314	32cm×32cm	25cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF315	25cm×29cm	12cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF316	—	19cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF317	45cm×50cm	35cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF318	28cm×28cm	14cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF319	35cm×35cm	12cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF320	47cm×52cm	13cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF321	44cm×55cm	17cm	—	(奈良・平安時代)	
	SF322					欠番
6	SF323	40cm×40cm	7cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF324	105cm×125cm	38cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF325	55cm×80cm	21cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF326	45cm×60cm	27cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF327	48cm×85cm	27cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF328	36cm×36cm	21cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF329	25cm×25cm	24cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF330	26cm×30cm	8cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF331	70cm×70cm	35cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF332	130cm×190cm	39cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF333	—	59cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF334	95cm×190cm	30cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF335	30cm×35cm	31cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF336	—	20cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF337	—	29cm	—	(奈良・平安時代)	
6	SF338	—	7cm	—	(奈良・平安時代)	
5	SH207	910cm×330cm	—	N75°E	9世紀代	
5	SH208	600cm×425cm	—	N15°W	9世紀後半	SD102出土遺物と接合する。
5	SH209	460cm×280cm	—	N15°W	9世紀後半	
5	SH210	250cm×200cm	—	N75°E	9世紀後半	SF275出土遺物と接合する。
5	SH211	310cm×270cm	—	N75°E	9世紀後半	
5	SH212	—	—	N75°E	9世紀代	N15°Wの可能性もある。
5	SX231	—	40cm	—	(奈良・平安時代)	旧SB237
5	SX232	120cm×100cm	6cm	—	8世紀代	

第11表　笠井若林遺跡出土遺物一覧表

図番号	図中番号	図版番号	出土遺構	種別	器種	時期	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	高台径(cm)	器高(cm)	色調	残存率	反転実測	備考
14	1	21	SH208-P5	灰釉陶器	碗	9世紀後半	20.0			9.2	5.9	灰白	50%	○	SD102と遺物接合 第42図－2と同一
14	2		SH209-P8	灰釉陶器	碗	〃	13.8			6.9	4.5	灰白	10%	○	
14	3		SH209-P7	土師器	坏	9世紀前半	12.1		6.4		3.3	浅黄橙	20%	○	丹塗り
14	4	21	SH209-P8	土師器	皿	?	14.2		7.0		2.0	にぶい黄橙	20%	○	
14	5	21	SH210-P3	土師器	坏	9世紀後半	13.0		6.6		3.6	灰黄褐	50%	○	丹塗り SF275と遺物接合
14	6	21	SH210-P3	土師器	坏	〃	11.6		6.2		3.5	にぶい黄橙	50%	○	丹塗り
14	7		SH210-P3	土師器	皿	?	15.4		10.8		2.3	にぶい黄橙	25%	○	丹塗り
14	8		SH211-P4	土師器	坏	9世紀前半	11.8		5.0		3.4	にぶい黄橙	15%		丹塗り
16	1	21	SF274	灰釉陶器	碗	9世紀中葉	15.4			7.6	4.7	灰白	99%		
16	2	21	SF274	灰釉陶器	碗	〃	15.4			8.2	5.0	灰白	50%		SD102, SD107出土 遺物と接合 第42図－1と同一
16	3	21	SF274	土師器	坏	〃	11.7		4.6		3.5	灰白	85%		丹塗り 墨書判読不能
16	4		SF274	土師器	坏	〃	12.0		5.8		3.7	灰白	25%	○	丹塗り
16	5		SF274	土師器	坏	〃	14.8		7.9		3.3	灰白	20%		丹塗り
16	6		SF274	土師器	坏	〃	13.2		6.1		3.2	灰白	20%	○	丹塗り
16	7		SF274	土師器	坏	〃	12.8				3.3	浅黄橙	30%	○	丹塗り
16	8		SF274	土師器	坏	〃	13.7				3.7	灰白	20%	○	丹塗り
16	9	21	SF274	土師器	坏	〃	12.4		4.4		3.2	浅黄橙	30%	○	
16	10		SF275	土師器	坏	9世紀後半	13.0			7.3	4.2	にぶい黄橙	20%	○	丹塗り 灰釉陶器を模倣？
16	11	21	SF275	土師器	鉢	〃	19.6			9.6	8.6	浅黄橙	90%		丹塗り SH210-P3と遺物接合
16	12	21	SF276	土師器	坏	〃	11.3		5.4		3.7	淡黄赤	90%		丹塗り
16	13		SF276	土師器	甕	〃	25.9					にぶい橙	25%	○	
20	1	22	SB230	須恵器	坏	7世紀末～ 8世紀前半	14.9		5.4		4.6	灰白	90%		渥美・湖西産
20	2		SD263	土製品	土錘	?		1.4			3.6	にぶい褐	80%		
20	3		SD295	灰釉陶器	壺	10世紀代				12.0		灰白	40%	○	
20	4		SD295	土師器	甕	8世紀代	28.0					にぶい橙	10%	○	
20	5		SD296	灰釉陶器	碗	?				6.7		灰白、暗灰	15%	○	
20	6		SD296	灰釉陶器	碗	10世紀後半～ 11世紀初頭				8.2		灰白、灰	10%	○	
20	7		SD296	石製品	硯	?					3.0	灰白	20%		
20	8		SD301	須恵器	壺	8世紀代				7.4		灰	20%	○	
20	9		SD301	灰釉陶器	碗	?				6.0		灰白、暗灰	10%	○	
20	10		SD301	土製品	土器形	?			2.4			橙	30%		ミニチュア土器
29	1	22	SB231	須恵器	坏	8世紀前半	15.0			10.2	3.9	黄灰	60%	○	外面に自然釉
29	2		SB231	須恵器	甕	〃	12.8					灰白	10%	○	
29	3	22	SB231	土師器	坏	〃	14.8		11.0		3.1	にぶい橙	90%		丹塗り
29	4	22	SB231	土師器	甕	〃	13.7					にぶい橙	40%	○	
29	5		SB231	土師器	甕	〃	27.6					淡橙	20%	○	
29	6		SB231	土師器	甕	〃			6.0			灰白	10%	○	
29	7		SB232	土師器	坏	〃	14.6		10.9		3.1	橙	10%	○	丹塗り
29	8		SB232	土師器	坏	〃	11.9		6.0		3.2	にぶい黄橙	10%	○	丹塗り
29	9		SB232	土師器	甕	〃	21.6					橙	10%	○	
29	10		SB232	土製品	土錘	?		1.5				にぶい黄橙	90%		
29	11		SB232	土製品	土錘	?		1.1				にぶい黄橙	90%		
29	12		SB232	土製品	土錘	?		1.2				にぶい黄橙	90%		
29	13		SB233	須恵器	坏	8世紀前半	15.2				5.3	灰白、灰	15%	○	渥美・湖西産
29	14	22	SB233	須恵器	平瓶	〃			15.8			黄灰 灰オリーブ	30%	○	
29	15	22	SB233	須恵器	蓋	8世紀中葉古段階	15.4				3.2	灰白	40%	○	
29	16	22	SB233	須恵器	蓋	8世紀前葉	16.9				4.2	灰,灰白	50%	○	渥美・湖西産
29	17	22	SB233	須恵器	蓋	7世紀後葉	13.8				3.3	灰白	90%		ヘラ記号 外面自然釉
29	18		SB233	土師器	坏	8世紀中葉古段階	14.6					にぶい橙	50%	○	丹塗り
29	19	22	SB233	土師器	皿	〃	15.4		9.7		2.7	橙	80%		丹塗り
29	20		SB233	土師器	甕	?	18.6					にぶい橙	10%	○	SB238と遺物接合
29	21	22	SB238	須恵器	坏	8世紀前半	14.8			8.4	4.7	灰オリーブ	15%	○	
29	22		SB238	土師器	坏	8世紀中葉	12.8		8.0		3.0	浅黄橙	40%	○	丹塗り
30	1	23	SB234	須恵器	皿	8世紀末～ 9世紀初頭	15.7	16.2	11.4		2.5	灰	50%		
30	2	23	SB234	土師器	坏	8世紀末～ 9世紀初頭	11.4		5.8		4.1	にぶい橙	50%	○	
30	3	23	SB234	土師器	皿	〃	16.5		11.2		2.4	にぶい黄橙	10%	○	丹塗り
30	4	23	SB234	土師器	皿	〃	17.7		13.0		2.0	にぶい橙	95%		丹塗り
30	5	23	SB234	土師器	皿	〃	17.2		13.6		2.1	にぶい橙	10%	○	丹塗り
30	6	23	SB234	土師器	皿	〃	15.4		12.2		2.2	にぶい黄橙	25%	○	丹塗り
30	7		SB234	土師器	甕	〃	15.6	16.0				浅黄橙	20%		
30	8		SB234	土師器	甕	〃	24.8	26.4				灰白	10%	○	
30	9	23	SB234	土師器	鉢	〃	40.0	40.6				橙	20%		
30	10		SD278	土師器	坏	?	10.4		4.3		4.3	にぶい黄橙	30%	○	祭祀用
30	11		SD278	土師器	坏	?	7.0		2.2		4.8	橙	45%	○	祭祀用
30	12		SX231	土師器	坏	?	13.0		6.8		3.4	明褐灰	25%	○	丹塗り

図番号	図中番号	図版番号	出土遺構	種別	器種	時期	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	高台径(cm)	器高(cm)	色調	残存率	反転実測	備考
30	13		SX232	土師器	甕	8世紀代？	25.5					にぶい黄橙	20%	○	
33	1		SB239～241	須恵器	皿	8世紀末～9世紀初頭	14.2		10.3		2.3	灰	10%	○	
33	2		SB240	須恵器	盤	〃	21.7				4.3	灰白	25%	○	渥美・湖西産？
33	3		SB239	土師器	坏	〃	11.6		7.1		3.0	橙	65%		丹塗り
33	4		SB241	土師器	坏	〃	13.6				3.6	橙	20%	○	
33	5		SB241	土師器	坏	〃	14.0		8.8		4.0	橙	20%	○	
33	6	23	SB241	土師器	皿	〃	16.6				2.4	にぶい黄橙	40%		丹塗り、盤？
33	7	23	SB241	土師器	皿	〃	20.2		17.0		2.3	にぶい黄橙	75%		丹塗り
33	8		SB241	土師器	高盤	〃				7.6		橙	10%	○	丹塗り、台付皿？
33	9		SB240	土師器	高盤	〃				6.9		にぶい黄橙	10%	○	丹塗り、台付皿？
33	10		SB241	土師器	高盤	〃				9.0		浅黄橙	15%		丹塗り、台付皿？
33	11		SB240	土製品	土錘	？		1.2				にぶい黄橙	85%		
33	12		SB241	土製品	土錘	？		0.9				にぶい黄橙	90%		
35	1		SD309	土師器	甕	8世紀代			5.0			橙	30%	○	
35	2		SD309	土製品	土馬	？		2.9			4.2	にぶい橙			土馬の足
35	3		SD311	須恵器	坏	8世紀代	14.4				4.9	灰白	25%	○	
35	4		SD311	土製品	土錘	？		0.9			5.0	灰白	90%		
36	1	24	SE202	灰釉陶器	碗	10世紀後半～11世紀前半				6.6		灰白	10%	○	刻書土器
36	2		SE202	灰釉陶器	碗	10世紀中葉～後葉				6.2		灰白、灰	10%	○	
36	3		SE202	灰釉陶器	碗	11世紀前半				5.2		灰白、灰	10%	○	
36	4		SE202	灰釉陶器	碗	10世紀中葉～後葉				6.2		灰白、灰	20%	○	
36	5		SE202	灰釉陶器	碗	9世紀後葉				7.6		灰白	15%	○	
36	6		SE202	灰釉陶器	碗	10世紀後半～11世紀前半				6.8		灰白	30%	○	
36	7		SE202	灰釉陶器	碗	10世紀中葉～後葉				6.2		灰白	20%	○	
36	8		SE202	灰釉陶器	碗	11世紀後半				5.8		灰白	15%	○	山茶碗？
36	9		SE202	土製品	土錘	？		0.9				にぶい黄橙	90%		
36	10		SE202	土製品	不明	？		1.9			3.1	浅黄橙			
39	1		SF290	土師器	皿	？	13.4		9.0		2.2	にぶい黄橙	20%	○	丹塗り
39	2		SF293	土師器	坏	8世紀後半～9世紀初頭	11.8		8.0		3.2	にぶい黄橙	15%	○	丹塗り
39	3		SF294	土師器	坏	？	10.2		4.6		4.2	灰褐	97%		祭祀用
39	4		SF295	須恵器	甕	8世紀前半	23.8					灰褐	10%		
39	5	24	SF297	土師器	坏	8世紀後半～9世紀初頭	12.9		6.0		3.6	にぶい黄橙	50%	○	墨書「川西」
39	6		SF297	土師器	甕	？			6.0			にぶい黄橙	10%	○	
39	7		SF298	土師器	甕	8世紀末～9世紀初頭	24.2					にぶい褐	25%	○	
42	1		SD102	灰釉陶器	碗	9世紀中葉	15.4			8.2	5.0	灰白	50%		第16図－2と同一
42	2		SD102	灰釉陶器	碗	9世紀後葉	20.0			9.2	5.9	灰白	50%	○	第14図－1と同一
42	3		SD102	灰釉陶器	碗	9世紀中葉				7.4		灰白	10%		
42	4		SD102	灰釉陶器	碗	9世紀後葉				6.0		灰白	10%	○	
42	5		SD102	灰釉陶器	碗	9世紀中葉				6.0		灰白	10%		
42	6		SD102	灰釉陶器	碗	9世紀後葉				6.2		灰白	10%		
42	7		SD102	灰釉陶器	碗	9世紀中葉				7.0		灰白	10%		
42	8	24	SD102	灰釉陶器	皿	9世紀中葉	14.1			7.0	2.4	灰白	60%		
42	9		SD102	灰釉陶器	壺	9世紀後葉				16.2		灰白	10%	○	
42	10		SD102	土師器	坏	9世紀後半				6.8		黄灰	10%		
42	11		SD102	土師器	坏	9世紀前半	12.6		4.8		3.2	橙灰	10%	○	丹塗り
42	12	24	SD102	土師器	坏	9世紀前半	11.8		5.6		3.1	黄灰	40%	○	丹塗り
42	13		SD102	土師器	坏	9世紀前半	12.0		6.2		3.0	橙灰	30%	○	
42	14	24	SD102	土師器	皿	9世紀前半	14.8		10.3		2.0	橙灰	50%		丹塗り
42	15		SD102	土師器	皿	9世紀前半	13.8		11.0		1.5	橙灰	10%	○	
42	16		SD102	土師器	甕	9世紀前半	23.5					橙灰	10%	○	
42	17		SD102	山茶碗	碗	13世紀				6.4		灰白	10%		渥美・湖西産
42	18		SD102	石製品	砥石	？							？		
42	19	24	SD103	灰釉陶器	碗	10世紀後半	13.4			6.6	3.8	灰白	50%		
42	20		SD103	灰釉陶器	段皿	10世紀後半	14.8					灰白	10%	○	
42	21		SD107	灰釉陶器	碗	9世紀中葉	15.6					灰白	10%	○	
42	22		SD107	灰釉陶器	碗	9世紀中葉				7.8		灰白	10%	○	
42	23		SD107	灰釉陶器	碗	10世紀前半				5.4		灰白	10%	○	
42	24		SD108	灰釉陶器	碗	？				7.3		灰白	10%	○	
42	25		SD108	灰釉陶器	壺	？				9.2		灰白	10%	○	
42	26	24	SD101	土師器	甕	8世紀代	13.0	15.2	6.4		18.9	黄灰	70%		
45	1		包含層	灰釉陶器	碗	10世紀前半				8.4		灰	30%	○	
45	2		包含層	須恵器	坏	8世紀後半				6.2		灰白	10%	○	
45	3		包含層	須恵器	壺	7世紀後半	16.4	17.6				灰白	10%	○	
45	4		包含層	灰釉陶器	碗	10世紀前半？				7.4		灰白	10%	○	
45	5	24	包含層	灰釉陶器	碗	10世紀前半？				6.6		灰白	10%	○	墨書「二万」
45	6		包含層	須恵器	壺	8世紀代				14.0		灰白	10%	○	
45	7		包含層	土師器	坏	9世紀前半	12.0				3.6	にぶい黄橙	10%	○	
45	8		包含層	土師器	坏	9世紀前半	12.8				3.2	にぶい黄橙	10%	○	丹塗り
45	9		包含層	土師器	甕	8世紀代	28.6	29.2				にぶい黄橙	10%	○	
45	10		包含層	土師器	坏	9世紀代				8.6		浅黄橙	10%	○	灰釉の模倣か
45	11		包含層	山茶碗	碗	13世紀中頃～後半				7.0		灰黄	10%	○	渥美・湖西産

図番号	図中番号	図版番号	出土遺構	種別	器種	時期	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	高台径(cm)	器高(cm)	色調	残存率	反転実測	備考
45	12		包含層	山茶碗	碗	13世紀中頃～後半				6.2		灰白	10%	○	渥美・湖西産
45	13		包含層	山茶碗	小皿	12世紀末～13世紀初頭	8.6		5.0		1.6	灰白	10%	○	渥美・湖西産
45	14		包含層	土師器	内耳鍋	17世紀代	27.0	27.6				にぶい黄橙	40%	○	
45	15		包含層	土製品	不明	?						にぶい黄橙			
45	16		包含層	土製品	土錘	?		0.9				にぶい黄橙			
45	17		包含層	土製品	土錘	?		1.1				浅黄橙			
45	18		包含層	土製品	土錘	?		1.1				にぶい黄橙			
46	1		包含層	須恵器	坏	8世紀前半	14.2		5.0		4.1	灰白	20%	○	渥美・湖西産
46	2		包含層	須恵器	坏	8世紀後半	12.5		10.2		4.8	灰	10%	○	
46	3		包含層	須恵器	坏	8世紀後半	13.7		8.7		3.9	灰	40%	○	
46	4		包含層	須恵器	坏	8世紀後半			5.6			灰	30%	○	
46	5		包含層	須恵器	坏	8世紀後半	11.6			7.4	5.0	灰	40%	○	
46	6		包含層	土師器?	碗	9世紀以降	13.0		7.2		3.4	にぶい黄橙	20%	○	須恵器様の焼成
46	7		包含層	須恵器	坏	8世紀前半				9.8		灰	20%	○	
46	8		包含層	須恵器	皿	8世紀後半	13.1		8.6		1.8	灰	20%	○	
46	9		包含層	須恵器	皿	8世紀後半	22.8		15.7		3.2	灰白	10%	○	高台付
46	10		包含層	須恵器	坏	8世紀後半			12.4			灰	15%	○	
46	11		包含層	須恵器	壺	8世紀代	9.8					灰白	15%	○	自然釉
46	12		包含層	須恵器	壺	?				10.4		灰	50%	○	
46	13		包含層	須恵器	甕	?	21.0					灰	10%	○	自然釉
46	14		包含層	須恵器	蓋	7世紀後葉	10.2	12.1				灰	20%	○	
46	15		包含層	須恵器	蓋	8世紀中頃	14.7	14.9				灰	20%	○	
46	16		包含層	須恵器	蓋	8世紀前半	14.8	15.4				灰	15%	○	自然釉
46	17		包含層	須恵器	蓋	8世紀後半	16.0	16.0				灰白	20%	○	渥美・湖西産
46	18		包含層	須恵器	蓋	8世紀後半	15.8	16.4				灰白	90%		墨痕あり
46	19		包含層	須恵器	蓋	8世紀後半	17.3	18.0				灰	30%		
46	20		包含層	須恵器	蓋	8世紀前半?	14.6					灰白	10%	○	渥美・湖西産
46	21		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	9.4		4.0		3.3	にぶい黄橙	20%	○	丹塗り
46	22		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	10.4		5.2		3.2	にぶい橙	20%	○	丹塗り
46	23		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	12.2		8.3		2.8	浅黄橙	15%	○	丹塗り
46	24		包含層	土師器	坏	8世紀後葉～末	11.8		7.6		2.8	浅黄橙	80%	○	丹塗り
46	25		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	11.6		5.2		3.2	にぶい黄橙	25%	○	丹塗り
46	26		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	11.8		8.0		3.2	にぶい黄橙	40%	○	丹塗り
46	27		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	13.4		9.0		3.5	浅黄橙	40%	○	丹塗り
46	28		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	11.6		6.6		3.1	にぶい黄橙	25%	○	丹塗り
46	29		包含層	土師器	皿	8世紀後葉	14.3		10.0		2.7	にぶい黄橙	10%	○	丹塗り
46	30		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	13.0		8.0		3.0	橙	50%	○	丹塗り
46	31		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	13.6		11.0		3.7	にぶい黄橙	55%	○	丹塗り
46	32		包含層	土師器	皿	8世紀後葉	13.8		11.8		1.8	にぶい黄橙	10%	○	丹塗り
46	33		包含層	土師器	皿	?	15.6		9.0		3.1	橙	20%	○	内面黒色
46	34		包含層	土師器	皿	8世紀後葉	14.8		8.8		2.6	橙	30%		丹塗り
46	35		包含層	土師器	皿	8世紀前半	12.7		9.4		1.6	にぶい黄橙	10%	○	丹塗り
46	36		包含層	土師器	皿	8世紀後葉	15.0		12.0		2.0	にぶい黄橙	60%		丹塗り
46	37		包含層	土師器	坏	8世紀後葉	15.6					にぶい黄橙	20%	○	丹塗り
47	1		包含層	土師器	甕	7世紀代	16.6					にぶい黄橙	10%	○	
47	2		包含層	土師器	甕	8世紀後葉	20.4					にぶい橙	10%	○	
47	3		包含層	土師器	甕	8世紀後葉	19.2					にぶい橙	10%	○	
47	4		包含層	土師器	甕	8世紀後葉	21.0					にぶい黄橙	10%	○	
47	5		包含層	灰釉陶器	碗	10世紀前半				6.8		にぶい黄橙	15%	○	浜北産
47	6		包含層	灰釉陶器	碗	10世紀前半				6.6		灰黄	30%	○	
47	7		包含層	灰釉陶器	碗	9世紀前半				6.6		灰白	15%	○	
47	8		包含層	灰釉陶器	碗	10世紀後半				6.6		灰黄	15%	○	浜北産
47	9		包含層	灰釉陶器	碗	11世紀前半				7.7		灰白	40%	○	浜北産
47	10		包含層	陶器	小皿	14世紀代			6.0			灰黄	10%	○	古瀬戸
47	11		包含層	灰釉陶器	皿	9世紀後半	15.4					灰白	20%	○	
47	12		包含層	土師器	小皿	16世紀～17世紀前半	11.4				2.3	淡黄	30%	○	
47	13		包含層	土師器	小皿	16～17世紀前半	7.2				1.9	にぶい黄橙	50%	○	
47	14		包含層	須恵器	短頸壺	8世紀後葉?	11.2					灰白	10%	○	自然釉
47	15		包含層	山茶碗	碗	12世紀前半				7.6		灰黄	10%	○	渥美・湖西産
47	16		包含層	山茶碗	碗	12世紀末				7.3		灰黄	15%	○	
47	17		包含層	山茶碗	碗	13世紀前半～中頃				7.6		灰黄	10%	○	渥美・湖西産
47	18		包含層	山茶碗	碗	13世紀前半				7.2		浅黄	10%	○	渥美・湖西産
47	19		包含層	土師器	内耳鍋	16世紀後半～17世紀前半	20.8	21.4				灰白	15%	○	
47	20		包含層	土師器	内耳鍋	16世紀後半～17世紀前半	22.4	23.6				にぶい黄橙	20%	○	
47	21		包含層	土師器	内耳鍋	16世紀後半～17世紀前半	25.2	25.6			13.7	浅黄橙	45%		
47	22		包含層	土製品	土器形	?	2.6		1.8		2.5	浅黄橙	99%		ミニチュア土器
47	23		包含層	土師器	高台部	?				4.0		赤褐	10%		手捏ね
47	24		包含層	土製品	不明	?		1.9			3.9	浅黄橙			土馬の足か
47	25		包含層	土製品	不明	?		3.0			3.9	橙			?
47	26		包含層	土製品	土馬	?		3.5			6.9	灰			土馬の足

写　真　図　版

図版1

笠井若林遺跡周辺航空写真（南東方向、太平洋を望む）

図版2

笠井若林遺跡５次調査区周辺の景観（北方向を望む）

笠井若林遺跡６次調査区周辺の景観（南方向を望む）

笠井若林遺跡 5 次調査区標準土層

笠井若林遺跡 6 次調査区標準土層

図版4

笠井若林遺跡５－２次調査区全体（北方向を望む）

笠井若林遺跡６－１次調査区全体（北方向を望む）

5 ― 2 次調査掘立柱建物跡出土遺物

5 ― 2 次調査平安時代土坑出土遺物

図版6

SB231～SB233、SB238出土遺物

SB234出土遺物

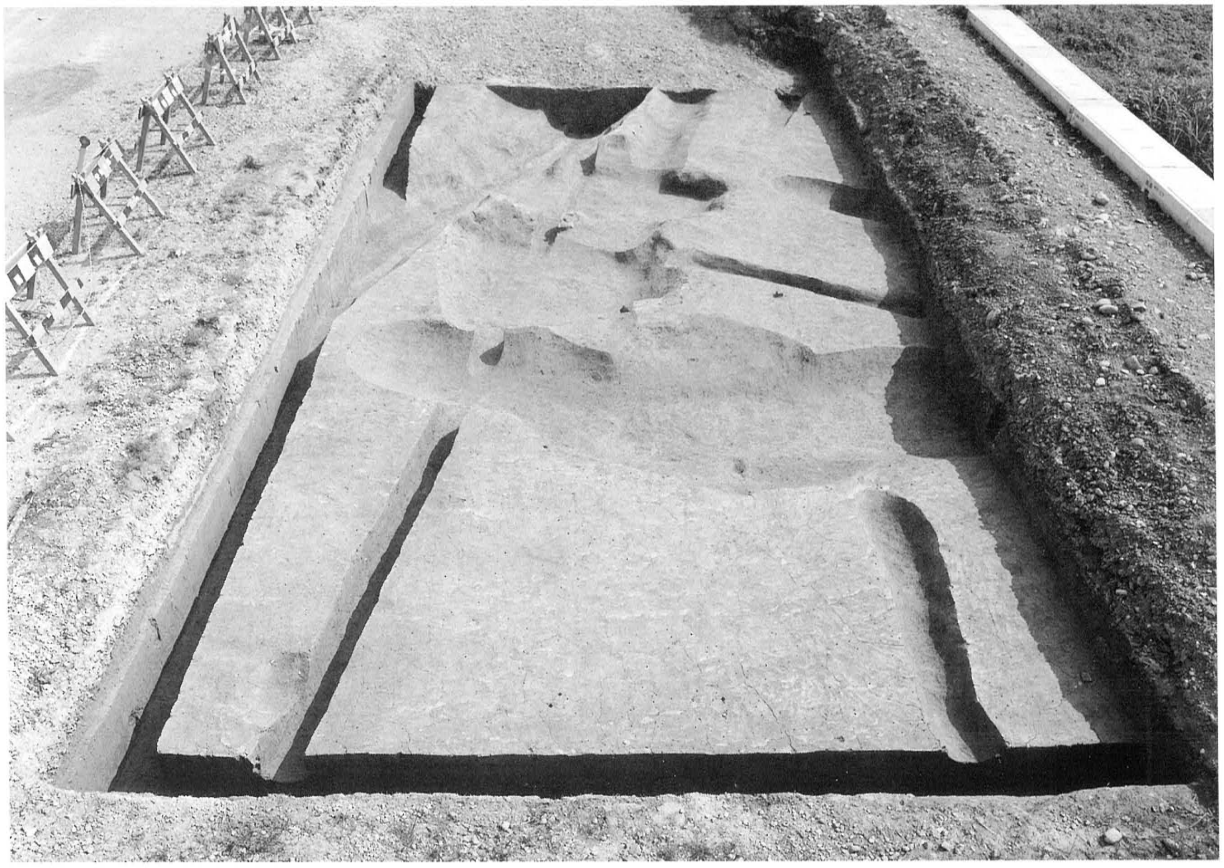
SB239～SB241出土遺物

SD102出土遺物

図版8

包含層出土奈良・平安時代の遺物

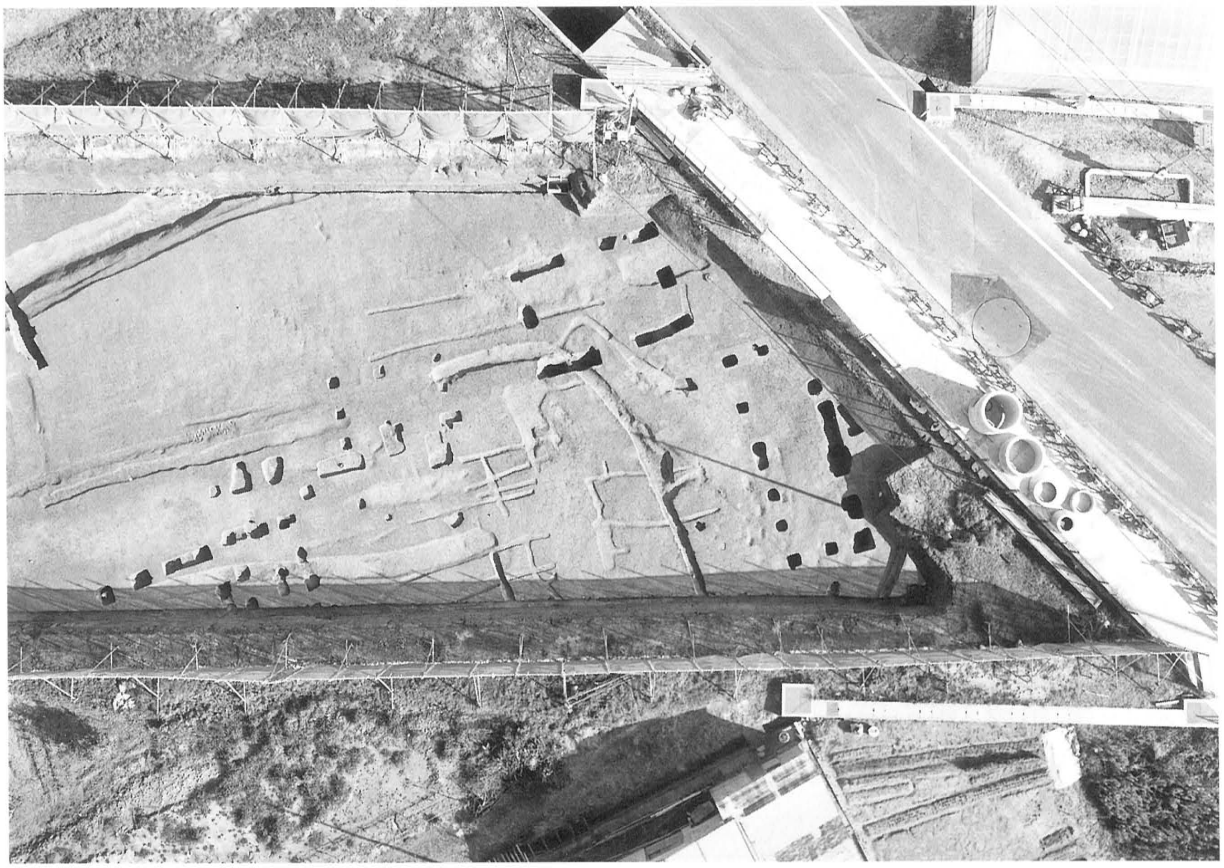
包含層出土鎌倉時代以降の遺物



恒武西宮遺跡１－２次調査古墳時代調査面完掘状況

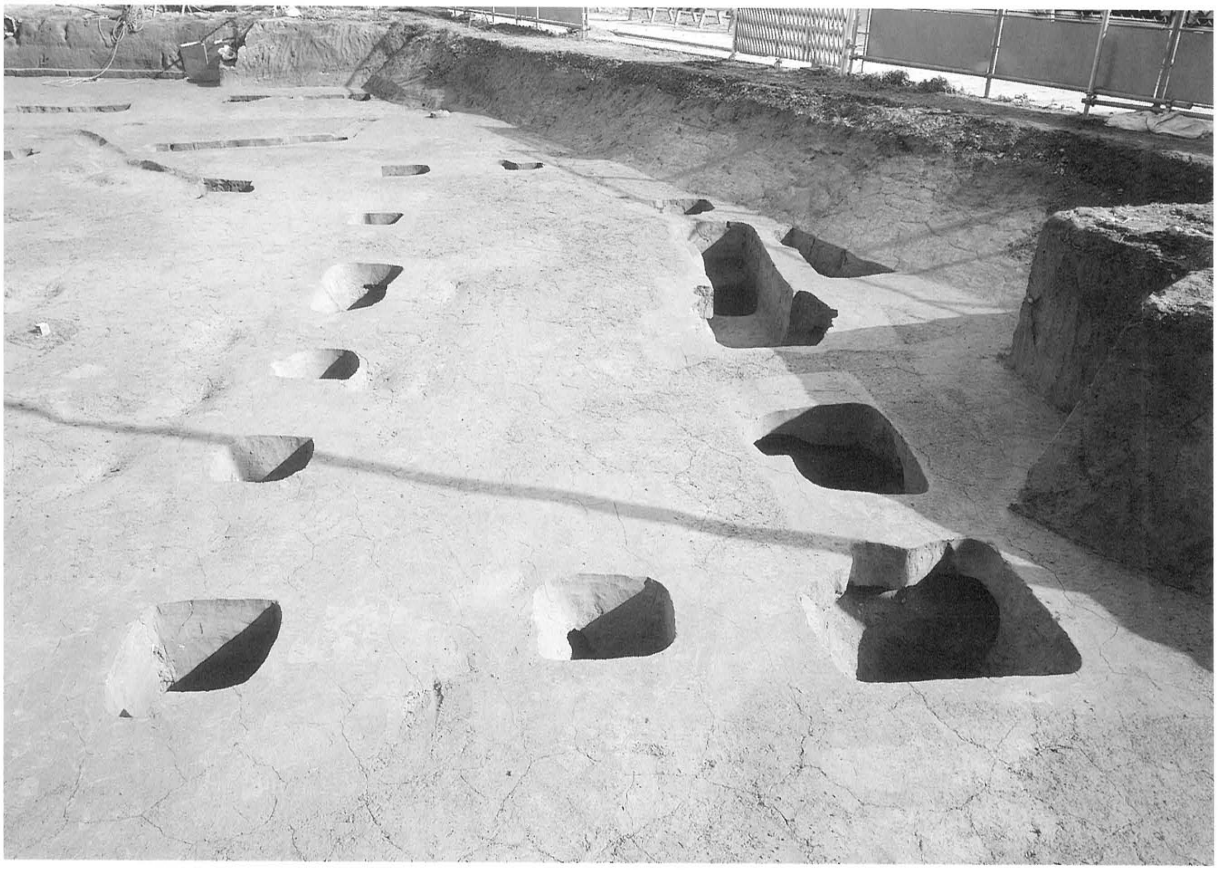
恒武西宮遺跡SR１完掘状況

図版10



5－2次調査掘立柱建物跡分布状況（真上から）

5－2次調査掘立柱建物跡分布状況（南から）



SH207完掘状況

SH208完掘状況

図版12

SH209完掘状況

SH210、SH211完掘状況

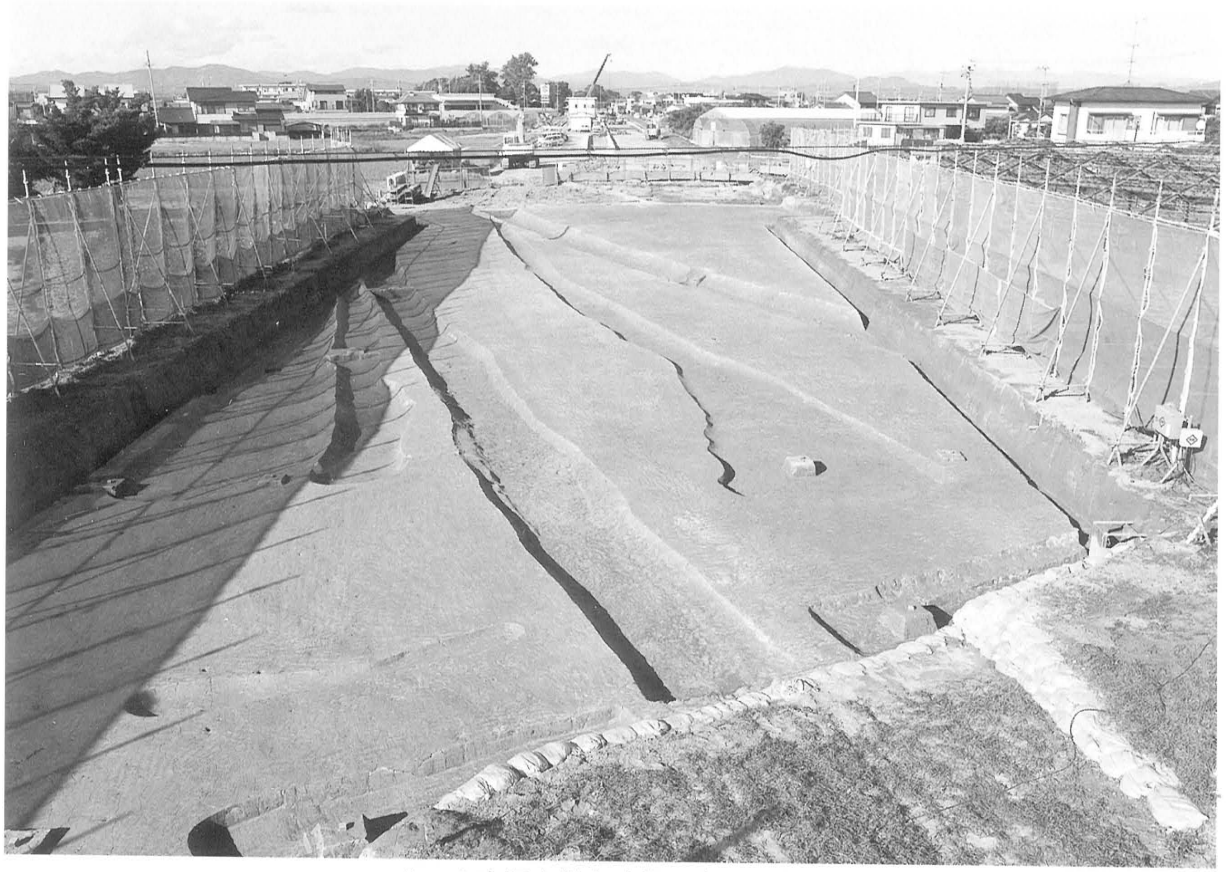
SH212完掘状況

掘立柱建物跡検出例（SH212）

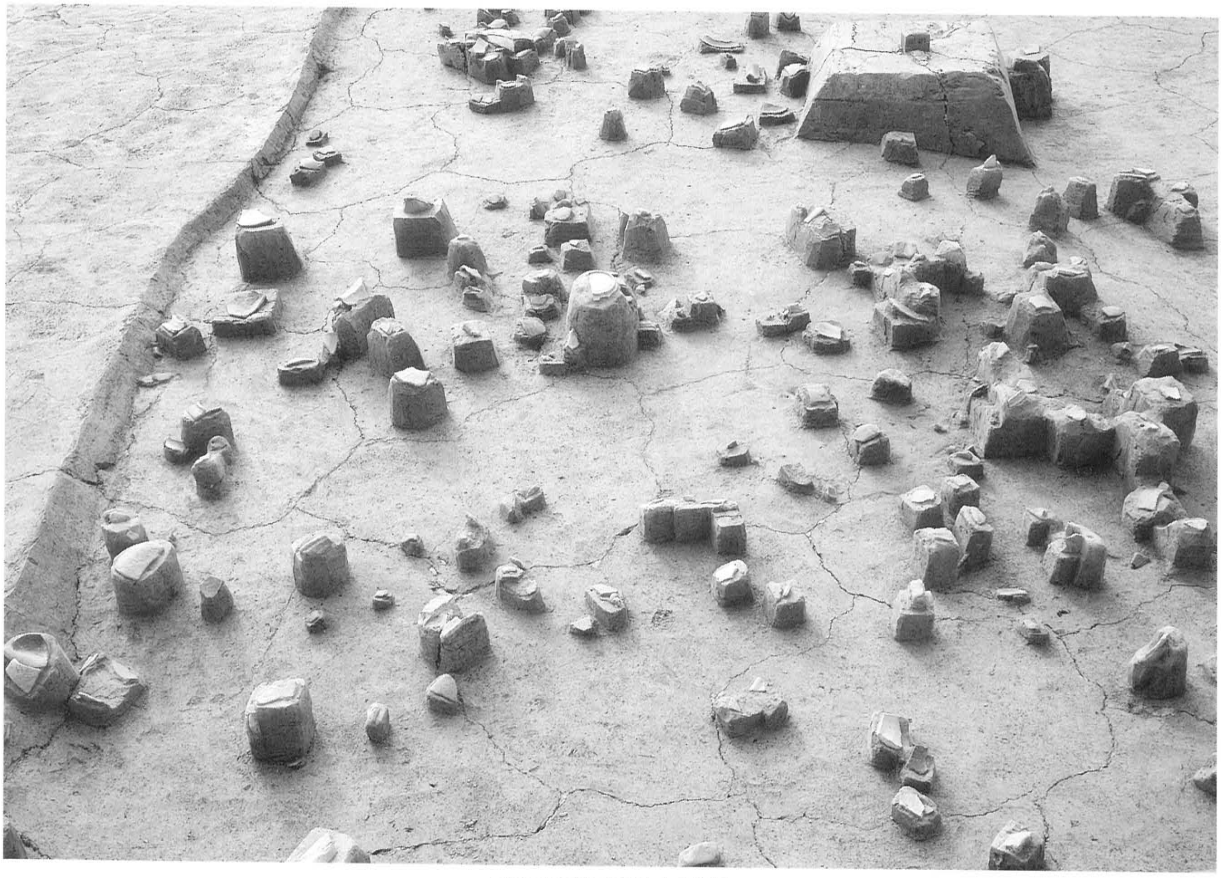
図版14

土坑SF274遺物出土状況

土坑SF275遺物出土状況



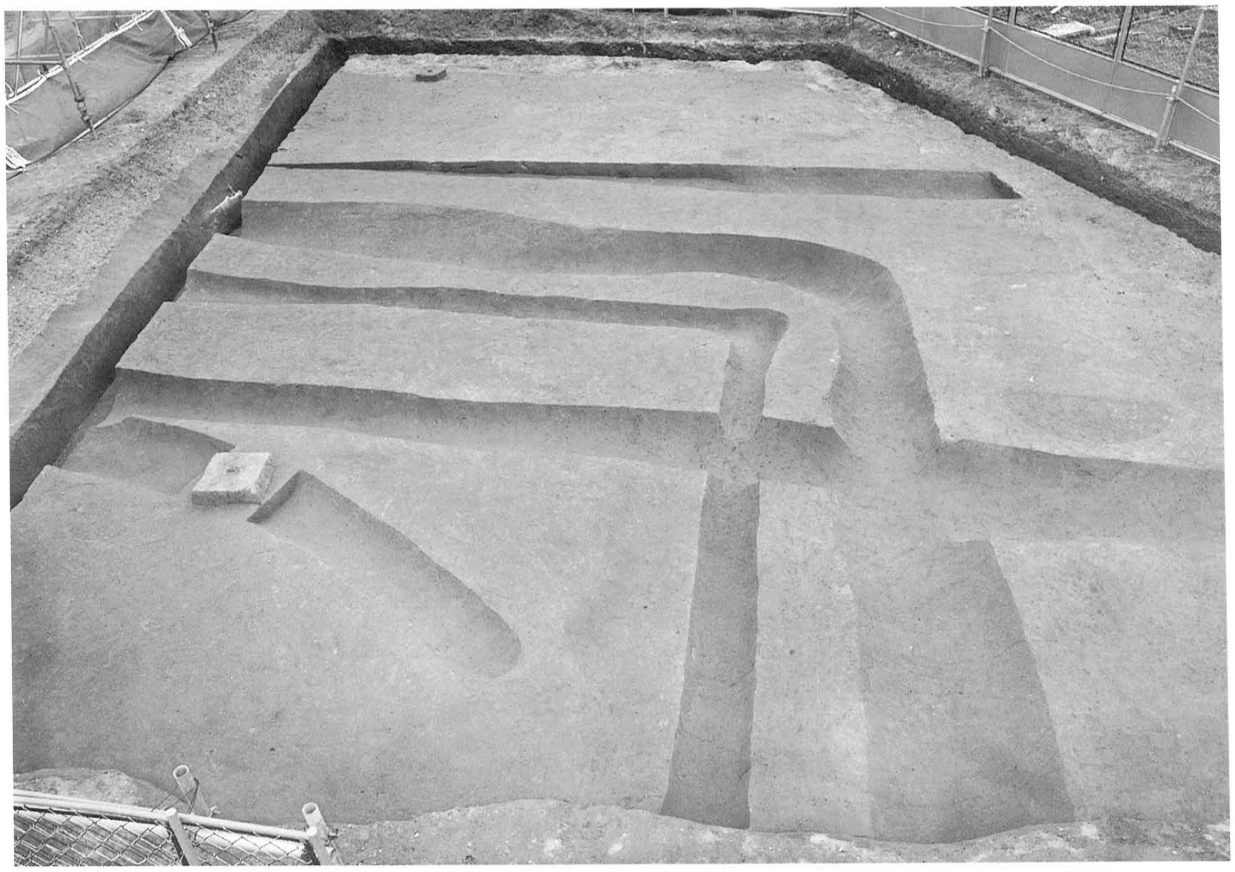
5－2次調査鎌倉時代以降の調査面



SD102遺物出土状況

図版16

5－1次調査奈良・平安時代の調査面完掘状況



5－1次調査鎌倉時代以降の調査面完掘状況

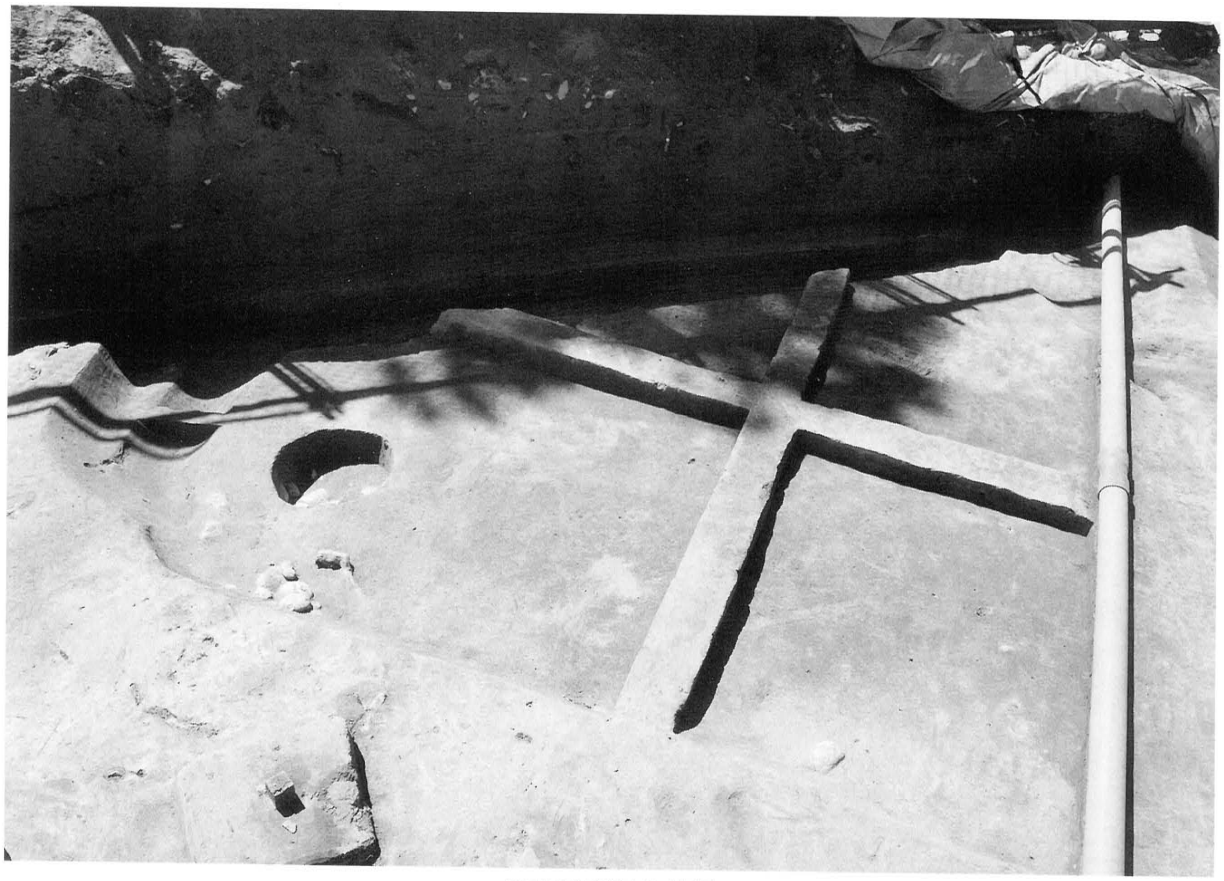
SB229完掘状況

SB242完掘状況

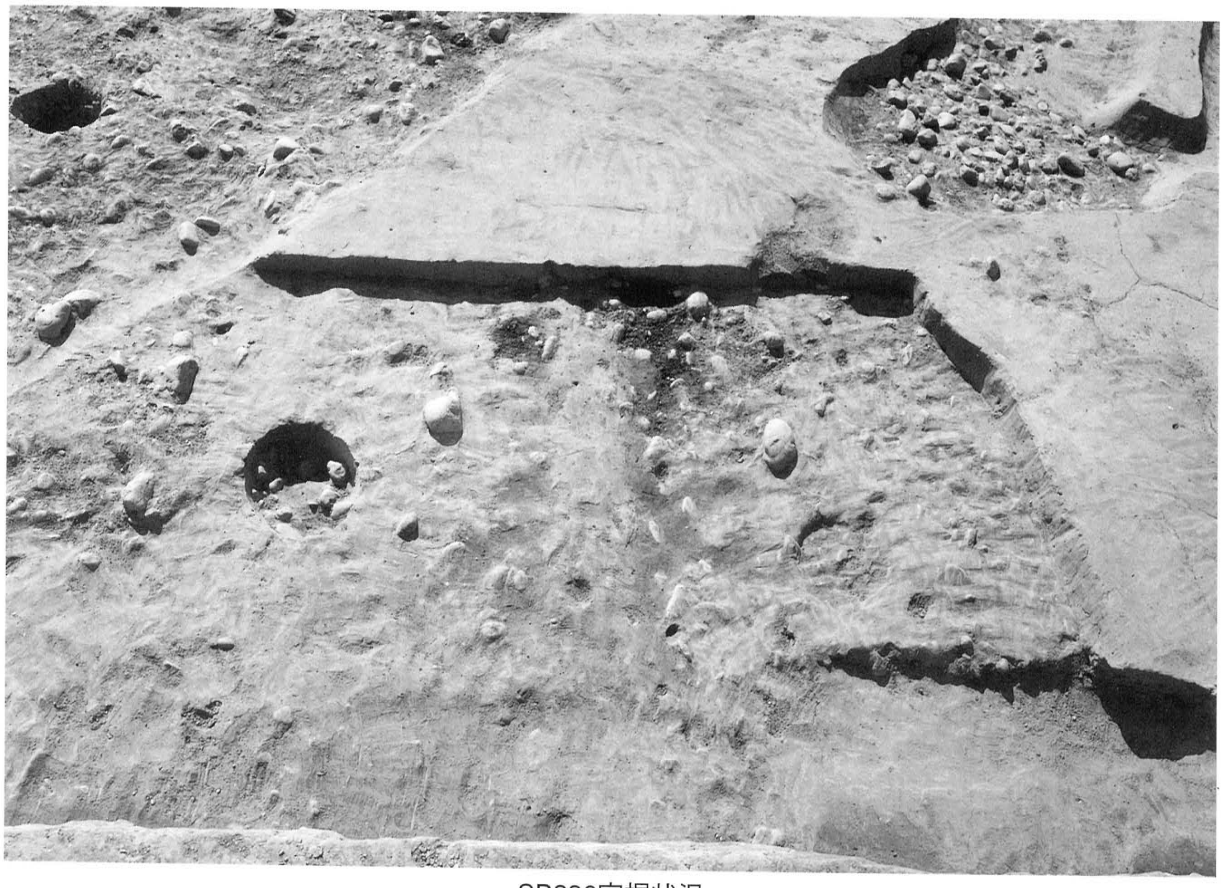
図版18

SB231完掘状況

SB231遺物出土状況



SB235床面の状況



SB236完掘状況

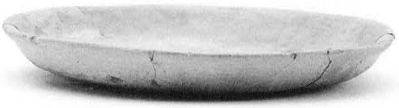
図版20

SB234遺物出土状況

SD268、SD269と湧水地？完掘状況

第14図ー1

第14図ー4



第14図ー5

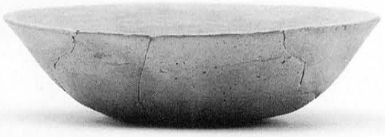
第14図ー6

第16図ー1

第16図ー2

第16図ー3

第16図ー9



第16図ー11

第16図ー12

5次調査出土の平安時代遺物

図版22

第20図ー1

第29図ー1

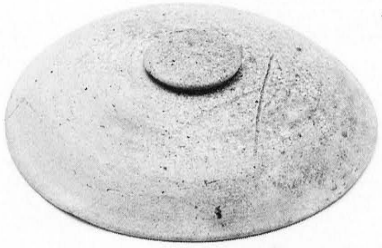
第29図ー3

第29図ー4

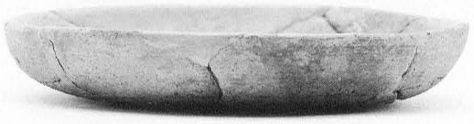
第29図ー15

第29図ー16

第29図ー17



第29図ー19



第29図ー21

第29図ー14

SB230～SB233、SB238出土遺物

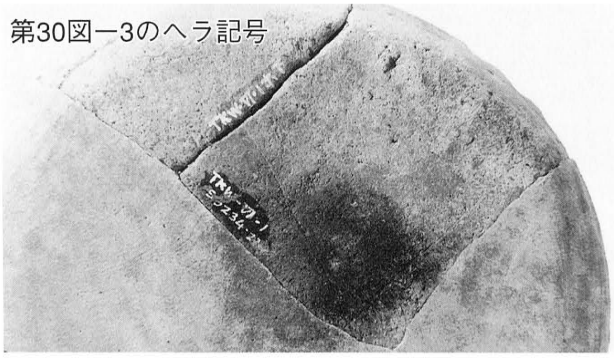
第30図ー1

第30図ー2

第30図ー3

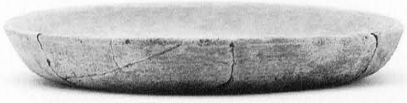
第30図ー4

第30図ー3のヘラ記号



第30図ー5

第30図ー6



第33図ー6

第30図ー9

第33図ー7

SB234、SB241出土遺物

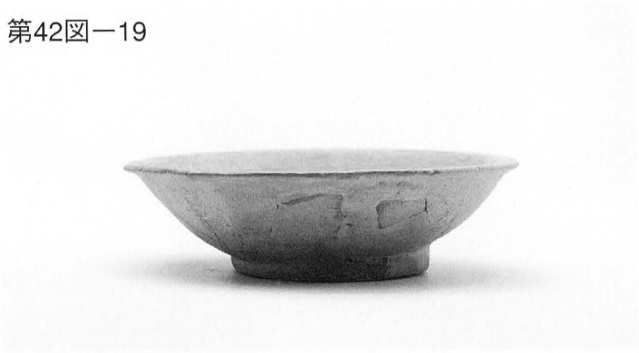
図版24

第42図ー8

第42図ー12

第42図ー14

第42図ー19



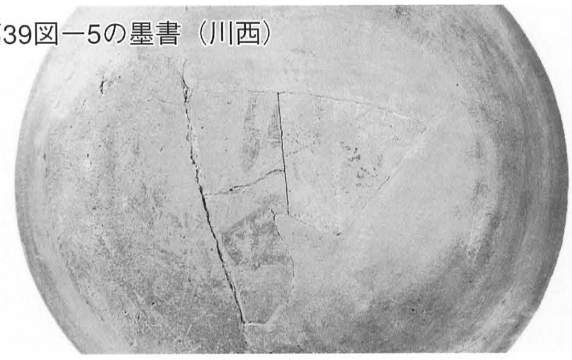
第36図ー1の刻書（約2倍）

第45図ー5
の墨書（二万）

第42図ー26

第39図ー5

第39図ー5の墨書（川西）



SE202、SD101、SD102、SF297、包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	つねたけにしみやいせきさん　かさいわかばやしいせきに
書名	恒武西宮遺跡Ⅲ　笠井若林遺跡Ⅱ
副書名	平成13年度（主）浜松環状線道路改良（一般）及び平成14・15年度（主）浜松環状線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第161集
編著者名	富樫孝志
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
発行機関	〒422－8002　静岡県静岡市谷田23－20
発行年月日	2005年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
つねたけにしみやいせき 恒武西宮遺跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 つねたけちょうあざにしみや 恒武町字西宮	22202	10－12	34度 45分 27秒	137度 47分 33秒	20020401 ～ 20020531	100㎡	浜松環状線道路改良工事
かさいわかばやしいせき 笠井若林遺跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 かさいちょうあざわかばやし 笠井町字若林	22202	10－14	34度 45分 46秒	137度 47分 37秒	20020401 ～ 20020531 20020601 ～ 20030228	180㎡ 2730㎡	浜松環状線道路改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記記事
恒武西宮遺跡	集落跡	古墳時代	自然流路1本 溝６本	土師器	
笠井若林遺跡	集落跡	奈良・平安時代 鎌倉時代以降	掘立柱建物跡６棟 竪穴住居跡14軒 溝53本 井戸１基 土坑74基 性格不明遺構２基 溝20本	灰釉陶器（墨書土器を含む） 須恵器、土師器（墨書土器を含む） 硯、土錘 山茶碗	掘立柱建物跡は、９世紀後半の郡衙関連遺構の可能性あり。 平安～江戸時代以降に続く溝あり。 方形区画溝

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第161集

恒武西宮遺跡Ⅲ
笠井若林遺跡Ⅱ

平成13年度(主)浜松環状線道路改良(一般)及び
平成14・15年度(主)浜松環状線緊急地方道道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成17年３月15日

編集発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422－8002
静岡県静岡市谷田23－20
電話　054－262－4261(代表)

印刷所　株式会社　開明堂
〒430－0904
静岡県浜松市中沢町1－1
電話　053－471－6231(代表)